

202
299

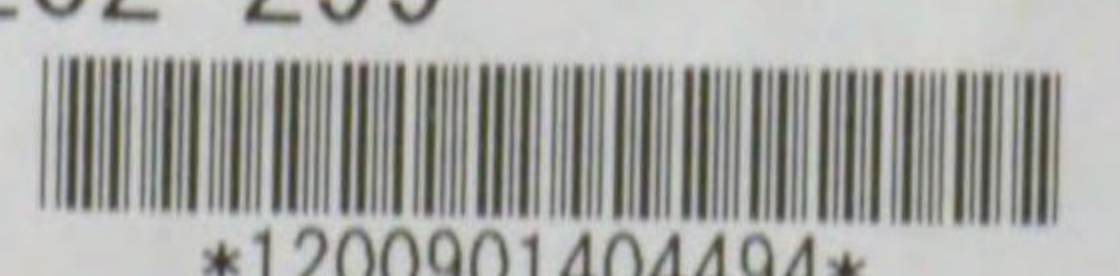
高橋常庵著

東都茶會記

第二輯



202-299



1200901404494

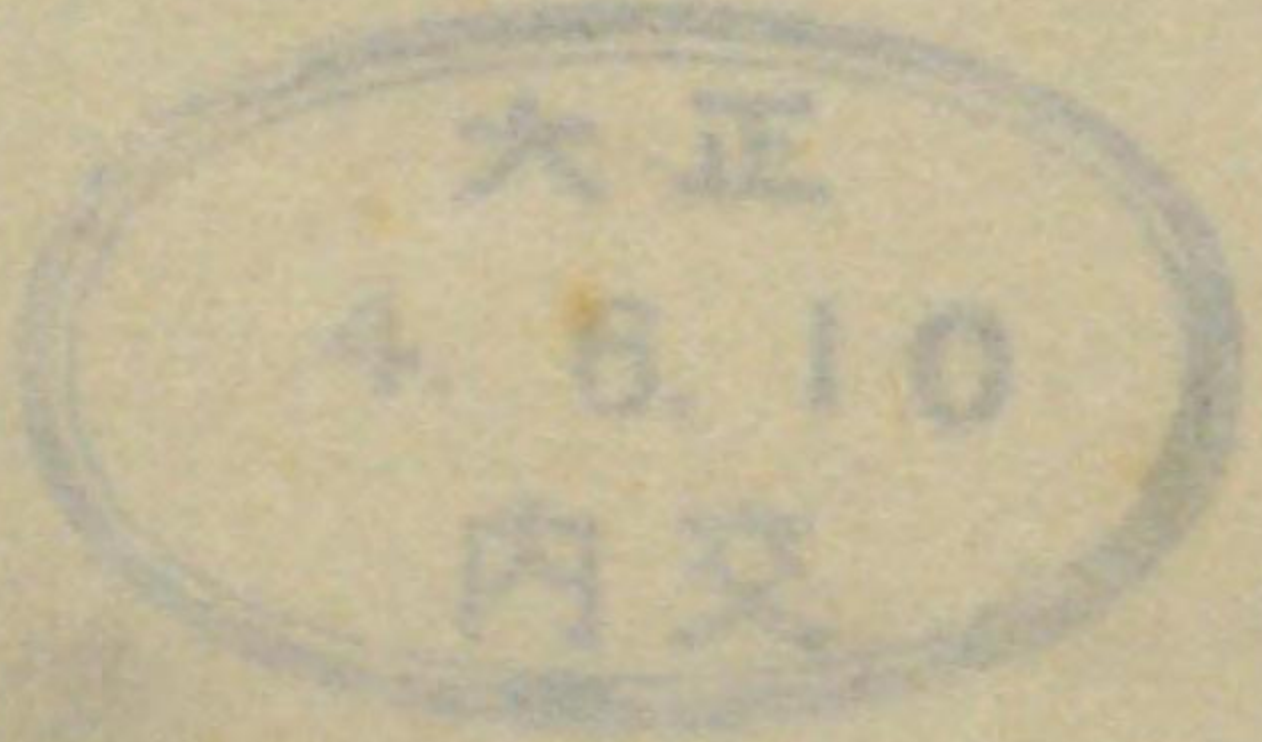


高橋義雄著

東都寮會記

第二輯

東京 高橋義雄社 發行



常庵 為橋義雄著

東都寮會記 第二輯



東京 常文社藏版



端書

余が明治四十五年一月東都茶會記を書き始めてより、茲に三年有半を経過せしが、世間同好の士人時に言を余に寄せて、茶會記事中には往々後日の參考たる可きものあり、初篇以來其切抜きを保存し居れども、斯くては煩雜に堪へざれば、あはれ一冊に取纏めて時々出版せよかしと云ふ、左れば余は去る大正三年の春、明治四十五年一月より以後二箇年餘に亘る茶會記上中下三冊を第一輯として已に出版したりしが、今回更に、大正三年三月より同十二月までの記事を採録して、此第二輯を發行するに至れ

り、斯くて、第二輯の記事は僅々九ヶ月間を出でず、殊に大正三年は其七月より歐洲大戦の突發あり、禍亂は延いて東洋に及び、終に膠州灣を攻略するなど政治に軍事に、世間極めて物騒なりしが爲め、新聞紙は戦亂記事を以て充たされ、風流茶事は其方除けと爲りて、既に認めたる茶會記の掲載を見合せたる場合も尠からず、爲に比較的記事少く、纔に此一冊子を成すに過ぎざるは、誠に已むを得ざる次第なり。

余は茶會記第二輯より、一年間の茶會記を纏めて、毎年一輯づゝ年報の如くに發行せんと欲するなり、然るに本年四月の事なり、余は日々多端に赴きつゝある茶會の消息を、従來の如き方法にて充分報道する能はざるを悟り、寧ろ茶道と題する一雑誌を發刊して、斯道凡百の記事を遺憾なく掲載せん事を思ひ立ち、之を時事新報社に諮りたるに、同社も此等記事の漸く社會に歡迎せらるゝを認め、爾後月曜日を除くの外、記事の有らん限り日々茶會記を同紙上に掲載する事を許容せられたれば、余は茶道雑誌發行を中止して、相變らず時事新報紙上に茶會記を續載する事に決せり、左れば今後茶會記事は更に従前に倍加すべく、或は六ヶ月目に一冊づゝ刊行して、上下二冊合せて一輯の年報と爲す可きやも知れず、讀者幸に之を諒せよ。

大正四年六月初旬

天馬軒に於て

箒庵居士識

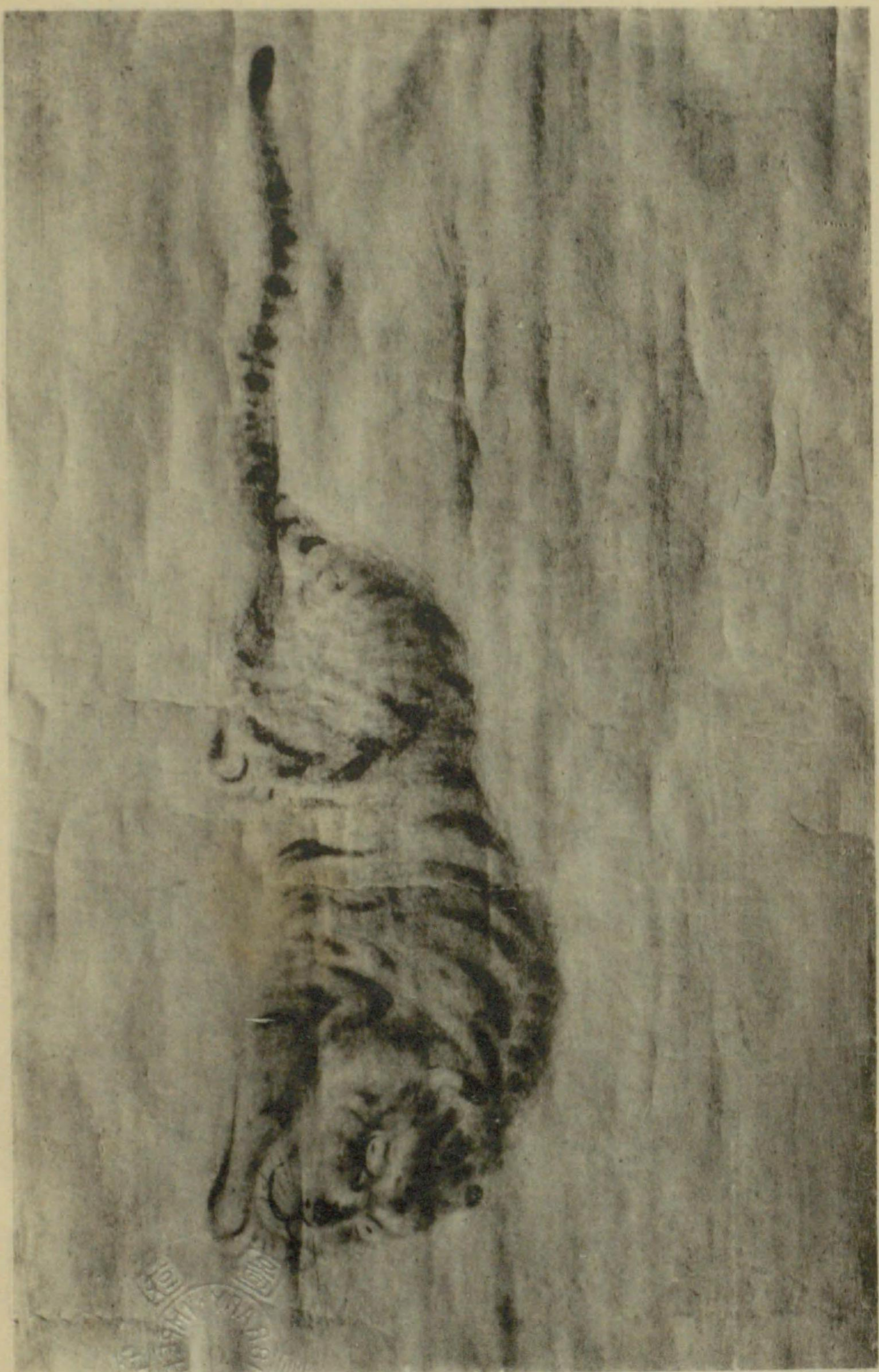
赤

紫

天馬軒

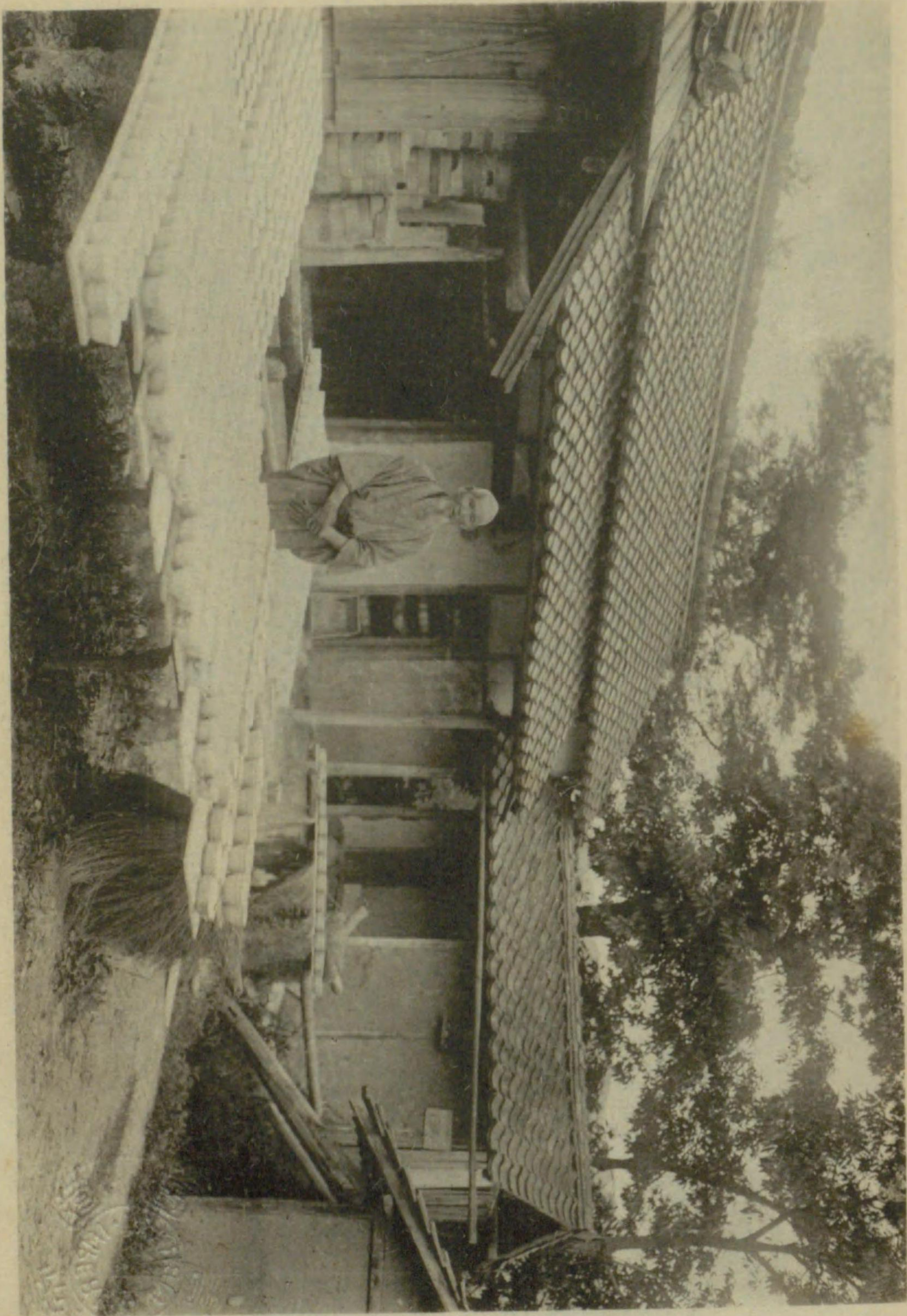


高嵩谷筆利休製園城寺竹筒圖

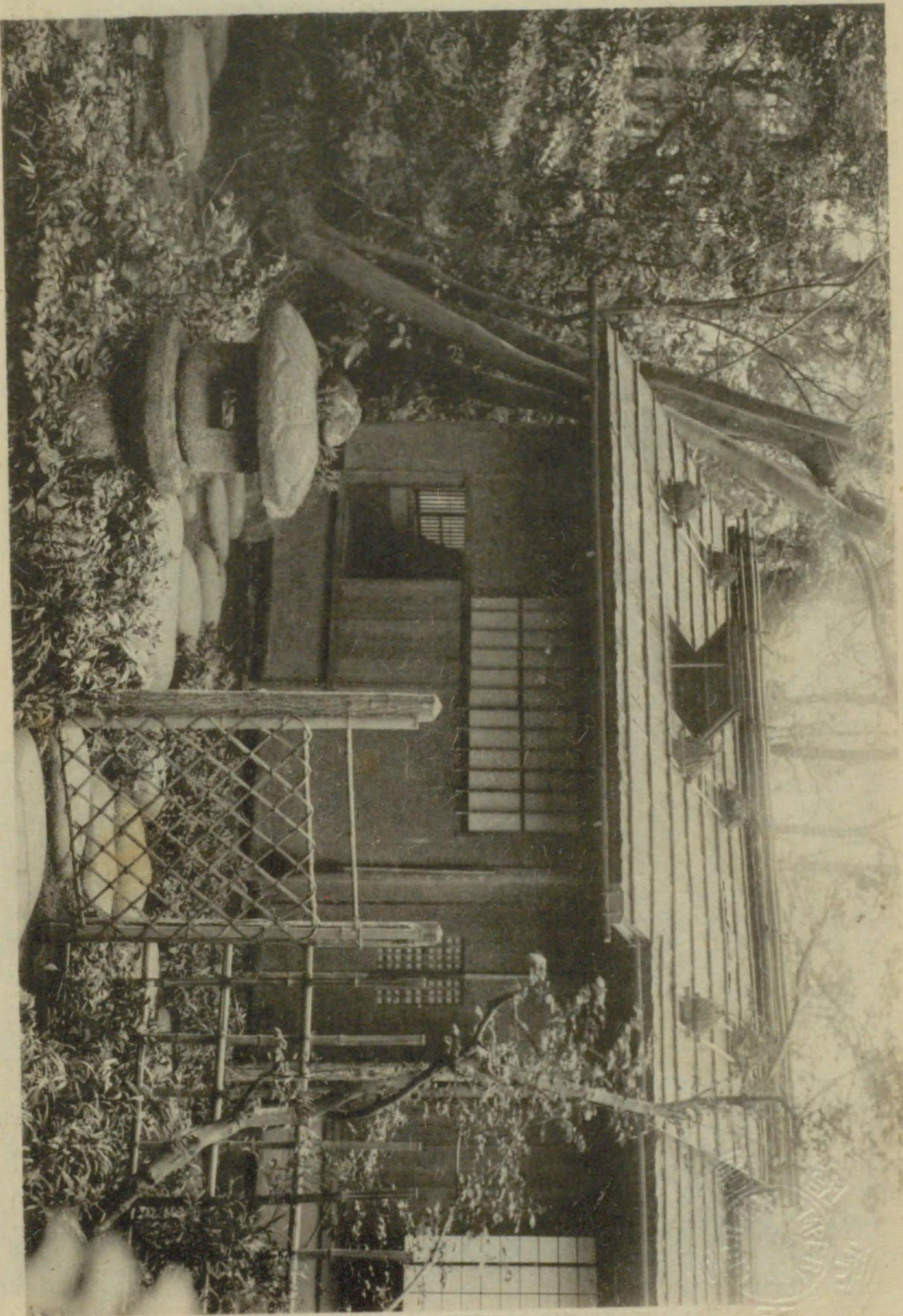


益田鈍翁所藏牧溪筆虎

白紙庵所藏雪舟筆福祿壽



瀬戸製陶家加藤作助老及其工場



山澄宗澄老根岸隣鐘庵

東都茶會記第二輯目次

- 應舉館新年茶會
- 世外侯狂歌談
- 高田氏不動會
- 福祿壽會
- 寶樹庵還曆茶會
- 坂中庵花見茶會
- 鈍阿燒品評茶會
- 松風閣讀畫會
- 吉田楓軒初風爐茶會
- 萬古燒展覽會

一頁 四 九 二二 二七 三四 四八 五七

金域名器錄

二

六三

瀬戸めぐり

八〇

函嶺幻庵茶會

一〇八

掃雲臺涼棚茶會

一一四

歸雲亭古稀茶會

一二三

心月庵主の茶會

一二七

靜和庵口切茶會

一三三

白紙庵口切茶會

一三六

根岸隣鐘庵茶會

一四三

赤坂寒翠庵茶會

一五〇

幻庵祝捷茶會

一五二

目黒靈水庵茶會

一五六

井上侯興津茶會

一六二

釜博士歲晚茶會

一六八

御殿山復讐茶會

一七八

目次終

三

東都茶會記

第二輯

箒庵 高橋義雄著

應舉館新年茶會

(大正三年一月八日)



益田鍾翁は大正三年新正第八日午後五時より御殿山應舉館に於て新年茶會を催せり。當田は應舉館入側の一角を當家所藏品中に有名なる守景筆山水十二枚張附屏風にて圍ひ、其中に銅瓶掛を置きて鐵瓶を掛け、煙草盆には麗しき吳洲山水人物模様、火入を入れ、茶盆には刷毛目の皿に梅實と昆布を盛りて、香煎に代へたる新年の趣向、残る方なし、來客は馬越恭平、團琢磨、野崎廣太、田中親美、山澄力造、余を加へて六人なり、當夜は應舉館奥の八疊の間が本席にて、床には牧溪筆睡虎の一軸を掛け、琵琶棚には

黒塗平盆の上に長さ七八寸直径二寸許りの香木を、盆石の如くに安置して、其周圍に白砂を以て波の盆景を造りたるが、是れは鈍翁が最も得意なる飾付にて、毎度採用する所なり、又一方の違棚には光琳三輪山寫の硯箱を置きたるが、言ふまでもなく當年宮中御歌題社頭の杉を當て込みたるものにして、牧溪の虎は寅年を表はしたる者ならん、尙ほ此虎は疎畫ならず、毛書きの綿密なる姿勢の見事なる人間業とも思はれず、是れぞ所謂神品にして、牧溪中一種出色の出来とも云ふべきか、扱て又傍の爐中を見れば、是れも當家に有名なる雪舟下畫蘆屋濡鳥の釜を掛け、頓て庵主の炭手前あり、炭斗は白木三寶にて其上に載せたる鎌倉時代蒔繪香合は、表面には青貝にて二羽の向ひ鶴あり、裏面には唐草模様ありて、錫縁の古色と云ひ蒔繪の金色と云ひ共に申分なき名物なり、灰器は南蠻内澁、火箸は桑柄、羽箒は鶴にて何れも新年の目出度さを表はし、明月椀寫の膳椀皆具にて、懷石を出されたるが、獻立は

汁 三州味噌、
キノコ、大根、
燒物 昆布卷、

向附 寒鮓、甘酢、
山葵、
強肴 上海酒漬蟹、

椀 菘豆腐、加州雁、
若菜、木の芽、
吸物 鶴肉、土筆、

八寸 百合、鱒、
白魚、

香物 キヤベツ、淺漬、
大根味噌漬、

菓子 蒸饅頭、

扱て元の席に中立して再び入席すれば、青磁算木手の花入に寒牡丹一輪を生け、主人出で、濃茶手前あり、器物は左の如し

茶入 江月和尚朱直書附
靈龜、袋龜、甲模様

茶碗 青井戸
銘若菜

茶杓 利休作金森法印に
贈れりとの傳來

靈龜は深川木場の鹿島氏所藏にて、其形油壺を平たくしたるが如く、全部黒藥にて底には南蠻の如き土を見せ、所謂島物と稱す可き者ならん、林道春の靈龜の記と云ふ巻物あり、又其箱には江月和尚が四方に偈を書き、茶入の底には同筆にて靈龜の二字の朱書あり、寂味十分如何にも茶に入りたる名品なり。

濃茶後の薄茶は山澄代點にて、茶碗は了入作碌々齋福壽草の銘あり、是れは先年山縣公より主人に贈られたる者なりとぞ、又替茶碗は御本繪入にて、銘を大祝と云ふも目出度し、惣菓子には青貝の縮りたる盆に、廣島柿と梅花打物を盛りて出し、近來珍らしき名器揃ひの茶會なりけり、當夜客座の後ろに立て廻したるは、故高崎正風翁所持松花堂筆、金屏風にて、松花堂が例の達筆にて、大師風を示したる其中に、一日之計在於虎、一

年之計在於暮など云ふ文字あり是れも寅年に縁ありて面白しとて、頗る感興を催しけるが、座客は皆親密の間柄なれば、眞の夜咄しの茶會にて清談時の移るを覺えず、十時半頃に至りて一同名殘惜げに退散せり。

世外侯狂歌談

(大正三年三月五日)

當三月初余は飄然興津なる井上侯の別業を訪ひぬ、侯は長逗留の事とて本邸より多數の書畫什器を取寄せ、居間には啓書記筆、觀音の圖、客間には雪舟筆西湖の眞景横物を掲げ、其最も愛用する祥瑞在銘の湯呑及び赤繪吳洲茶碗の仕組まれたる茶箱を携帶して、興來れば薄茶一服を啜りながら談笑する境涯名詮自稱世外侯たるに負かざるなり、興津の氣候は東京より稍一箇月も早く、梅は散り木瓜は開き櫻の蕾も膨みて、春雨一過せば將に嫣然一笑せんとするばかりなれば、黒潮の上を渡りて三保の松原より吹き來る清風は寒からず暑からず、椽先きに寢轉びて雜談に時の移るを覺えざる其中に、不圖狂歌談に及びけるに、侯は舊記憶を辿りて夫れ是れと語り出で、頻りに笑壺に入られけるが、中には侯の奇智頓才の顯れて専門狂歌師の作よりも却て面白きものなきにあらざるにても、侯は此等の狂歌を書き留め置かるゝやと問へば、其時々の一興詠み棄て書き棄てにて多くは記憶に留まらずとの事なり、因つて余の聽取りたる狂歌の中、秀逸十數首を茶會記中に掲げ以て聊か後日の備忘に供せんとす。

明治二十一年頃外務大臣を罷めて、長州の外海と云ふ處に引籠りける時、

隅田川人のうらやむ都鳥

今は外海の鷗なりけり

或る時富士の裾野を過ぎて、

下女らしき名に不似合の白化粧

ツンとすまして人を見くだす

明治三十年頃朝鮮より歸り來りて興津に引籠りけるに故伊藤公より頻りに就官を勧められければ、

人間をやめて世外に棲むからだ

猿にしておけ猿にしておけ

同じ折使者の度重なれば興津に横砂と云ふ處あるを思ひ付きて

寝つおきつ浮世の外の老の身は

用があつてもむかひ横砂

日露戦争中高橋日本銀行副總裁の公債募集の爲め渡英するに就き世評區々なり
ければ

よしあしの中にかゝれる高橋は

渡りてきかむかりがねの聲

修善寺に罷りける時、旅宿にて朝夕興津鯛のみを出しければ、

あま鯛で寝てもおきても小言のみ

醬油やうにつけ焼かれては

身延山に参りける時、寺僧の何か書きてよと乞ひければ、

門前の小僧のみかは藪かげの

鶯さへも法華經となく

還暦の年人に示すとて、

けふよりはもとの赤子にかへりけり

皆ちやん御免だゞをこねても

奈良に遊びける時、

いにしへの奈良の都をたづぬれば

春日にのこる鹿の聲のみ

明治三十一年二月官を罷めて鎌倉に引籠りける時、

世はうしと由井の濱邊による波に

ときし冠のひもを洗はむ

伊豆の鼓の瀧にて、

音にきく鼓の瀧の水しらべ

しめつゆるめつなり渡るらむ

駿河半紙を漉くを見て、

木の皮をむいてみつまたにてほして

なんと駿河の紙のたふとさ

甲斐の國の或る製絲場を參觀しける時、

おかひこでくるめそだてし甲斐の國

木綿もきぬと人はいふらむ

或る時朝鮮の時局につきて、

てうせんとにぎつて打てど手にならず

岡目八目つぶれかんじやう

静岡縣の近藤といふ茶人が『山里は茶うけの菓子も事たりて松風もあり落雁もあ

り』と詠みておこせければ、

耳と目で茶うけの菓子が事たらば

ゑがいた餅で正月はすむ

又同じ人より『法性のむろちと聞けど我すめば有爲の波風立たぬ日もなし』といふ

歌を示されければ、

うろむろと悟りすごすなけふすめば

金でなければ何で空海

山口に遊びし時或人戯れに相撲の賭に十五圓を獲て御馳走すると云ふを聞きて、

ごちそうに御禮はいらぬ十五圓

とりし相撲は人のふんどし

高田氏不動會

(大正三年三月二十八日)

南に御殿山の大師會北に湯島臺の不動會は相對して東都の年中行事と爲れり不動會は相川高田慎藏氏の催しにて去る明治四十二年發會以來年々三月二十八日を以て會日と爲し氏が明治四十一年高野山龍光院にて手に入れたる傳弘法大師木筆畫不動尊を廣間の床に祭り各室に所藏の書畫を陳列して之を來會者に示し庭園の一

部に於て盛大なる園遊會を催す趣向なるが、其本尊たる不動尊は横五尺、堅六尺許の大幅にして、木筆の飛白中に梵字を書き込みて、其潤達暢快なる筆勢、人間業とは思はれず、後來土佐家にて此木筆畫を試みたる者あれども、斯かる達筆は他に比類なき者の如し。

嘗て聞く不動は梵名アチャラ、音譯阿遮羅にて不動又は無動の義あり、又左脇士は梵名キンカラ、音譯矜迦羅にて奴僕又は隨從の義あり、右脇士は梵名チユータカ、音譯制吒迦にて使者又は息災の義ある由なり、經文には無動明王是如來法身とありて、其相好微に一目を閉ぢて、頂に七髪を被り、左胸に一髻を垂れて、右手に利劍を執り、左手に秘索を持ち、足に磐石を踏み、火焰を出し、常安不動及び火生三昧の性形を示し、眞言秘密教に於ては最も大切なる佛體として尊崇するが故に、古來名僧の筆に成りし不動尊頗る多く殊に弘法大師筆と稱する者多數なる中に、井上侯が皇太后陛下より賜はりたる弘法大師筆不動の如きは、承和二年清涼殿に於て沙門空海勅を奉じて畫くと長落款ありて、極彩色の精巧無比なる佛畫なるが、此木筆畫不動尊は筆致奔放不羈にして、彼此同人の筆に成りたりとは思はれざれども、超人間的大師の技能は凡眼を以て推測す可からざるが故に、此種の奇畫は古來大師筆として敢て異議を挿む者なきが如し。

此不動尊の外當日陳列されたる高田氏所藏畫幅中不動尊と斜に相對して床に掛けられたる古畫弘法大師四十二歳の像は、何人の筆なるやを審にせざれども、時代に於ては藤原末期と見るべきか、土佐爲繼筆在原行平朝臣の像、傳信實筆藤原鎌足の像は何れも名畫にして見榮あり、支那畫に於ては趙子昂筆廬同煎茶の圖、最も精妙、崔白筆波に群鷺も世に謂ふ徐熙の筆勢に似て確に宋代の古色を示せり、近代畫に於ては華山の富士山圖殊に優れて幾度拜見しても見飽かぬものなり、印陀羅、牧溪、夏珪等に至りては覽者の所見様々なるべく、應舉の蓬萊山、景文の雲雀、若鮎雙幅の如き寧ろ諸人好きの珍幅とこそ見受けたれ、高田氏近來歌道を學び當日の自詠に、
年ことの今日のまつりに御姿を

仰けは更に尊かりけり

とあり又此不動會の初會なりしか山縣公は、

かくれるし高野の奥のみほとけは

世に出て、こそ光ありけれ

と詠まれけるが信仰教義風流社交兼ね合はせたる富豪の道樂として之れに上越す會合なかるべし唯當會は既に五回を重ねたれども每會同一趣向にして變化に乏しきの嫌ひなき能はず今や都下の年中行事となりたる以上は今後書畫陳列方法等に就き更に一段の工夫を進めて愈々來賓を満足せられよかし余は此點に於て聊か取隴望蜀の念なき能はざれば遠慮なく希望を打ち明けて敢て會主の一考を乞ふ者なり。

福祿壽會

(大正三年三月二十九日)

上代様の能書家故多田親愛氏の實弟池内就富翁は本年七十二の高齡に達したるを以て三月二十九日上野鶯谷國華俱樂部に於て古稀祝賀の爲め福祿壽會を催しける

が當日は都下諸大家所藏の福祿壽畫幅を借り集めて大廣間の床と言はず壁と言はず處狭く掛け連ねたる中に傑出したるは黒田侯爵家の雪舟筆中福祿壽左右山水三幅對にして中幅も沈着なる出來なるが左右の山水行體にて筆力壯快言ふばかりなく雪舟山水中拔群の傑作と見受けらる蜂須賀侯所藏の梅潛福祿壽は幅中少しく汚損したれども有名なる丈けに雪舟畫中一風變りたる珍幅なり松井子爵家の啓書記筆福祿壽は頭に寶冠を戴き氣高き仙人の如き容貌にて老松あり遠山ある山水畫中の人物なれば啓書記畫中に於て確に出色の一品とこそ見受けられ近代畫に於ては郷男爵の應舉筆中福祿壽左右鴛鴦の三幅對最も傑出して尺八絹本極彩色の圖柄と云ひ筆致と云ひ世間幾多の應舉幅中必ずや十指の中に數へらるべき者ならん支那畫に於ての代表的出品は正面大床に掛りたる井上侯爵所藏明の文嘉筆中福祿壽左右松竹鶴の三幅對にして筆力清健幅中綺麗にして諸人好きのする名幅なり溝口伯爵出品の鳥丸光廣卿自畫讚福祿壽は、

もの事に足ること知れば福祿壽

心一つに有明の月

の讚ありて小品なれども面白く又同家出品の狩野伊川院が鶴を畫き溝口家の祖先翠濤侯が福祿壽を畫き其上に小堀宗中が、

色かへぬ松と竹との末の世を

何れ久しと君のみそ見む

の讚を書きたる者は是れ亦固より小品なれども茶人の喜ぶべき洒落幅なり浮世繪部に於ては岩崎久彌男が自畫の福祿壽の上に大倉鶴彦翁が、

長いきは頭で知りぬ十歳あと

ふく六十の祝ひせし人

と讚せしもの最も來會者の目を惹きけるが岩崎男が近時速成畫指南の先生に就きて繪畫を稽古せらるゝ由は仄に承り及び居りしに今親しく其筆致を視れば衣紋も細密に着色も美事にして些の霸氣を留めず福祿壽の頭が色と云ひ形と云ひ能くも

護謨製の風船玉に似たるは此上なき愛嬌にして其傍の白鹿も牛の如く羊の如く福祿壽と相對して好一對に見受けたれども争はれぬは氣品にして自から筆者の人格の發現する所あり素人畫の面白味は先づ此邊に在りと云ふ可きか大倉翁の讚は例の光悦流の愈々老熟して得意の達筆申分なく當日樓上樓下に幾多の福祿壽は見えたれども實際御利益の著しきは蓋し此福祿壽ならんと評し居る者ありしも可笑しかりき。

近年古稀壽筵を張る者動もすれば飲食の末に囚はれて俗氣紛々たる者多きが中に池内翁が諸大家の福祿壽を借り來りて所謂他人の禪で角力を取るの新案に出でたるは最も氣の利きたる祝賀會にして來會者をして短き時間に多くの珍幅を觀て主人の福祿長久に擬からしむる思ひ付き尋常一様の御馳走に優ること萬々なりと云ふべし今回翁の自祝歌あり左に掲げて其老健を祈るになん、

稀なりと人にいはるゝ老か身も

心は未だ稚かりけり

寶樹庵還曆茶會

(大正三年四月三日)

上

寶樹庵主瓜生百里翁は當年六十二歳にて、夫人と同年同月生れの三日違ひと云ふ珍しき夫婦なれば、今度共通の還曆茶會を催す由、案内に應じて四月三日正午參會したるに、寄附には丸爐に銀瓶、床棚に山水、蒔繪硯箱、煙草盆に乾山梅の畫火入等の飾附にて、客は安田松翁、吉田楓軒、大久保北隱、梅澤鶴叟に余を合せて五人なり、扱て松翁を正客として、順次寶樹庵に繰込めば、床には俊頼卿の拾遺抄卷五賀部の歌切にて、詞書あり、前は中納言朝忠、後は大中臣能宣の歌ある一軸を掛けられたるが、其歌は左の如し、

よろつ代の始めとけふを祈りおきて
 今行く末は神ぞかそへむ

千早ふるひらの、松の枝しけみ

千代も八千代も色はかはらし

銀模様唐紙臺紙麗しく、表具は上下細中古金襴、一文字風帶上代紗にして、歌意と云ひ幅柄と云ひ、今日の目出度さを遺憾なく言ひ盡し、頗る快心の一軸なりき、頓て庵主出で、炭手前あり、器物は左の如し。

釜

古蘆屋住の江松地紋螺貝銀附

炭斗

四方細竹組

香合

蛤貝内彩色繪

灰器

湊焼碌々齋製

羽箒

鶴

蛤香合は東福門院より宗旦に賜はりたるもの、由にて裏面の彩色繪は狩野永納の筆なりと云ふ、斯くて懷石は左の如し、

汁

三州味噌
長芋

向附

金襴手環珞丸紋
鯉、岩茸、山葵

椀

鯛、蕨、木の芽

焼物

祥瑞地繪、鉢
鵜蠟燭燒

吸物

鵜蒎繪小椀
越後産ばくたい、櫻の蕾

酒器

青磁獅子蓋、銚子、繪高麗
徳利、饒州及び染附、盃

八寸

了々齋好打合盆
稚鮎、松露

菓子

遠山

右懷石了りて、後元の寄附に中立せしが、昨日は益田鈍翁下條桂谷等がお年の加減か當家の銘銅鑼を聞き損じて待てども待てども入席せず、據なく庵主自ら出迎ひたりと聞くものから、今日は一同耳敬て、合圖を聞き終るや、再び入席すれば、床には遠州

作大寂び竹の一重切に、白に桃色の斑ある椿二輪を挿みたるが美事なる大輪にて、銘を沖の石と稱する由、玉椿の千代に八千代を祝する本日の茶會に於ては、此花ならてはと首肯れぬ、扱て濃茶手前となりて器物は左の如し、

茶入 古瀬戸銘棹姫、袋風通裂蝶模様

茶杓 空中六十一造

茶碗 青井戸銘三井寺

水指 宗哲眞塗手桶

茶入は古瀬戸金氣藥に黒き堅筋の流れありて、形は變れど土味は飛鳥川に似たる所あり、後水尾院宸筆にて箱に棹姫の二字あり、又箱裏に、

棹姫のうちたれ髪がみの玉柳たまやなぎ

た、春風のけつるなりけり

とあるは、茶入の景色に因みて命名し給ひたるならん、青井戸三井寺茶碗は濃茶々碗として稍縮り過ぎたれども、ベ、ラ、カイラゲなど約束十分にして其形も時節に倣り、別して結構に拜見せり、空中茶杓は二節にして毛彫の細字麗しく、『かさねへき千代に八千代の蔭なれや』とありて、空中六十一造とあるは恰も此茶會の爲めに造り置きたるもの、如く、庵主が當會の道具組の爲め、多年來如何に肝膽を碎き居たるやは此一端を推して知るべきなり。

下

濃茶一巡の後薄茶は廣間にてとありて、頓て四疊半の別席に移れば、床には満八十三雪舟筆の落款ある福祿壽の一軸を掛け、床脇棚には堆朱の軸盆に燕文貴の山水畫一卷を載せ、寒雉作螺貝銀附四方富士釜の掛りたる爐邊には、直齋好矢筈棚を置き、棚の一端より眞紅の房二旒を下げて其中に青磁の大鐵鉢水指を置きたる風情麗しなど言ふばかりなし。

斯くて庵主と同華甲の令夫人は、黒紋附に緋服紗を着けて淑かに立出で、一閑菊形菓子盆に打出し紅白牡丹の惣菓子盛りて薄茶一服との挨拶あり、茶碗は一入作と御本丸紋にて、茶入は丸形裏面芳野龍田の蒔繪なりしが、茶杓は樂翁公作にて其筒には『名之曰綠』と書き附け、他の一側に匙は主なり筒は家なり元是同根とあり、更に『たときとていかて奢らんいやしきも一つみとりの竹の世の中』の歌を物されたるは、眞に珍

しき茶杓にして、公が才學一世に高かりしのみならず、又大に茶趣味に富みたるの一端を知るべきなり、斯くて薄茶終るや、庵主は其好みを以て京都の正玄に製作せしめたる竹の茶入の胴に、隸書の壽の字六個に一の字を書き附けたる茶入を記念品として一同に配り、客も主人夫婦の吉辰を祝すると同時に、其記念茶會の空前の大出来なるを感じ合ひて退庵せしが、庵主が夫婦打揃ひて多年考案したる道具組とて、今度は庵主に付き纏ひたる長崎風の茶趣味を一掃して、垢抜けたる東都流の趣向を示し、六十而耳順の本文に違はず、此に至りて茶事に一進境を開かれたるは誠に敬服に堪へざるなり。

小間に於ける俊頼卿の歌切は言ふまでもなく、當茶會の主眼にして、之れに對する青井戸の茶碗も亦動かぬ組合せなるべし、空中茶杓の六十一造とあるは言はずもがな、『重ぬべき千代に八千代の蔭なれや』の一句も、相生の松の枝うち交はす吉辰を祝するに於て之れに上越す適役なかる可しと雖も、唯貝合せの香合は其他の器物に相對して少しく沈着の趣を缺き、爲めに此場面の莊重を毀損するの嫌ひなきを得ず、勿論茶入の棹姫が後水尾院の宸筆にて、蛤貝が其皇后たる東福門院に緣故ありと云ふ處に、庵主の深意も存するならんと雖も、香合が蛤にして小間廣間の釜の環附が、雙方共螺貝なるは、如何に汐干狩の時節とは云へ何ぞ其れ貝を愛づるの甚しきや、是れも庵主の好物なりと云へば、夫れ迄なれども、香合の小間も廣間も他に比して少しく見劣りたる感ありしは、或は庵主が名物揃ひを避けて故意に血路を開きたる、獮手段にてもあらんか、要するに今回の茶事は、寶樹庵開庵以來の大出来として、還曆の祝辭を兼ねて茲に、恭しく讚辭を捧呈する者なり。

坂中庵花見茶會

(大正三年四月五日)

上

明治の初年發行されたる簿記學書中に、其名を知られたる森下岩楠氏が、今や東京興信所長たるは誠に當然の成行なれども、此簿記學や身元調べに汲々たる可き人が、坂中庵主として茶人の仲間入りするに至りては、如何なる人事興信所に於てもハテナ

と一驚を喫する事ならん、左は云へ同氏より、月の五日粗茶一服との案内に接したれば、且つ怪み且つ喜びて、正午白金三光坂の中段なる森下邸の門を入り、左側の垣根に沿ひて石階數級を登り詰むれば、此處に一宇の待合ありて入口に坂中庵の扁額懸れり、扱て此待合は三疊にて片隅の丸爐に鐵瓶あり、茶盆には染附の香煎入あり、而して其の壁床に内藤鳴雪翁の、

花一山紫衣の僧あり若衆あり

の短冊を掲げられたるに依り、略ぼ當日茶會の趣向を知る事を得たり、相客は朝吹柴庵、青地湛海、大久保北隱及び帝國博物館の太田謹翁なりしが、朝吹翁を先達として頓て露地に立出れば、茶室は此待合の眼下にあり、ダラ／＼下りて茶室の前に達し、庭前の花を眺めながら順次茶室に繰り込めば、席は孤峰不白の好みなる由にて、三疊臺目に茶道口と給仕口あり、床の右側の壁を吹抜きて正客席より道具飾りを見透す可き至極面白き構造なるが、床には遠州筆にて、

唐の吉野の山にこもるとも

おくれんと思ふ吾れならなくに

の古歌あり、其下に江月筆にて、

旅亭窓寂寞、携入有花門、縦教道千里、伴歸無月村、

とある一軸を掛けられぬ、此詩歌は現今酒井忠道伯の所藏たる有名なる青磁の花入吉野山に附屬する物にて、此花入が吉野山の花の如く絶對に天下第一たるの意を寓したるものなりと云ふ、斯くて主人出で、炭手前あり、器物は左の如し、

釜 蘆屋 尾垂 香合 交趾阿古多形 炭斗 唐物竹組

灰器 ノンコウ造 羽箒 鶴

此炭手前に於て庵主の練習一朝一夕に非ざるを示し、客も漸く危険界を脱したる心地せしが、扱て順次運ばれたる懷石は左の如し、

汁 三州味噌、田芹、向附 菊花式雲鶴、たひら貝、防風、木海月白あえ、椀 鯛、蕨、松露、木の芽
 燒物 保全作赤繪吳洲寫鉢、金海鼠、八寸 海老豆、莢豌豆、吸物 蛤
 香物 唐津編笠鉢、刻み澤庵鉢、酒器 青磁蓋銚子、染附及唐津盃、菓子 蓬羹

以上懷石終りて元の待合に中立すれば、庵主は頓て水桶を持ち出て、蹲踞石の水を取替へ、更に合圖を用ひずして自ら出迎ふなど至つて殊勝の振舞なり、扱て再び入席すれば宗旦の尺八に藤と貝母を生けたる風情悪からず、爐邊には膳所焼耳附水指の側に、伊豫簾の袋掛りたる茶入を置きて濃茶手前あり、器物は左の如し、

茶入 瀬戸芋の子
松花堂銘木之本

茶碗 御本刷毛目

茶杓 少庵作
原叟筒

建水 塗物曲

蓋置 青竹引切

右器物の中膳所の水指は出来面白く、木之本の茶入は芋の子形にて餘り厳しからぬ處が、他の器物との取合ひ宜く且つ其銘の花に縁あるも亦可なり。

下

濃茶一巡するや薄茶は廣間にてとの挨拶にて頓て動座したるは新築の八疊にて、床には狩野安信筆出山の釋迦を掛け、其前なる黒無地平卓の上には染附三足香爐を置き、書院には光悅風の三足兎蒔繪硯箱を飾り、扱て高臺寺蒔繪爐縁の掛りたる爐中には庄兵衛作螺貝銀附の釜を掛け、孤峰不白が八十八の時好みたりと云ふ木地の米棚

と稱する茶棚には、紀州御庭焼の水指と黒無地棗とを置き合せたるが、茲に見遣す可からざるは床脇棚に牡丹を生けたる七官青磁然たる花入なり、此花入は往時雲州にて朝鮮風の陶器を焼き始めたる初代權兵衛が、彼の酒井家所藏吉野山の花入を寫したる物にて、小間の掛物と對照し來れば主人が此花入を用ひたる意匠も直に判明す可きなり。

吉野山に就きては由來種々の茶談あるが中に、此花入が酒井家の所藏に歸したるは、今の忠道伯の祖父が維新前京都の所司代たりし頃、如何にもして之を獲んと思ひ立ちしが、當時此花入は柳營御物とて徳川將軍家の寶物なれば容易に手に入る可くもあらず、是に於て彼の和宮御降嫁の際、幕府より一旦之を朝廷に献上せしめ、扱て御降嫁に付き所司代肝煎の功勞少からずとて朝廷より更に之を酒井家に下賜せられ、吉野山は首尾能く同家の寶藏に入りたるなりと云ふ、古來茶人が名器を手に入れんとして有らん限りの手段を窮盡する其苦心は、此一例を以て思ひ半に過ぐ可きなり、縦令へ貴重品ならざるにもせよ、斯かる茶事に因縁ある掛物及び花入を把り來りて、端

なく茶客の感興を惹き起さしめたる庵主の腕前は中々見上げたる者にして、余等に對してこそ今回が初陣なれども、内々幾多の實戦を経たる力量只管感服の外なきなり。

斯くて惣菓子紅白櫻花打出し、薄茶々碗は尾戸の正伯焼と乾山作とにて、宗與子の代點あり、主客緩々雑談に耽りけるが、左るにても當庵を坂中庵と云ふは如何にも卑近にして面白し、白金三光坂の中段にある茶室なれば斯くは新に名けたるならんと思ひしに、坂中庵の匾額を書きたるは大徳寺の廣洲和尚にて、今より五十年前の僧なりと云へば主人が偶然にも此額を掘り出したるならんに、斯く適切なる庵名と爲りたるは新席に取りて此上なき仕合せと云ふ可きなり、森下氏が舉止沈着にして資性温順なるは人の能く知る所なるが、此性格が最も能く茶事に適合して、濃茶手前など泰然として宗匠然たる處あるは新茶人に珍しく、茶評家に取りては寧ろ失望の方なれども、東都茶人中に更に此一星を加へたるは斯道の爲めに大に祝すべき事ならん、勿論嚴密なる批評眼を以て觀れば幾處打込むべき罅隙なきに非ざれども、初會の事なれば暫く擱き、他日好機會を得て更に庵主に問ふ所あるべきなり。

鈍阿焼品評茶會

(大正三年四月二十一日)

上

徳川時代には東都の大名邸内にて物數寄に種々の陶器を製し、之を名けて御庭焼と云へり、水戸家には後樂園焼あり、雲州家には大崎焼あり、紀州家、井伊家其他諸所に御庭焼ありし由なるが、維新後は絶えて此等の物數寄なく、營利を離れたる費用お構ひなしの陶器は古物店に於て稀に發見するのみにて、形に釉に彩色に精巧無比なる工藝上の參考品を製造する者なきは、斯道の爲めに誠に本意なき次第なり。

益田鈍翁近年此に鑑みる所あり、品川御殿山に陶器窯を設け、岐阜の陶工某を聘して、茶碗、茶入、水指、建水、灰器より皿鉢、德利等に至るまで續々試製中なるが、所藏の名器を模本として其製法を比較研究するに依り、昨今技術も大に進みて稍觀るべき者を産出するに至りたる由、窯印は鈍阿にて之を鈍阿焼と稱し、追ては城南の一名物と爲る

事ならんが先頃我が海軍々人にて彼の有名なる奈勃翁の配流地セント、ヘレナに立
 寄りたる序に、奈翁墓碑の土を持歸りて態々鈍翁に贈りたる者あり、遠來の寶土とて
 翁も百方考案の末、其所藏の光悦七種の中七里と稱する銘茶碗を模本として、此程首
 尾能く焼き上げたる抹茶茶碗は實に案外の名作にして、鈍翁の得意大方ならず、或
 人が是非に之を譲り受けたしと申し入れたるに、五千圓にても手放す能はずと自慢
 したる程なれば、過般大師會にても開きたらんには、何れの席にてか多數來客の品評
 を乞ひたるならんなれども、諒闇中とて同會も終に中止となりたれば、去る二十一日
 夕刻より、二三同好の親友を招ぎて臨時に其品評を乞ひたしとの案内なり。

斯くて同日午後五時頃より例の爲樂庵の寄附に着到すれば、相客は三井松籟男同守
 之助、朝吹柴庵、藤村義郎、北村七郎と余を併せて六人にて、寄附には別に變化なく例の
 古樹の煙草盆に了入の火入位が最も目立たる者なりき、頓て庵主の案内に連れて順
 次繰込みたるは、爲樂庵と同棟にて背合せなる南向の一室にして、六疊許りなる土
 間の片隅に一疊半許りなる半月形の座敷を取りて、前面は品川より大森の方面を見

晴し、又書院様の出窓ありて其棚の上に、大硯と唐銅鹿の筆架に架けたる大唐筆を置
 き合せ、印度産らしき丸壺花入に鬼蘇とハンの木の一枝を挿みて、其柱に掛けたる風
 情、ハイカラとも蠻カラとも人に依りて様々の批評が出てさうなり。
 斯くて正客次客の外は粗雑なる椅子又は腰掛に倚りて例の一疊半に並べたる配膳
 に向ふの趣向にて、正しく和洋折衷の茶會とも謂ふべきか、扱て庵主が懷石を持ち出
 すを見れば、野州産の大瓢を輪切にしたる丸膳に例の鈍阿焼の涼爐を載せ、其上に蛤
 の剝身を盛りたる貝鍋を置き、客をして銘々自烹自食せしむる趣向にして、庵主獨特
 の筆法とこそ見受けられ、此蛤鍋が汁ともなり、椀とも爲りて充分客を満腹させ、焼物
 は蟹の甲羅に其肉と椎茸其他種々の材料を叩き込みたるものにて、嫁菜の浸物に花
 鯉あり、其外支那料理風の豆腐などは随分突飛の食物なれども、是れが悉皆此一室よ
 り見渡す御殿山と品川海とより採り集めたるものなりとは、庵主の説明に依りて了
 承せり、八寸は蝦蛄、松露、蕨吸物は蟹の子と田芹にて、菓子は串差蓬團子なりけり、猶ほ
 此懷石の器物は唐津の小鉢、備前の瓢形德利の外、盃、皿、鉢等悉皆鈍阿焼を採用せし

が其器物の形式が頗る茶味に富みたるは一同敬服せし所なり。

下

食事中庵主は素焼の鉢、盃、數個を盆に載せ、繪の具皿と筆とを持出して畫なり書なり隨意に揮毫せらるれば即座に燒きて御覽に入るべしと云ふ、左らばとて盃中に渦卷又は福の字などを書く者あれば或は蘭竹の畫を描く者あり、松籟男は鉢の周圍に左の自詠を書き附けたり、

嵐山峰の櫻木みとりして

昨日いとひし風のすゝしさ

筆蹟も美事に歌も時節に適合したれば一同流石と感嘆せしが、懷石未だ終らざる中に陸續竈より燒け出て、見れば書畫も鮮明に釉の變化も面白ければ一同陶器道樂の趣味を感じて共に一興を催しぬ、是れより元の寄附に中立して暫時休息する間に、庵主は合圖を用ひずして、今度は裏口より出迎ひイザ爲樂庵へと案内さる、乃ち續いて入席すれば床には松花堂筆墨竹に左の歌一首ある一軸を掛けたり、

住めはまた浮世なりけりよそなから

思ひしまゝの山里もかな

地紙も白く墨竹の出來は梅道人其儘にて申分なく、之に兼好法師の『住めはまた』の名歌を書き添へたれば、晚春花後の掛物として最も趣味深き一軸なりき、斯くて爐邊には鷹峰山隠士の文字ある鐵製の自在に、例の光悦好みの鷹峰太虚庵の文字ある丸釜を掛け、伊賀焼とも見らるゝ前に凹處ありて焦もビードロ釉も十分なる水指を置き、其前に吉野廣東と唐緞子接ぎ合せの袋掛りたる茶入を飾り合せて、庵主の濃茶手前あり、茶碗、茶入、水指、建水共に鈍阿焼なるが、茶杓は一見權十郎と見らるゝ者にて、筒の前面には藤花の二字ありて、其下に阿部豊後守様とあり、又其裏面には、

紫のあけをうはゝぬ藤の花

色をかへぬは憎くからぬかな

の歌あり、古筆了仲の箱書附を見れば、土屋相摸守政直筒書附銘の二字一首ありとあり、左れば此茶杓は遠州の高弟と聞えたる土屋相州の作なるが如くなれども、一座の

評議は此茶杓は遠州又は權十郎邊の作にて歌も亦同筆なるを、土屋相州より阿部豊後守に贈りたる者なり、其筒に阿部豊後守様と書附けたる文字は歌の文字と同じからず、即ち土屋相州の筆なりと云ふに歸着せり。

扱て彼の伊賀焼然たる水指は言ふまでもなく鈍阿焼にして、茶入も亦同様なるが其形は凡手なるが如く、黄地に黒釉の雪崩ありて景色は面白き者なれども、陶器中最も六かしき茶入の事とて未だ上乘の作と云ふ可らず、然らば先刻評判のセント、ヘレナの土を以て製造したる茶碗は如何、最初遠眼に一見したる時は果然光悦の作ならんと思ひたるが、諦視すれば正しく新作にして手取至て軽く、形は彼の七里に似たれども三箇所程の山疵ありて、其疵の上に釉の流れ掛りて光線の透き徹る有様は同じく當家の所藏なる光悦七種の障子茶碗に酷似せり、因て其仔細を庵主に問へば是れは全く偶然の出来事にて、最初竈に入れたる時火加減の強かりし爲めか、一聲の爆鳴ありて數箇所の破裂を生ぜしにぞ、已むなく之れを倒懸して反對に釉を掛けたるに、釉は流れて罅隙を塞ぎ、湯水は全く漏らざれども光線の内外に透過するは恰も彼の障子同様にて、圖らず此銘茶碗を得たるは聊か鈍阿焼の名譽とするに足れりと、庵主の得意満面なり、就ては此茶碗に何と命名して然るべきや、或る人は光悦の障子に似たれば自ら謙遜して破れ障子としては如何と言へり、左れども他にヨリ以上の名案はなきやとありければ、一座評議の上セント、ヘレナの土なれば西より來れりとの意味にて西來としては如何と言ひ、否此等舊思想を脱して寧ろ奈翁と命名しては如何と言ふ者もありけるが、奈翁の名最も新しく且つ最も明白なれば、庵主は熟考の上之に決すべしとの事なりき。

扱て濃茶一巡して後炭手前あり器物は、

炭斗 竹 組

香合 空中 藍作

灰器 鈍阿焼

羽箒 野 雁

にして、味噌松風其他一種の惣菓子出で、薄茶々碗は本茶碗の外に繪御本筒茶碗を加へ、主客打寛ぎて雑談に時を移しけるが、庵主が維新後其跡を絶ちたる彼の御庭焼を再興して程なく此名茶碗を得たるは、嘗に鈍阿竈の吉兆たるのみならず、算盤以外の

物數寄にて、追々陶工を養成し終に城南の一名物とも爲らば我が工業界に裨益する所決して鮮少ならざるべし、因つて庵主の好意を謝し、鈍阿竈の益々榮えて永久其煙の絶えざらんことを祈り午後九時一同御殿山を下りぬ。

松風閣讀書會

(大正三年五月二十一日)

横濱在本牧の三の谷に三溪園と稱する私設遊園あり、三の谷の一角五萬坪を領有する風景絶佳の場所にして、園主は三溪道人原富太郎氏なり、抑も此五萬坪は原家の創業者故善三郎翁の遺物なるが、其後當代に至りて益々附近を買収し今は十三萬坪に達する其中、先代の遺物を三溪園として逐年園池亭榭を増設し、園主の住所たる松風閣以外を所謂門戸開放にして、公衆の隨意遊覽に供し居るは、流石に園主の大襟度と云ふ可きなり、殊に近年巨資を投じて横濱本牧間のテーブルランドに隧道を穿ち、電車を此間に往來せしむるに至りたれば、遊覽者は非常の便利を得て、花晨月夕園主の

恩澤に浴するに至りたるが、場所柄とは云ひ泰西式富豪の標本を示したる此一舉は、當代稀有の美談として大に推奨すべきものならん。

余は園主と風雅の交りを爲すこと十數年、其間屢々膝を松風閣に交へたれども、近年打絶えて訪問せざりければ、本年新緑の時節には、久し振りにて三溪の風光に接すべしと思ひ居たる折柄、過日東京にて圖らず園主に邂逅せしに、此程山城國東明寺より三重塔を移轉して三溪山の頂上に建立したれば、一度來訪して實地檢分の上、其品評をも聞きたしとなり、夫れこそ誠に好き折なれと一も二もなく欣諾して、去る二十一日豫て園主と親交ある田中親美氏を同伴して、午前九時四十分の汽車に乗込み、頓て横濱停車場に着すれば、此處には園主より出迎ひの馬車あり、余等一行を乗せて直に三溪園を指せり、斯くて三の谷に近づき、本牧の一角を見渡せば、遙か向ひに巍然として三重塔の屹立するあり、天に冲する塔尖は、谷を隔つる雙高丘を壓し、瓦棟の丹碧は四圍の鬱蒼たる群松に映じて、此一塔の爲めに三溪山は、忽ち古都の風色を帯び、殆んど別様の觀を呈するに至りたるが、昔し岡山の太守が有名なる後樂園を經營するに

當り遙か向ひの高丘に五重の塔を建立して同園の風趣を添へたるが如き何れも同趣向にして築園趣味を有する者は大抵同感なるが如し、即吟一首あり左の如し、

一望海門浪作堆

綠陰稠處洞天開

風煙入眼三溪近

塔影高遮鳥道來

斯くて程なく三溪園に達するや園主出迎ひて自ら園内を案内せられけるが、三の谷は名の如く三つの谷より成りて當園は正に其一の谷を占領する者の如く、而して其谿間を流るゝ清水は漚りて一大蓮池と爲り、山逕草塘、紆曲折する間に梅林あり、花壇あり、古祠あり、舊寺あり、橋あり、亭あり、田舎家あり、布置經營巧に築園術を究極せしは定めて斯道の大宗匠を煩はしたるならんと思ひの外、三溪道人自身宗匠として築造したる者にして其詩思畫想を園藝術に移して自然に契合する所あり、中には旦那藝を通り越して皮肉に行きたる憎らしき、専門宗匠の月並的意匠を離れて眞實面白き所あれば、追々古色の加はるに隨ひ天晴關東の一名園たる可きは余の信じて疑はざる所なり。

二

三溪園主が東道主人として先づ余等を誘ひたるは楠公を祀りたる古小祠なり、此古祠は往時楠公の建立に係り其守本尊を安置したる者なるが、手頃の小祠なれば園主の好事にて舊形の儘當園に再建し、今は楠公を御神體と爲したる由、次は宇都宮在大疇製絲所内に其創立者河村迂叟が建立せし神殿と待春軒と稱する御殿構への一棟なり、園主が大疇製絲所を三井家より譲受けたる其媒介者は余なるが故に、此建物が當園に移されて見違ふばかり修覆せられたるを見ては、且つ嬉しく且つ懐しく感ぜざるを得ず、扱て其次は横笛堂にして奈良の法華寺内にある同堂を寫し、且つ横笛が瀧口入道より送られたる艶書を以て張抜きたりと云ふ、彼の優美なる紙製像をも模造して堂内に安置したれば、平家時代の艶物語は此園内にも傳へられ、殊に來觀の西洋人等に日本古代の優美なる男女の關係を偲ばしむる着想、流石に感服せられたり。尙ほ一步進んで奥まりたる竹藪の中に田舎家の一構あるは、是れも當園の愛嬌物にして庭前に古板井筒あり、其附近に草刈籠の轉がり居るなど、自然を寫して何かの繪

卷物などに見ゆる佗住居と覺しく面白しなど言ふ許りなし、尙ほ進んで奥の院に到れば此處には六間四面の古堂あり、是れは鎌倉松ヶ岡東慶寺の本堂にして、弘安八年北條時宗公薨去の後、公の室薙髮して覺山大和尚と號し、當寺を建立せられけるが、其後護良親王の王女用堂大和尚及び豐臣秀頼公の室天秀大和尚等が住持せられたるを以て最も名高く、建立後六百二十七年を経過せし古堂にして、當初覺山大和尚の此堂を建立せしは婦女子の境遇を感みて同情禁ずる能はず、如何にもして之に一條の活路を與へんとするの大悲願なりしと云ふ、斯くて時宗公の許可を得て此一堂を建てけるが、是れより女人は如何なる罪を犯す事あるも其足一度堂門に入れば政府の權威も如何ともする能はず、或は犍猛なる男性の凌虐を蒙り、若くは離縁を拒まると、等の事あるも、一旦此寺に投ずれば何人も之に觸るゝ能はず、縦令へ殺生の罪ありとも此寺内に在つて三年を過經すれば罪障全然消滅する制規にして、俗に之を馳込寺と稱したる由、當時法制完からず隨つて纖弱なる女人の保障なきに當り、此一條の血路を與へて社會の缺陷を補ひたるは封建制度中に於ける微妙の特色とも云ふ可きか、斯かる來歴ある古寺も物換り星移りて今や全く廢滅せんとするを園主の篤志に依つて遂に當園に移築せられたるは歴史的建造物保存の一端として大に嘉賞す可きものならん、堂内には清國西安にて發掘されたる佛畫佛像等を陳列し、時々好事家の參考に供するを以て縦覽者に無限の感興を與へ、近年開創せられたる當園が種々歴史的痕跡を留めて、次第に生ひ茂る園内の苔莓と共に鬱蒼たる古色を添へ來りしは、是れ亦園主が理想に基きたる美術兼歴史的趣向にして、雅俗偕樂の勝境と謂ふ可きなり。

三

三溪園は三の谷の藥研狀を成したる地形中にありて、其周圍に松林を繞らし、谷間の清水の合流する末は彼の蓮池に注ぐ趣向にて、此間を紆餘屈曲する山徑、土橋板橋の場所に應じて變化する工合は總て園主の築園術より出で、所謂斧鑿の痕跡なく、渾然自然と融和する所、凡手の及ぶ所に非ず、殊に園中を貫流する小川の場所により、或は山川となり、或は草川となり、淵となり、瀬となりて、蓮池に流れ行く間に、或は峙ち、或

は傾きたる岩石の配置、各其所を得たるは、箱根鹽原等の山川を寫真的腦中に疊んで境に隨つて形を賦したるものと覺しく、園主の炯眼尤も及ぶ可からざるを感じぬ。頓て時刻なればとて園中の寒月亭に導かれ此處にて午餐を饗せらる、蓋し亭を寒月と云ふは最初此園を築くに當り、杉田の梅林を移植して暗香疎影の乾坤を現出せしかば、彼の高青邱の雪滿山中高士臥、月明林下美人來の句意に據りて斯く名づけたる者ならん、其打通りたる八疊の間は槎枒たる樹影を浸したる草川を前にして、床には卒翁筆布袋に印月江の讚ある一軸を掛けられたるが、其讚は左の如し、

旅泊長汀市、故家兜率陀、杖挑閑日月、囊括幾山河、阿逸多々々々、

天上人間奈爾何、

道場正印敬贊

一間床に頃合の豎幅にして畫も讚も申分なきものなるが、是れが近來園主の大掘出物なりとは聊か憎らしからざるを得ず、而して其前には時代青貝香盆にバピロン掘出しの鹽壺らしき香爐を置き、室の一隅には銅風爐に蘆屋作蘆鷺地紋の釜を掛けられたるが、文人趣味の未だ全く消滅せざる園主とて、數多く所持する香爐の中より殊に此バピロンを選ばれたるは聊か沈着を缺きたる觀なきに非ず、斯くて程なく運ばれたる懷石は左の如し、

汁 三州味噌、 向附 鯉木の芽あえ、 椀 鱒冬瓜木の芽、

燒物 鶉寄せ、 吸物 蓴菜、 強肴 數々

食後彫三島の茶碗にて薄茶一服頂戴し、更に寒月亭内を一覽せしに此八疊の間の外に尙ほ三疊敷の茶室あり、其床に掛りたる一軸を見れば西行筆の歌切にて前に左大將とあり、歌は三首にて左の如くなりし、

郭公みちにやあふとこよひさは

春のおくりに関やこえまし

待ちかねてあくかれ出てはほとゝきす

ちかひて宿にもしやきなかむ

夜をこめて駒にくらおけほとゝきす

初音き、つとおやに申さん

此歌切には郭公の歌多きに因り、俗に西行の郭公切など稱して出來面白きものなるが、青葉隠れの茶室中に此一軸を見る時は、後の山に啼く杜鵑を聞くらん心地して得も言はれぬ感興を催しぬ、偕て又奥まりたる一室は書齋にやあるらん一疊敷長板にて、丸爐を切り竹の自在に手取釜を掛け、壁には十卷抄中吉祥天女の像ある繪巻物切を掲げ、唐銅に佛の一字ある杓立を置き、又一方には時代根來の經卓の上に國分寺瓦硯を載せて翡翠の筆架に唐筆を架け、古銅の小花瓶に野花一輪を挿みて、其傍に大方廣佛華嚴經卷第一卷を置きたるを見れば、何々上人の庵室かと思はれ、身は本牧三の谷にあるを忘れて嵯峨の山寺杯に入りたらんが如く、四境寂寞として其奥床しさ言はん方なかりき。

四

寒月亭にて午餐の後、亭後の高丘に攀登れば、其一端に彼の東明寺より移轉されたる三重塔あり、何れ名匠の手に成りたる者なるべく、塔の格好甚だ宜く第一層と第三層と簷先の間敷に格段の相違なけれども、打視たる處優美高雅にして、風鈴鬼瓦等も完全具足し、巧に曲線美を究極し居るは、日本國中に於て確に屈指の古塔たるべし、扱て是れよりは松風閣に入り園主の所藏幅を一覽する次第なるが、松風閣も近來大分増築して今は手廣き山莊となり、環閣皆松ならざるなく、何れの座敷に通りても翠蔭座に入りて目に涼しく、松の外には遠山近嶼を俯瞰して、杉田の梅林も亦一眸の間にあり、其風景を敘述すれば殆んど際限なきが故に、今姑く之を擱き、先づ拜見に取掛りたる書畫の重立たる者は左の如し、

信實筆後鳥羽院尊影

因陀羅筆寒山拾得圖

啓書記筆山水二幅對

道潛妙總大師墨蹟

光琳筆伊勢物語二幅對

乾山筆花籠及び波に薄の繪みだれ盆

以上松風閣の陳列の書畫中に就き優美とも高尚とも言はん方なき名品は、信實筆後鳥羽院尊像にて、上疊の上に在します座像の神采奕々たる細密の筆致は、世間に有觸れたる上疊の三十六歌仙杯に比して更に幾層立優りたる者にして、幅柄は幅尺三に

堅二尺五六寸もあらんづらん上に色紙三葉を畫きて、其中に、

櫻さく遠山鳥のしたり尾の

なかくし日もあかぬ色かな

其他御製二首を書附けたる筆蹟も亦頗る流麗なるは當時大家の作なる可し、抑も此尊影は後鳥羽院が北條氏の爲めに遠流の御身と爲らせられたる時、第七の氏久皇子に賜りたる者にて宸翰三通まで一卷として其掛物に添へられたるが、氏久の子孫は代々神官として賀茂神社に仕へ連綿繼續せしに依り、今日まで同家に傳へ來りたるを近頃圖らず園主の手に入りたる者なりと云ふ。

余は此尊影を拜するに付けて聊か思ひ當る事あり、近來肖像を畫かしむる者は専ら油繪師に依頼して例の懸額を作らしむる様なれども、日本家にては懸額を掲ぐ可き處なく、又不斷に掲げ置けば却て之を粗末にするの嫌ひあり、旁々日本畫を以て肖像を畫き之を掛物と爲し置くは最も便利なる方法ならん、古來名家の肖像を畫きたる日本畫中には聖德太子、鎌足公、弘法大師、源三位頼政、源頼朝其他各宗の祖師禪師等

枚舉に違あらざれども名家の筆に成りたる者は油繪に比較して聊か遜色なきのみか、取扱上非常に便利にして保存上にも亦極めて好都合なるが如し、左れば後來肖像畫は信實流の土佐式畫法に依り之を掛物仕立と爲し、日本家の床に適當する様益々新意匠を加へたらば自他の便益果して如何、唯信實其人の如き名手を今日に生ずべきや否やは疑問なれども、古今人に相違ある可き筈なれば時代の要求に依りて追ては大畫家を生ずるの日なしと言ふ可からず、是れ余が年來の理想なれば事の序に一言して敢て大方の高教を乞はんと欲す。

五

扱て本日特に一覽を乞ひたるは、近頃園主の手に入りたりと云ふ光琳筆伊勢物語の二幅對なり、一方は『風吹けば沖津白波龍田山』、一方は『春日野は今はな燒きそ』の歌意に據り業平の艶物語を描きたる者にて、光琳百圖中最も有名なる者なるが、土佐より出で、土佐を離れ宗達を學んで宗達を壓する大手腕固より凡慮の及ぶ所に非ず、代價三萬五千圓なりと聞けば一應喫驚する事なれども、實物を觀れば更に又喫驚して如

何様見逃す可からざる尤物とこそ思はれたれ次に乾山中の乾山として見れども見れども見飽かぬは同人筆草刈り籠の一軸なり無造作に三つの花籠を描きて其中に八千草の花をあしらひ上に左の讚歌あり

花といへは千草なからにあたならぬ

色香にうつる野邊の露かな

例の達筆にて書き下し紫翠深省の落款も美事なる非凡の出来は光琳と雖も遠く三舎を避けざるを得ず又同人作の木地みだれ盆に描き込みたる波に薄の淡彩畫も殆んど同一の筆致にして共に乾山の傑作と謂ふべきなり啓書記の山水二幅對は何れ宋人ねらひと覺しく珍しく筆勢溫雅にして圖柄も亦結構なり道潜の墨蹟は義之風の運筆美事に蘇東坡の推尊したる高僧なりと云へば稀有の墨蹟と言ふて可ならん其他當日拜見の書畫は何れも一騎當千にして園主の眼識非凡なるに感服したれども唯因陀羅筆寒山に至りては如何なる物數寄にて此乞食坊主を抱入れたるにや何か見所なくては叶はぬ事ならんが主人の鑑識は斯かる物數寄に依りて一層上達する

るならんと思へば滿更捨扶持とも爲らざる可きか。

今を距ること十四五年前余が初めて園主に面會したる時は園主は文人畑にて玉器や盆栽に浮身を養ひ木米竹田を有り難がり煎茶で活惚れの若旦那なりしに一朝翻然として其嗜好を更むるや通常の經路より言へば第一四條派次に狩野家夫れより日本古畫となり更に更に宋元に溯洄する順序なれども園主は煎茶畑より唯一足に佛畫門に飛び入りて然も其奥の院に薦進し天下第一の佛畫孔雀明王を生擒して同好者の荒膽を挫ぎたるのみならず一躍して猿臂を古筆方面に伸すや美術の神の殊寵を得て忽ち同方面の覇者となり更に美術の奥の院より逆戻りして或は宋元畫或は日本古畫或は光琳乾山等に至るまで精を抜き粹を集めて今や松風閣の寶藏は日本國中三本乃至五本の指を折らるゝ大權威とはなりたりけり唯未だ深く抹茶道に入らざるは同好者の遺憾とする所なれども其趣味を解するは既に其道に入りたる人よりも深ければ遠からず斯道の閑寂を味ふに至らんこと固より疑ひを容れざるなり素封家にして文學美術趣味に富み思ひ至つて之れを遂ぐるの實力あれば何を爲して

か成らざらん、何を望みてか得ざらん、余は嘗て世の富豪を羨まざれども富豪にして文思美想ある園主の如き者にして始めて健羨の價值あるべしと思ひぬ、腰折一首あり、

世の中をいとふとなしに磯山の

雲におきふす君をしそ思ふ

斯くて美術談に時移りければ、厚く園主の芳情を謝し、夕刻松風閣を辭し去りけるが、當日余が園主に贈りたる即吟は左の如し、

松濤聲湧斷橋西、

山逕斜通有隱栖、

爲是道人能愛客、

輕車衝雨訪三溪、

吉田楓軒初風爐茶會

(大正三年六月一日)

上

吳竹の根岸の里も世に連れて雑多の家居立並び、剩へ電汽車の往來百雷の轟くが如くなれば、名物の鶯も何時の間にか夜逃して今は全く俗地と成り了りたるかと思ひの外、御行の松を横目に見て稍奥深く日暮り邊に到れば昔ながらの根岸の里、浮世離れし別天地もありけり、今を距ること十數年前地を此邊に相して木石を運び園池を設け、御殿様の一構に續きて風雅なる庵室を築造せしは當時三十前後の若宗匠吉田楓軒君にして、設計萬端渾て其方寸より割出し、全然其理想を發揮したるは此若宗匠が初陣の大功名にして、後年一廉の茶人となる可き運命は既に此時に決定したりしなり。

爾來茶道の造詣は益々深く今は和敬會中にも屈指の大家と爲られけるが、去る一日正午余は其初風爐茶會に招がれて先づ待合に罷り通れば、相客は青地湛海、松原瑜州、伊達忠七、梅澤鶴叟の面々にて、室の一隅には鐵の窠れ風爐に銀瓶を掛け、茶盆には染附の香煎入に朝日焼の茶碗あり、手附松の木煙草盆には赤膚焼の火入ありて、寄附より先づ心地好く頓て抽籤にて正客を定めしに例に依り湛海翁が運強く當籤しければ、之を先達として順次庵室に繰込みしに、室は長三疊臺目にして床に掛りたるは

光廣卿より夏菊の花に添へて一首を澤庵禪師に贈り禪師が之に返歌を書き添へたる者にて極めて趣味ある一軸なるが其歌は左の如し、

花に添へて

光廣

我か身には心の花のなと咲かぬ

草にもあらず木にもあらず

東海禪寺

御返歌待入候也

宗彭

色々に夏を時そと咲く菊も

心の花の種にやはあらむ

恐れ入候得共御返歌進上

世に傳ふ澤庵禪師嘗て烏丸光廣卿に就て和歌の教を乞はんとせしに、卿は禪師の歌を見て其大成を疑ひ寧ろ學ばざるに若かずと忠告せしに、禪師は和歌を嗜むこと生

命の如く「人ことに一つの癖はある者を我にはゆるせ敷鳥の道」と詠みて卿に送りければ、卿も其熱心に感じて時々添削の需めに應じ禪師も後遂に歌道の達人と爲りしと云ふ、左るにても右唱酬の和歌は如何なる折の作にやあるらん、光廣卿の歌中に歎慨の意を含み「我身には心の花のなと咲かぬ」と云ふ一句を見れば、卿が徳川幕府の忌諱に觸れて江戸謫居中胸中の鬱悶を禪師に漏したるを、禪師も大に同情して卿を慰めたる者にあらずや、烏丸家は有名なる烏丸肩衝後北野肩衝の茶入を所藏せし程にて、光廣卿は歌人にして茶味を愛せし人なり、澤庵禪師は遠州江月松花堂等を友とし禪衲にして又能く茶事を解せし者なり、此茶趣味ある公卿僧侶が夏菊を題とせし唱酬の和歌は、初風爐の一軸として如何に適切なる者なるや、本日當家に於ける茶會の花は其實此一軸を種として開きたるものと言ふも強ち過言に非ざる可きなり。

中

席の一隅を見れば辻播磨作丸釜風爐に細川三齋好み松向寺文字入釜を掛け、主人の挨拶に續きて順次運ばれたる懷石は左の如し、

汁

三州、味噌、
茄子

椀

鱧、隱元、
柚花

向附

金、欄手、菊形、皿、
鯛、山葵、甘酢

燒物

織部、燒、手鉢、
鱧、附、燒

吸物

海草

八寸

鮎、鹽、蒸、
藤、豆

香物

御本、刷毛、目鉢、
胡瓜

酒器

阿蘭陀、蓋、
鐵、銚子

懷石後水羊羹を頂戴し居る間に、炭手前ありて器物は次の通りなりし、

香合 獨樂

炭斗 時代藤組

羽箒 鶴

灰器 南蠻鹽蓋

火箸 鐵張抜き

鑲 大角豆形

獨樂の香合は兩面蛇の目形にて殊の外結構なり、炭斗は形と云ひ寂びと云ひ一段優れて確に天狗物なる可し、扱て中立となり元の待合と背中合せなる腰掛に到れば、場所柄とて露地も手廣く老松の下に大石ありて其上に與次郎作らしき鐵燈籠を置き、椎の大木の下には朝鮮傳來らしき古石塔ありて飽かぬ風情を見せけるが、合圖はなくて主人自ら出迎ひたるは斯かる場所柄として聊か風情を缺きたる心地せられぬ、斯くて後入の床には一見遠州作と見らるゝ輪なし二重竹花入に大山蓮華一輪を挿み、水指は青磁手附釣瓶形にして其側に薩摩廣東の袋掛りたる茶入を置きたり、頓て

主人の濃茶手前あり器物は左の如し、

茶入 瀬戸芋子
遠州箱書付

茶杓 遠州作
共筒

茶碗 三島

右器物中茶杓は筒に「式部卿參る宗甫」とありて、遠州が松花堂に送りたる者なるが節より上は白く下は黒くして模様あり、又其節の邊に歪みありて一段の出來と思はれぬ、最初用ゐたる花入が宗中作にて銘を細谷川と云ひ、寂竹にて一見遠州らしく見らるゝ者なるに何故又も茶杓に近縁の者を選びたるかと思ひしが、偶には斯かる組合せを爲して客を迷はすも亦却て一興なるべきか、元來此席の取合せは青磁手桶の水指などあり、會記にて一覽する者は廣間の役者が舞臺を間違ひて小間に飛び出したる様にも想ふべけれど、黒き土風爐に青き青磁の水指、白き三島茶碗に、赤き薩摩廣東の袋掛りたる茶入と對立したる處は殆んど五色の配劑にして、見た眼に綺麗にして且つ涼しく初風爐の時候に當て込みたる主人の意匠は蓋し此邊に存せしならん、茲に最も嬉しかりしは主人が例の性急にて、懷石及び點茶萬端一瀉千里の速力を以てグン／＼急行せし事是れなり、下戸黨の余等には是れが此上なき亭主振りにして、

彼の淺田正文氏がお茶入拜見の感服最中、當主人が早くも其場を立去りて頭を上ぐれば、當の敵なきに驚きたる失策談も今更に想ひ出されて其愉快さ言ふばかりなし、回顧すれば當時を去ること早や已に十餘年、主人頭上の電光は大に其燭力を加へたるにも拘らず、性急は年と共に却て其速力を加へたるが如く、入席後物の一時間とも經ざる間に懷石も濃茶も悉く終りて、イザ廣間にと云ふ段取となりたるは近來愉快の茶會なりき。

下

偕て主人の挨拶に廣間へとありければ例の八疊の間ならんと思ひの外、梅澤鶴叟心得て案内するを見れば、露地を逆戻りして再び腰掛けの前を通り、更に生垣の外に出で丹頂の鶴のイみ居る草山の麓を過ぎて、青水を湛へたる池の汀へと歩み去れば、梅楓松椎等の老樹池邊を繞りて生茂り綠蔭滴らん許りなる庭園の景色一段なりしが、見渡す向ふに御殿構への一棟あるは是れなん當日の廣間なりけり。斯くて其廣間の前に到りて庭前の景色を眺むるに、池水を隔つる樹々の梢は上野の

山と接續して鬱蒼たる眼界曠豁にして、負に塵寰の外に出るの想あり、主人が處女作の庭園とて築園術上より品評すれば多少の缺陷なきに非ざれども、餘りに無遠慮なるやうなれば、其品評は他日に譲りて、先づ打通りたる廣間は京間十五疊敷にして、九尺の床には探幽筆中維摩、左右牡丹に唐獅子の三幅對を掛け、其前の時代經机には雲鶴の香爐を載せ、書院には五十嵐道甫作の精巧なる蒔繪の硯箱に添へて、寂蓮筆大江千里集を置き合せ、脇棚の前には青磁の大水盤に蘆と河骨を生けたる飾附、如何にも威風堂々たりしが、片隅には抱一筆櫻花風爐、先屏風の前に道志作及臺子を据ゑて飾附けたる器物は、

釜

因幡作

風爐

唐銅切掛け風爐

水指

祥瑞、竹の節撮み、縁に一閑人あり

杓立

青磁

茶碗

仁清、數天目

蓋置

古銅

天目臺

東海寺傳來、水仙蒔繪

茶入

存星水仙模樣棗

火箸

砂張

にて蒔繪の盆に惣菓子を載せ、煙草盆には雲草對火入を入れて、薄茶一服と云ふ趣向なり、臺子手前は勿論主人宗匠なりしが、後見大久保宗匠も現れ出で、近來珍しき正

正堂々の陣容なるに、和敬會員中に旅行者杯多く兩三回にて此陣容を撤せんとする由、誠に残念の至りにて主人も嘸かし本意なき事ならん。

右飾附の中探幽三幅對は出來十分に、堂々一座を壓する御掛物とこそ見受けられ、又寂蓮の大江千里集は秋元子爵家の西行山家集など、異曲同工と稱すべく、其小品にしてピリ、と辛き處、古筆數寄者の腹を抉る寸鐵とも評す可きか、扱て又臺子飾中にては祥瑞の水指最も目覺しく、其色合稍淡くして普通のよりも一手古く見ゆるが爲めか俗に之れを古祥瑞と唱ふる由、祥瑞に新古の名あるは甚だ奇異なるやうなれども、古來此符牒にて兩者の區別を立て居れりと云ふ、此處に東海寺傳來の水仙蔘繪天目臺を用ひたるは定めて慘澹たる意匠なるべし、此天目臺は小堀遠州が唐物天目臺を寫して百個東海寺に寄進したるものなりと云傳へ、小間の一軸にある東海禪寺云々と對照し來れば、當時の茶趣も眼前に浮びて無限の感興を添ふるを覺えぬ。斯くて此廣間附きの大茶會を了りて各歸路に就きたるは恰も午後三時半にして、主人が茶室中に於ける活動の快速力は愉快なんと言ふばかりなし、昔し利休が茶會は

二時に過ぐ可からずと宣告したるは、後世茶人の恪守すべき清規にして、主人が洒々淡々無用の世辭に無用の時間を空費せざる動作は、正しく此清規に該當すると同時に又頗る當世向きなれば、余は茲に双手を舉げて此吉田式に賛成する者なり。

萬古燒展覽會

(大正三年六月七日)

上

桑名の人森茂生氏十數年前より其所生地に起りたる萬古燒蒐集の志あり、隨つて搜り隨つて買ひ、收藏倍々多きに隨つて其好奇心は益々加はり、熱狂的精神を以て今日までに蒐集したる萬古燒は、數量に於ても種類に於ても他に比類なき程度に達したれば、之を一室に陳列して萬古燒の變化百出殆んど至らざる所なきを示し、獨り好陶家の爲めのみならず一般工業社會に對して比較参照の便宜を與へんが爲め、今度日本橋俱樂部に於て其收藏品の展覽會を催したる由なれば、余は此殊勝なる然も興味ある展覽會を一覽せんとて去る七日日本橋俱樂部に赴きたるに、二階大廣間の正面

床脇には萬古燒の開山沼波弄山及び其後繼者たる森有節及び竹川竹齋の肖像を飾り、廣間の周圍及び中央に陳列したる萬古燒は種々雜多にして其種類の多きこと實に豫想外に出でたり。

折柄會主森茂生氏出て來りて萬古燒に就き種々説明したる其大要を記さんに、天明の頃桑名に沼波弄山なる者あり、小向山の麓に於て始めて萬古燒を試みたるが、弄山は本來資産家にて獨力を以て道樂的に陶業を起したる者なれば、其製品は次第に好陶者の賞翫する所と爲りしのみならず、終に徳川將軍の台聽に達して幕府の御抱陶器師の名譽を得たるは唯此弄山一人のみなりと云ふ。

斯くて弄山の江戸に出づるや陶窯を向島邊に築き幕府御用の陶器を製作せしが、後江戸にて終りたりとも又桑名に歸りて歿したりとも謂ふ、江戸の萬古燒は勿論弄山一代にて廢窯せしが、小向に於ては其後森有節出て、大に遺業を振作し、又弄山の弟に瑞牙と稱する人ありて藤堂侯の御抱と爲り、伊勢に萬古窯を起したるを安東燒と稱する由、此外萬古窯には竹川竹齋なる大家ありて、伊勢の射和に射和萬古を起し其

製作尠からず、即ち弄山瑞牙、有節、竹齋は萬古燒の四大家と稱す可き者にして、殊に不思議なるは此四大家共に陶業を以て衣食する者に非ず、資産家の道樂に種々の試作を爲したる者なれば、一窯にして陶器の種類を網羅する事萬古燒の如きは全く他に比類なき者なりとの事なり。

當日は日本橋俱樂部の二階廣間に各種の萬古燒を陳列し、抹茶席及び煎茶席をも設けて來客に茶菓を供したる次第なるが、此の煎抹二席の器物も悉く萬古燒にして、殊に抹茶席の如き風呂釜までも萬古燒なりしは如何に其收藏範圍の廣かりしかを示すに足らん、今先づ廣間の陳列品を見るに、萬古燒其物よりも各種の陶器を寫したる者に於て其手腕を發揮し、例へば朝鮮燒物に於ては雲鶴高麗刷毛目等を寫し、更に唐津、南蠻、備前等を寫し、青磁もあれば祥瑞もあり、信樂、九谷、瀬戸、諸窯殆んど寫さる所なく、其器物の種類は茶碗、茶入、香合、皿、鉢、水指、燭臺等に至るまで一切の種類を網羅せしは驚き入りたる手腕にして、日本國中一窯にして斯く多様の陶器を摸寫せし者は他に其類例なかる可きなり、如何様弄山、有節、竹齋等は相當の資産家にして其業を以

て世を渡る陶工に非ず、様々に工夫して諸方の陶器を模造するを唯一の樂みと爲し
たる者にして、此多種多様の模寫品を製作し得たるは、彼の職人氣質を離れ全然算盤
を度外視したる結果ならんのみ。

下

萬古燒の起源に就き兼て余等の聞き傳へし所は、大要今度の萬古燒展覽會主森茂生
氏の語る所と符合せり、即ち萬古燒は伊勢桑名の住人沼波五郎左衛門(弄山と號す)と
稱して、代々茶事を嗜み千家の宗匠覺々齋原叟の弟子にて寸方齋と號し、當初樂燒を
模造し居りしが、後小向村に移り山邊の土を以て所謂萬古燒を燒き始め、天明年間江
戸表に出て、小梅村に陶窯を築きたる事台聽に達し、遂に將軍家の御數寄屋御用を
仰せ付けられ各種の茶器を燒き出せりと云ふ。

森氏の陳列品中に弄山の自作に係る青磁寫の燭臺あり、是れは本所の羅漢寺に寄附
せし者の由にて、弄山が江戸へ出府の際將軍家の羅漢寺御成を機とし、其製作品を台
覽に供したるに依り始めて御數寄屋御用を仰付けられければ、報恩の爲め右燭臺を
同寺に寄附したるなりと云ふ、扱て江戸に於ける弄山の萬古燒は一代にて其跡を絶
ちしが、其後安政頃に至り後繼者として伊勢に現れたるは彼の森有節にして、固より
血縁あるに非ず、唯弄山の風を聞きて起ちたる人なるが如く、是れより弄山を古萬古
と稱し有節を後萬古と稱する由なるが、其後萬古の名聲甚だ振はざるは果して如何
其窯は今猶ほ伊勢に存在すれども弄山有節の如き陶工其人を出さざるが爲めなら
ん。

當日森氏の抹茶席を一覽するに、床には白河樂翁公の「山と云ふ事を詠める」と云ふ懷
紙を掛けたるが、其歌は左の如し、

思ひ入る道をはつくせ筑波山

このもかのもに心うつさて

當日の一軸としては如何にも適切なる者にて、森氏がこのもかのもに心うつさて偏
に萬古燒蒐集に邁進したる心入を詠み出でたる者の如く、殊に山と云へば陶器に縁
あり、其上桑名の舊藩主樂翁公の歌とありては是れ以上の掛物ある可きや、斯くて此

一席の飾附けは左の如くなりし、

茶入 古萬古 宋胡錄寫 茶碗 有節御本寫 水指 古萬古樂寫 赤芭蕉繪

香合 古萬古 祥瑞寫 柿 釜 射和萬古小丸 炭斗 唐物藤組丸

花入 射和萬古 青磁寫 杵形 茶杓 象牙利休形 建水 有節朝鮮寫

蓋置 古萬古 青磁寫 三人形 菓子 岩清水 桑名花の舎製 火入 古瀬戸寫エフコ 宗普箱書附

又煎茶席を一覽するに、床には射和萬古に其人ありと知られたる竹川竹齋の蘭自畫

讚の豎物一幅を掛けたるが、山本梅逸などの畫風を學びたるにや、文人調にて中々の

達筆なるは尋常一様の陶工に非ざるを見る可し、斯くて其他の飾附は左の如し、

盛物 籠に風月三根 青磁寫 蛙水入 三個添、古萬古、射和、有節 脇床 觀世音像置物、射和、仙盛 瓶古萬古、色繪、花、姫百合

昆爐 有節作にて 臺も同様 茶入 古萬古 青磁寫 巾筒 雲鶴寫射和

急須煎茶々碗 有節 色繪 茶托 繪色繪、安東 水注 朝鮮寫有節

菓子鉢 有節 刷毛目寫 菓子 紫陽花 桑名花の舎製

火入 色繪 鐵鏝形 古萬古

文房具

硯石 新萬古 水滴 色繪古萬古 墨臺 青磁寫 靈芝 射和

帖 萬古燒の由來冊子 帖鎖 青磁寫 印材 肉池 朱泥寫 雲龍 彫、瑞牙

余は此の展覽會主森茂生氏の名を聞きたるも面會したるも共に今日が最初にて、殊に倉卒の際なれば氏が如何にして萬古燒蒐集を思ひ立ちたるや、其動機等に就て詳細の説明を聞くの暇なかりしが、兎に角獨力を以て一窯の陶器を斯くの如く蒐集する熱心は固より尋常一様に非ず、氏が自ら十數年來熱狂的精神を究盡したりとの告白は蓋し過言に非ざるべきなり、余は森氏の好意に依り萬古燒の特色及び其摸寫力の旺盛なる實相を看取し、圖らず萬古學の一端を學ぶ機會を得たれば茲に其芳情を謝し併せて氏が萬古燒蒐集の熱心に對して敢て敬意を表する者なり。

金城名器錄

(大正三年六月二十二日)

日本國中名器所藏の人多きは三都を外にして、先づ指を加州金澤尾州名古屋に屈せざる可からず、而して金澤の名器は一昨年同地に赴きて略ぼ其一斑を窺ひたれども、名古屋に於ては從來屢々滯遊せしにも拘らず、未だ一覽の機會を得ざれば遺憾の餘り、其後追々探聞せし所に據るに、當市の名器所藏者は其數極めて多きが中に、辻堂の香合、松陰の茶入、其他古筆物等を所藏する關戸守彦、平手肩衝の茶入、宗旦銘貧僧の茶碗等を所藏する神戸分左衛門、人形手茶碗等を所藏する小出庄兵衛、日本古畫及び古筆手鑑等を所藏する岡谷總助、寸松庵色紙及び大師座右の銘手鑑等を所藏する富田重助の諸氏は、鐵中の錚々たる者なりと云ふ、右諸氏中富田重助氏は年來懇意の間柄なれば、嘗て其所藏品を一覽せし事あれども、其他は土地の習慣にや容易に人に示すを好まず、中にも關戸守彦氏の如きは所藏も頗る多様にして、斯道の參考に供すべき者尠からざるを以て、從來一覽を申込みたる者少からざりしが、曾て其需めに應じたる事なしと云ふ。

然るに余は偶然關戸氏に面接して否應なしに其許諾を得るに至りたるが、其次第は昨年九月末名古屋市能樂會に於て東京の好能紳士を同市能樂堂に招待せし事あり、余は蜂須賀侯等と共に當地に來りて、弱法師一番を舞ひけるが、關戸氏は名に負ふ好能家にして、令息中には能狂言を能くする者あり、當日も夫れ一役を引受けて舞臺に現はるゝ、始末なれば親の身として何條參會せずして止む可き、斯くて關戸氏も此東都演能者歡迎の亭主役と爲り、頻に幹旋の勞を執り居たれば、余は圖らずも同氏に面會して、雜談の末豫て名器を所藏せらるゝ由傳聞し居れども、未だ拜見の機會を得ず空しく今日に至りたる次第なるが、美術品とは因縁淺からざる此能樂の媒介に依つて今日面識の榮を得たるこそ幸ひなれ、勿論今日唯今とは言はざれども追つて一覽の許可を得たしと言へば、氏は如何にも迷惑なる面持にて、從來幾多の貴顯紳士より同様の交渉ありたれども一人に示せば其他の所望を斥くる能はず、斯くては遂に其煩に堪へず心ならずも人の機嫌を損するが如き場合を生ずべきを恐れ、道具は何人にも示さざるを家の掟と爲し居れば、此儀は平に御容赦をとの事なり、左れども顔を見たが百年目、何條手答へなくて引き下るべき、名器拜見に就ては余は日本國中

何方に於ても特殊の權利を有する者なり、貴下も亦此權利を認めざる可からず、唯貴家の掟とあれば余も亦之を尊重して一條件を提出すべし、即ち余の所望する名器十點を限りて一覽を許可せらる可しと、嚴談頗る急なれば關戸氏も今は遁るゝに道なく飛んだ處で飛んだ人に捉まり進退維れ谷まりぬと、遂に讓歩の色を示し然らば貴殿一人に限りて御所望の十點を貴覽に供すべしと承諾せられたるにぞ、同座の人々手を拍つて偕ても美事なる外交談判かな、關戸氏に對して簡程の條約を締結せし者は古來一人もなかる可しとて大に賞讃せられけるが、扱て其條約實施の時日に就ては爾來次第に遷延し、當春櫻花の時節を以て其履行を迫りしに、令間出產の爲め是れ亦更に延引して、今度此度態々彼の條約の通り、十點拜見を申入れたる品々は實に左の如くなりし、

一、染附辻堂香合

二、青磁桃香合

三、廣澤手茶入銘松陰

四、宗全造茶碗銘鬼薊

五、玳皮蓋天目

六、志野向附

七、祥瑞在銘酒吞

八、佐理卿古今集筋切

九、俊頼朝臣東大寺緣起

十、土佐光長病草紙

二

名古屋關戸氏所藏品一覽の爲め、六月二十一日午前八時半新橋發汽車にて午後四時名古屋に着到、直に丸文に投宿せしに同市の素封家兼好事家富田重助氏の來訪あり、明日貴下關戸氏の銘物御一覽に就き幸にも拙者と織田德兵衛氏と特に陪覽の榮を得たり、斯の如きは容易に得難き御相伴にて、貴下が外交談判成功の餘蔭として大に感謝せざる可らず、但し右器物拜見は午後一時よりとの案内にて點數も至つて少ければ、明日午前織田德兵衛氏方にて薄茶一服參らせたと同氏より内々拙者に相談あり、此儀如何との事なれば余は豫て織田氏の茶席を一覽せんと思ひ居たる折柄、願ふてもなき仕合せなりと一も二もなく快諾して翌二十二日午前十時市内鐵砲町なる織田德兵衛氏の閑居を訪へば、富田重助氏既に在り、共に三疊の寄附に入りて扱て其壁床を見れば、田中訥言筆素瀧の細長き一軸を掛け、煙草盆には萩燒三足の火入あり、棚の上には時代蒔繪硯箱ありて別に瓶掛などの備付なく、白湯を入れたる染附

茶碗を主人自ら運び出す無造作の亭主振り、當初より先づ佗び茶人の境涯を示して客も至つて安氣なりき、扱て是れよりは茶室に罷り通る順序なるが、此機會を利用して余は一應織田徳兵衛氏を紹介し置くべし、織田氏は名古屋の數寄者にして市内鐵砲町に閑居し、年は五十前後なれども頭髮半白にして老翁の如く、紅塵堆裡に市隱の境涯を作りて風流三昧に消光する人なるが天性道具好きにて名器を戀慕すること、戀女房の如し、蓋し戀の一字は氏の道具に對する心相を遺憾なく表示するものにして、氏は明日某の道具拜見の約ありと云へば前夜は待焦れて徹宵就眠する能はず、扱て愈々拜見となりて其道具を手にするや、猫が鼠を弄ぶが如く左見右見て相好も崩れ涎を垂さん許りに、暫時見惚れて其魂は既に道具の中に入り、果ては茫然自失して道具と織田と打成一片と爲りて、所謂三昧に入るの趣あり、又最も氣に入りたる道具に向ふ時は其手もワナ／＼と震ひて恰も戀人と見合するが如く、相對して俯目勝ちと爲り何とやら面羞し氣に見ゆる事あり、斯くて其氣に入りたる道具を買入るゝ事あれば、其當座は思ひ出して間がな隙

がな之を見ることがを樂み、時としては夜半突然蹶起して獨り倉庫の中に入り其戀女房を取出して枕頭熟々と打眺めたる後始めて就寢する事ありと云ふ。

斯かる熱心斯かる奇癖を有する氏の一見したる諸道具は殆んど眼中に沁込みて一度瞑目すれば歴々眼前に現はるゝ程にて、道具に掛けては雷に博覽強記なるのみならず其鑑識も頗る高く、名古屋地方に於ては斯道のオーソリチーとして數寄者の間に定評ある由なり、氏の茶儀は久田宗全の流を汲み、道具は佗びて綺麗なるを好み所謂綺麗寂びを愛する數寄者なれば、當日氏の茶席にて面接したる諸道具は前述織田一流の面構へにて、雜兵に至るまで主人の眼鏡に適はざる者は一切陪席するを許さず、潔癖の隅々まで行き渡る處、東都に於ても殆んど匹敵するものなく、金城名器拜見の前座に於て斯かる眼福を贏ち得たるは誠に望外の仕合として、余は先づ以て富田織田兩氏の好意を鳴謝する者なり。

三

遠來の客とありて富田氏より推さるゝ儘、余は正客を失敬して織部口より庭前に下

り立つに、幸ひ雨も絶間にて今は露地笠の不用なく飛石傳ひに七八歩行けば、老樹の下に古色蒼然たる石燈籠あり、蹲踞石も亦面白ければ頓て盪嗽して打通りしに、庵室は五疊敷にして其二疊の正面に巾一間奥行三尺の床を取り、其下座が三疊にて床脇と裏合せに釣棚あり、其下に風呂釜を安置する間取にして、床には信樂旅枕形の花入に夏罽と稱する草花を挿み、諸飾りにて其上に光廣卿の三首懷紙を掛けられぬ、信樂花入は一見伊賀の如くにして出来面白く、花は苺の如き葉に細やかなる白き花咲きて其莖が罽の如き様したるより、此名を得たるものならん、扱て一軸は無類の出来にて其歌は左の如し。

夏日同詠三首和歌

權中納言光廣

五月雨

五月雨はいつくもわかぬ雲水に
 豊葦原の昔をそ見る

庭夏草

つゝまれて咲くひと花もありぬやと
 わけてや見まし庭の夏草

寄松戀

ちらすなよ松の言の葉つもるとも

うはの空なる風の便りに

室隅を見れば、鬼面環附の鐵風爐に同環附の平霰釜の切かけ能く取合ひたるを丸形敷板に載せたるあり、主人出で、挨拶の上炭手前に取掛りたるが、器物は左の如くなりき、

香合 青貝六角 甲人物、周圍寶盡 炭斗 時代藤組 羽箒 鴻

火箸 鐵に銀象眼

青貝六角香合は精作の人物二人ありて模様も普通の物と變り且つ段紋麗しく、主人は頻に謙遜して傳來の説明を爲さゞれども、何々倉帳などに出づ可き名器とこそ見受けられ、斯くて紹鷗好み曲水指を先頭に順次運ばれたる器物は左の如し、

茶入 不味公好 黑地菊模様棗

茶杓 勢田掃部作 筒裏千家泰叟宗安書付 茶碗 瀬戸唐津鐵漿

建水 砂張

蓋置 如心齋竹引切 花押あり

席中には座蒲團を出し、仙叟好み一閑張、木瓜煙草盆に麗しき雲草の火入を入れ、獨樂の菓子盆に惣菓子、銘々盆に笹巻、葡萄餅を載せて薄茶一服を侷めらる。斯くて見渡したる一座の器物は固より取立て、言ふ可き程に非ざれども、流石當主人が召抱へたる者として一品々々、自ら其特色あり、瀬戸唐津の鐵漿の如き世に有觸れたる者なれども、當家の此種の傑作にして見込も高臺も面白く、主人が之を手に入れたる時は定めて雀躍りせしならんと思へば、興味も一層深かりき。頓て薄茶一巡すれば時分なりお湯漬をとの挨拶あり、前途を急げば萬端手早く木地の丸盆にていそぐと、懷石を運ばれけるが、其器物獻立は左の如くなりき、

汁 三州味噌、胡桃、すき菜、

向附 織部誰袖形 鮑甘鮮、

椀 鯛寄せ、牛蒡、岩茸、柚子、

燒物 刷毛目小鉢 鱧鹽焼

八寸 沙魚の子、有馬蔭、越天樂と云ふ、毒の葉に載せて

香の物 新備前焼 尾州千大根味噌漬

酒器 染附蓋鐵銚子 朝鮮唐津鐵銚子

刷毛目の鉢は編笠形にて底の割合に廣く且つ平なるは變り物なり、懷石の總體木地丸盆に取合ひて寂味十分なるは流石に老手と感服せり。

四

午前十時より織田徳兵衛氏宅にて薄茶及び懷石の馳走に預りしが、主人が一人にて甲斐々々しく給仕する其趣向の老練なるに感服し、思はず午後一時近くとなりぬれば最早本日之眼目たる關戸氏の名器拜見に馳參ずる時刻なり、イザとて主人の好意を謝し直に關戸氏の宅に罷越せば、今度は余が先着にて先づ案内せられたるは、正面に床を見て左右兩側吹拔きの十五疊許りなる廣間なるにぞ、徐に座敷の模様を見れば、床には相阿彌筆の山水横物を掛け、床脇の板間には毛氈を敷きて其上に辻堂の香合を始め本日拜見すべき器物を行儀正しく陳列せられ、程なく立出てたる主人の挨拶に、御所望の品々悉皆御覽に入れ可き筈の處、病草紙及び古筆物二種は御覽の如き梅天にて取出す可くも非ざれば是れは追て御覽を願ひたく候とあり、如何様尤千萬にして抗議を述べ可き餘地とてなれば、先づ有難き旨返答して、頓て來會し

が是れは職工の手心にて或は七枚となり或は八枚となる等必ずしも一定し居らざる由なり當家の殊に合口も宜く堂の屋根に僅少の剝あり身の合口の片隅に一箇所の山瑾あるのみにて四面玲瓏たる完璧なれば余は他の辻堂と比較するの便宜を得ざれども聞きしに違はず是れが天下第一の辻堂なるべきかと自信するに至れり余は嘗て辻堂香合の寫真を見て香合としては割合に大きく其形も亦割合に不恰好なるに何故香合の大關たる價值あるやを疑ひしが今日實物を一覽するに及んで其藍色の上品なる又地肌の結構なる通常染附形物に比して一段古く一段上手なるを發見し始めて其名實相應するを知り古人の吾を欺かざるを領解することを得たり。

五

次に拜見したるは青磁桃香合なり桃は形物香合相撲番附に於て前頭筆頭の位置を占むる物にして其形に大小あり當家の桃は小形にして堅二寸二分横一寸九分に過ぎず蓋に枝ありて身の裏に葉を表し七官手なれども色合麗しく合口宜く全體氣の利きたる香合にして茶味飽まで深く余には初物にして一見三千歳はイザ知らず七

十五日位は慥に生き延ぶべしと思はれぬ偕て其次は廣澤手松陰の茶入なり此茶入は瀬戸三代藤四郎金華山窯にて金氣多き上品なる茶入なるが袋は伊豫簾及び白地古金襴の二個あり此廣澤手にて諸書に散見する者は春雨松陰吳竹にして其他伏見と稱する者もあり形は紋切形にして景色の變化も亦大同小異なるが唯如何にも上品なるを以て勝れりと云ふべきのみ次は玳皮蓋天目なり天目は其種類頗る多きが中に最も上手なる者は建蓋耀變油滴烏蓋鼈蓋玳皮蓋の六種なり當家の天目は玳皮蓋にて口形直徑四寸九分見込は梅の枝に尾長鳥二疋にて一疋は梅の枝に宿り茶溜りに梅の花の如き模様あり外面は一體に例の玳皮紋を成して高臺は極めて小さく作り行き尋常にして至つて優しき出來なるが臺は桑木地にて塗物より却て雅味あり次ぎに現れたるは祥瑞在銘酒呑なり内部に山水模様あり外部はよろけ縞の間に詩を書込み底裏の銘五郎太輔も亦極めて結構なるが之に附屬する手附樽形の酒次あり同じく祥瑞作にして手頃の徳利に代用すべく此酒次にて彼の酒呑に一杯注れたならば上戸ならざる連中も亦満酌を辭せざる可し。

尙ほ引續きて拜見したるは志野四方入向附五個なり、是れは先年大阪平瀬家の入札に於て當主人が自ら手に入れたる者にして、先祖傳來の名品中に自身の功名品一點を差加へられたるは誠に當然の組合と云ふべし、五個無瑕にして變り繪模様も面白く志野向附中に於て慥に天狗物たる可し、斯くて本日(今日)の打止めとして、最後に拜見したるは久田宗全手捏覺々齋銘鬼薊の茶碗なるが、濃茶々碗としては稍縮り、蹴鞠毬形にて外部底に掛けて下半面は青鼠色を帯び、上半面に至るに随つてほのゝと赤味を増し來り、茶碗の内部一面は赤樂の本色を表して色彩の變化言ふ許りなく、之を鬼薊の花に見立てたる覺々齋の機轉只管感服の外なきなり、覺々齋及び如心齋の箱書附あり、箱蓋表に宗全手焼とあるは蓋し其自筆なる可し、聞く所に據るに宗全手捏茶碗にて最も高名なるものは、八木平兵衛氏所持の初櫻、早川周造氏所持のかき餅(大阪武田氏舊藏)、其他某家所藏の青苔を數ふる由なれども、鬼薊は中に就て嶄然頭角を露はし、其作行色合形状等の井上侯所藏長次郎作太郎坊に酷似するは、宗全も亦蓋し據る所ありしならん。

織田徳兵衛氏が此茶碗に對したる時の尊崇渴仰の状は實に一奇觀にして、氏は拜見ん許りに茶碗を頂きて自身の側に引附けたる儘容易に人に渡さるなど、大に道具好きの特色を發揮したるが、流祖たる宗全の名作に對面したる織田氏としては、人情左もある可き事にして大に同情を表せざるを得ず、斯くて一應陳列品の拜見を畢るや、主人は彫三島の茶碗にて薄茶一服を侑めけるが、當家は寛永年間より曾て火災に罹りたる事なく、然も寛永年中に古屋を移築したる者なりと云へば、當家の一部は信長時代の舊建物なる可く、町家風にて餘り御殿振らざる處に妙味あり、豫て富田氏より申入れたる次第もあれば、主人自ら各室を案内せられけるが、最初に通りたる八疊の間には、床に地紋美事なる公任の緒方切、また其次の間には、後鳥羽院の宸翰にて、此程は五月雨はれ間なき心地し云々の一軸を掛け、松下軒と稱する四疊半の茶室には、松下軒の文字を鑄出せる風爐釜を置かれ、緩々拜見したらば、記述すべき事も定めて多かりしならんと雖も、時漸く晚景に迫りたるを以て、厚く名器拜見の忝きを謝し、本日見殘したる古筆物及び有名なる病草紙等は重ねて拜覽の機會を得んことを

望み、雨聲蕭々の中を、相率ゐて退出したるは早や黄昏の頃なりき。

瀬戸めぐり

(大正三年六月二十三日)

一

本邦陶器發祥の地たる瀬戸の名は、陶器を總稱して瀬戸物と云ふに依りて全國津々浦々までも知れ渡れり、安貞元年陶祖加藤四郎左衛門が宋より歸りて此地に瓶子窯を築きてより、爾來六百八十八年を経て、此最爾たる一山村より年々三百萬圓の陶磁器を産出する今日まで、名工累代崛起して幾多の名器を國家に貢獻したるやは啻に茶人眼に於てのみならず、經世眼に於ても亦等閑視す可きに非ざるなり。

左れば余は今度金城名器來觀を機として一日瀬戸行を思ひ立ち、六月二十三日午前九時名古屋御園町より瀬戸電氣鐵道に乗り、金の鯨を背にして行くこと凡そ二三分、東方に鯨の如き禿山の横はるは正しく陶土の丘陵と見受けられ、陶祖加藤四郎左衛門が陶土を求めて各地を巡り、たる末、此地の陶土が宋國建安に似たるを發見

し始めて彼の瓶子窯を創築したる場所なりと思へば、今も口碑に傳ふるが如く、陶祖深川明神の夢想に感じて瀬戸の陶土を探り得たりと云ふ事又一説に陶祖の母が或る時山中にて奇異なる土塊を發見し、之を懷にして陶祖に示したるに依り此陶土を祖母懷と稱したりと云ふ事など、往時陶土發見に關する苦心の状は歷々眼前に浮び來り、昔を今に緬想して一種の感慨に打たれけるが、電車は一時間餘にして其終點なる瀬戸町に着せしかば、先づ町内の狀勢を見渡すに、其背景たる一帶の禿山は鯨の脊骨を中斷したるが如く、恰も此町の背部にて凹み其谷間より流れ出づる瀬戸川を中心として、高き處は洞及び郷の二部落に分れ、低き處は南新谷北新谷に分れて陶磁器業者は概ね此四部落に星點し丘陵の傾斜を利用して陶磁器窯を築造し居るが故に、遠く望めば累々として砲臺の横はるが如き奇觀あり。

扱て、余は豫て紹介されたる瀬戸銀行に到りて、支配人加藤半一郎氏に面會の上、同地の狀況に就き適當なる説明者を求めたるに、氏は余を瀬戸陶磁器同業組合事務所案内して、同所理事小島重次郎氏に紹介せり、斯くて小島氏の説明する所に依れば、目

下瀬戸焼の状勢は海外輸出の關係より磁器は益々繁昌し陶器は漸次衰頽するの傾向あり、現に同業組合五百戸の中、陶器専門業者は四十八戸にして其他は悉く磁器製造家なり、而して其磁器は幾分美術的製作なきに非ざれども、支那に輸出する製品の如きは堅牢と廉價とを主眼とするが故に、其品質を問ふに違あらず、但し米國其他西洋諸國に輸出する者の内には、非常なる大作品ありて、テーブル、衝立、燈籠の如き者あり、丸窯と稱する大窯にて焼き立て、近年は屏風などの大作頻々として現はれ、注文に應じて製作品も漸次變化し行く次第なるが、目下瀬戸全般の製品は一ヶ年の産額約三百萬圓にして、其内海外輸出向き六に對して内地向き四分の割合なりと云ふ。

二

余は瀬戸陶磁器同業組合理事小島重次郎氏の案内にて、組合所藏の陶器参考館を縦覽せしが、参考品中最も著名なるは陶祖加藤四郎左衛門作と稱する狗犬にして、高さ三尺許りもありぬべし、陶祖の母が初めて祖母懷の土を得たるを喜び、謝恩の爲め深川神社に寄進せしものなりとの口碑にて、本來一對ありしを今は一個となりしのみか、貴重品とも思はず、子供等が其頸に繩を掛けて境内を引摺り廻したる爲め、其一足を缺き、兩耳の一半を失ひたるなど、慘酷極まる取扱を受けたれども、其名作は争ふ可からず、熟視する間に生氣凜々として人に迫る程なれば、今は組合唯一の参考品と爲り、既に國寶に編入されたる由なるが、其釉色の黄瀬戸の如くにして、稍青味を帯びたる處、陶祖の作と云はんよりは、寧ろ二代藤四郎若くは其以後の製品と云ふ可きなり。又此参考品中に行基焼の菓子器あり、世間に有觸れたる同品よりも稍進化したる者にして、是れぞ瀬戸焼の前提として世に出でたる者なる可し、又椿窯製の水指あり、是れは建長年間陶祖が馬ヶ城の椿窯にて製造せしものなりと云ひ傳ふ、黒味勝ちの茶褐釉にして、瀬戸焼の二大特色は此種の釉と黄瀬戸釉とに在りと云ふも可ならん、此外陶祖が製陶用に供したる祖母懷の原土と云ふ者あり、本來餘り多からざりし原土なれば、元和三年尾州徳川家にて其採掘を停止せられたる由なれども、今は殆んど其土を發見せずと云ふ、又織部焼扇面形の皿あり、天正十三年春古山焼にて小平太なる者が、古田織部の指導に依り始めて織部釉を以て焼きたる者なりと云へば、是れぞ即

ち織部窯の嚆矢なる可し、參考品には尙ほ様々の陶器あるが中に近年當地方より掘出したる天目茶碗其他天目釉を使用したる器物數々あり、時代を追ふて仔細に研究したらば、瀬戸陶器講究の資料として頗る興味ある者ならん、余の推測にては陶祖の建安より歸朝するや、彼の陶土の優良なるを認め、有らん限りの方法を盡して比較的、多量の陶土及び原釉を齎し來り、所謂瓶子窯にて茶入其他の器物を製造せしならん、と雖も、土と釉に際限ありて程なく用ひ盡したれば、瀬戸馬ヶ城に椿窯を起し、彼の祖母懷の土を以て更に新陶器を製したれども、良土は久しく續かずして是れも程なく用ひ盡したれば、二代藤四郎の真中古窯、三代の金華山窯、四代の破風窯等皆其採用したる陶土を異にし、金華山窯の如き美濃金華山の土を以て焼きたるが故に此名ありと云ひ、或は其金氣多くして黄金花咲く奥州の金華山に似たりと云ふ所より此名ありなど傳説ある程なれば、陶祖以下數代の間には、今日瀬戸地方に現存する陶土以上の良土ありし事明白にして、現に祖母懷の土の如き今は全く現存せざれども、元和頃には猶ほ幾分殘存せし者の如し、聞く所に據れば尾州城の天守には、從來祖母懷の土を蓄藏したる由なるが、此土は一旦濕氣を含めば忽ち硬化して鐵丸の如くなるを以て、尾州家にては之を鐵砲玉に代用する考へにて、扱てこそ天守に蓄藏したる者ならんと云ふ。

前述の次第にて瀬戸の陶土は數百年來採掘して、既に其優良なる種類を用ひ盡したれども、本來陶土脈に富みたる地方なれば、今日にても猶ほ原料陶土の缺乏を告ぐることなし、惟に多年來山を穿ち丘を掘り、之を陶器に變形したる其分量は果して幾何なる可きや、容易に推測す可からざる程の物なれども、今日猶ほ其陶土脈を竭盡せずして、將來永く陶磁器の原料を供給し得るに至りては、瀬戸地方は眞に本邦寶土の無盡藏と云ふ可きなり。

三

小島氏等の説明に依り、今日瀬戸焼の原料たる陶土の状況を考察するに、陶土産出地は其陶土脈の變遷に因り、從來諸處に移轉したる様子なれども、現今陶土を採掘する場所は瀬戸町より凡そ一里程なる赤津村附近の山地に在りて、其陶土脈は御料地及

び縣有地に屬する者多く之を拂下ぐる者は立坪何程と料金を納めて隨時發掘する
 仕組なり又陶業者自身に陶土を所有する者は自ら使用せし餘分を同業者に分ち與
 ふる者もあり斯くて或る場所にては住家の椽の下より陶土を掘出し得る者あれど
 も拂下價額も至つて安く左まで材料に窮せざるより今は彼の拂下げ土を使用する
 者最も多數なりとなり。

右の次第にて陶土は瀬戸自身にて十分供給することを得れども磁石に至りては原
 料一切を同地より得る能はず或は九州天草邊より買入る者あれども斯くては餘
 り高價なる可きに依り近來瀬戸所在地東春日井郡の隣郡なる西加茂郡より原料の
 供給を仰ぐ者多し西加茂郡には瀬戸焼磁器の原料たる可き磁石あり同郡の農家は
 農間の副業として諸處に水車を設け溪谷田間凡そ水車を設け得べき處には必ず磁
 石碎粉場あり水車臼に原石を盛りて自働的に石杵を動し之を碎粉する仕掛なるが
 右水車小屋には番人を置かず唯或る時間を計りて見廻るのみなれば格別の人工を
 要せずして其工賃存外に廉く石粉供給上爲めに非常なる便利あり斯くて西加茂郡

に於ける磁石碎粉水車の數は現今六百臺に上ると云ふ。

陶磁器製造上陶土磁石に亞ぎて必要なるは窯用燃料にして瀬戸五百戸の陶磁器業
 者が日々使用する燃料は固より非常の多額なり而して其大部分は松材を用ゆれど
 も近來漸く石炭若くはコークスを使用する者あり但し石炭を使用すれば陶器の光
 澤等に影響する由にて現今の處廉價を主とする支那向き製品以外には多く松材を
 使用するが故に附近の山林を伐盡して今は遠方より薪材の供給を仰ぐの外なし左
 れば愛知縣廳にても頻に此點に苦慮する所あり彼の陶土拂下代金を以て薪材採
 後の禿山砂防工事に勉め水源涵養と共に大に殖林を企畫し居る由なれども日々多
 額の松材を燃消する現在固より殖林の生長を待つ可きに非ず目今窯元にて使用す
 る燃料は主に三重縣より輸入し時に其幾分を三河地方より買入れ居る由なり。
 陶窯と燃料の關係前述の如くなれば陶業者は古來其燃料に苦心し之が爲め其窯を
 不便の土地に築くが如き場合なきに非ず現に瀬戸窯の來歴に於ても此事實を證明
 する者あり抑も瀬戸とは海岸に緣故ある名目にして山間僻邑に此名目あるは聊か

異様の感なきを得ず、一説に瀬戸焼は當初海岸近き知多郡邊に起りたりしに、窯業の次第に繁昌するに随つて忽ち燃料の不足を生じ、其燃料を追ふて次第々々に山地に近づき、終に現今の瀬戸地方に移りたる次第にして、瀬戸なる名目は當初起業の海邊に發生したるならんと云ふ、即ち陶業と燃料と其關係の最も大切なる所以を證明する一説にして、今後瀬戸陶磁器業の益々發展するに随つて、愈々困難を感ず可きは此燃料問題なる可しと思はる。

四

瀬戸五百の陶磁業家中最も有名なる者は、加藤春二、同繁十、同五助、河本榭吉等なるが、古名工の遺風を追ふて孜々として倦まず、時に佳品を産出するは加藤春二氏と赤津の加藤作助翁二人のみなりと云ふ。

依つて余は此二人を當地の代表的陶器製造家と見做して、是れより兩氏を訪問せんとせしが、順路先づ瀬戸公園なる陶祖の記念碑を一覽し、夫れより赤津の加藤作助翁を訪ひ、歸途に洞の加藤春二氏を訪ふ可きプログラムにて、直に瀬戸公園に赴き松樹

鬱蒼たる高丘を攀ぢ登れば、眺望開豁なる絶頂に八角形の白石塔あり、周圍に慶應二年製阿部伯孝の撰文を彫り附け、正面に陶祖春慶翁の碑なる題字あり、今其文中陶祖の履歷に關係する所だけを和譯すれば左の如し、

陶祖姓藤原名は景正、加藤四郎左衛門と稱す、別に春慶と號し又俊慶と曰ひ、追稱して陶祖と曰ふ、其王父を橋知貞と曰ひ、大和諸輪莊道陰村の人なり、知貞元安を生み元安陶祖を生む、元安罪あつて備前松等尾に謫せらる、母は平氏山城深草の人道風の女なり、陶祖幼時延植を喜びて土器を造り、恆に其功の殊邦に如かざるを恨み往學の志あり、既に長じ大納言久我通親に仕へて五位諸大夫に敍す、遂に通親の第二子僧道元に從つて宋に入る、時適ま彼の嘉貞十六年なり、留學する者凡そ六年にして而して歸り、帆を肥後川尻に卸し、乃ち齋し歸る所の土を以て小壺三具を舶上に造り、副帥北條時頼と道元とに呈す、後海内傳へて以て奇珍と爲す、陶祖歸る時に年二十六、因つて父を謫所に省し、遂に留陶す、尋て母に深草に侍す、幾何もなくして母歿す、乃ち陶を京畿及び傍近諸州に試み、又之を本州知多愛知二郡に試みしも

皆可ならず、遂に本州山田郡瀬戸村に來り、祖母懷の地を觀て而して之を奇として曰く、地勢陽に向ひ山高く水清く其土質も亦齋し歸る所の者と異なるなし、遂に業を斯に開き終身復他に往らずと云ふ、或は曰く陶祖の母佳土を瀬戸雨池洞に得て之を懷にして以て歸る之を祖母懷と謂ふと、一に曰く祖母懷は陶祖が瀬戸村神社深川の神に祈つて夢得する所なりと、瀬戸村は古山田郡に隸し今之を春日井郡に併す、蓋し陶に宜しき地なり、按ずるに日本後記延喜式和名鈔朝野群載等の書當時盜を本州に徵す必ず斯の郡に於てす、降つて陶祖に及びて亦既往の事跡を聞知す故に功を爲し易しと云ふ、陶祖の宅趾を中島と曰ひ、瀬戸村深川神社の東邊田圃中にあり、杉一株を植ゑて誌文と爲す、其北に禪長庵と稱する地あり、傳ふ陶祖晩年家事を其男に委ね、陶祖は庵に於て妻は宅地に於て、各自ら卜築して以て終焉の地と爲すと、陶祖歿年諸書考ふる所なし、墓を五位塚と曰ひ、村左古窯馬城と稱する地に在り、今其手造把握する者本土に遣されず、但し村社籠籠獅子一雙傳へて以て其手造と爲すなり、亦其偏を亡ふ、村民姓藤原なる者皆其裔なり、共に其祠を立て、

陶産社と曰ひ、又窯神と名く、例祭三八月を以てす云々。

五

陶祖の記念碑を一覽し、了りて松樹の亂立する高丘の半腹まで下り來れば、小徑の傍に辻堂の如き茅屋あり、入口の柴折戸より透し見れば、松根露地に蟠りて飛石の苔蒸したる風情凡ならず、何人の住居ならんと標札を見れば、柏樹寒山の四字ありて禪宗坊主庵室かと思はれるが、幸ひ木蔭も多ければ、皐月晴れの日光を避けつゝ、暫時路傍に腰掛け居りしに、此庵室より飄然として出て來りたる一人あり、ト見れば古武士の如き面貌に、黒髻髻々として亡友平岡浩太郎氏に酷似し、荒きフランネル縞の單衣に腰帶を捲き附け、素足に下駄穿きの扮装は、禪僧に非ず、茶人に非ず、仙骨飄々として顔輝筆列子風に御するの趣、あれば、何者ならんと思ひ居る中、次第に余の側に近づき來りて頓て一二語を交ふるや、扱ては東京の珍客なるか、拙者も東京には知人あり、山本寛號麻溪と申す者を御存じありやと言ふに、ぞ聊か面識ありと答ふるを合圖に、左らば暫時弊庵にて休息し給へと、懇に導かるゝまゝ、其庵室に打通るに、四疊半

の内半疊を床として丸窓あり、下地窓あり、打開きて前面を見渡せば、瀬戸町に掛けて前面の山容樹色は悉く一眸の中に收まり、其絶景言ふばかりなし、頓て懇に番茶を饗せらるゝを飲み了りて、彼の半疊床に掛りたる一軸を見れば、名古屋の藩士某の發句なる由にて

田植歌うつくし遠目笠のうち

とあり、又其下の竹の尺八形の花入は、中程より兩側に半月形の窓を切り、右よりも左よりも花を生け得べき様に造りて、之に白柘榴の一枝を挿みたれば、扱ても不思議なる切方なりと、庵主に其由来を問ふに、是れは月見窓と稱する花入にて、床の都合掛物の圖柄等に依り、右よりも左よりも花を生け得る工夫にて、拙者の自作なりと云ふ、尙ほ室内を見廻すに、床脇に瀬戸焼の瓶掛あり、之に鐵瓶を掛けたるは、抹茶の宗匠に非ずやと問へば、庵主は徐に其履歴を語り出で、拙者は此近邊の者にて、立花の指南を爲す者なるが、本性は加藤なれども、立花の流儀を眞陶流と云ひ、庵號を柏樹庵と稱したるより、世人本性を呼ばずして、柏樹と言ふに依り、遂に柏樹寒山と申して、當庵に住すること既に二十年見らるゝ、如く居常風月を友とし居れば、口さがなき人々の瀬戸仙人など申すに任せて、閑居獨樂の淡生涯、唯々御一笑下されたしと言ふ、何様此四疊半の外には、唯二三疊の間あるのみ、而して其天井に無數の瓢箪をぶら下げたるが、中には頗る奇古なる者ありて、愈々仙人の本體を現し、若し半日の閑を得て、此庵室に清談せば、或は張果郎仙人の夫れの如く、瓢箪より駒の出づるが如き奇談もありしならん、左れど今日は前途を急げば、再會を期して、匆匆此仙境を辭し去りけるが、犬も歩けば棒に當るの喩に洩れず、風來人は又自ら風來人に出逢ふものかと、奇異の思を爲したるぞ可笑しき。

斯くて是れより加藤作助翁を指して、赤津村へと赴きけるが、同所は瀬戸より一里程にして、山一つ彼方に當れば、二人輓きの人力車を急がせて頓て峠に差掛りしに、梅雨後の泥濘は脛を没するのみならず、全面例の陶器用の粘土なれば、車は押せども動かばこそ、鈍刀を以て餅を切るが如く、進退維谷りて余等は徒歩し、二人の車夫は車を擔ぎ、漸く此難場を通り抜け、と峠を下りたる處が、即ち赤津村にして程なく

加藤作助翁の工場に着すれば、主翁も幸ひ在宅なり、來意を告ぐれば喜びて出迎へ、暫時雜談の後、主翁自ら先導して其工場へ案内してけり。

六

瀬戸赤津に掛けて陶業に従事する者は、概加藤姓ならざるなし、是れは陶祖加藤四郎左衛門の末葉、藁々として繁茂したるが爲めか、或は加藤姓の金看板を利用して、誰れ彼れとなく加藤と稱するに至りたるが爲めか、兎に角加藤の鈴成りは盛なりと云ふべく、中には陶祖二十幾世など稱する者あり、果して正系なるや否やを審にせず、永祿六年、織田信長が當地の名工六人を選びて六作と稱し、之に特殊の待遇を與へたる事あり、其後天正十三年、古田織部が同じく名工十人を選びて十作と稱し、特に其陶窯を庇護したる事あり、此六作十作は今日瀬戸赤津に於ける陶業者の祖先たるが如く、其傳統何世と云ふも、亦此時より起算する者多きが如し。

加藤作助翁は、勿論加藤一流の系圖を引きたる人にて、本年七十一歳、温厚篤實の老翁なり、翁は問はるゝまゝに、維新後屢々遭遇したる陶業上の困難等に就き、様々の實驗談を爲したる後、更に語を繼ぎて、近年當地に於ける陶器製造の數量金額は年々増加の勢、あれども、其品質は漸次粗濫に傾き、所謂數でこなす一方に趨るに至りたるは、畢竟生活難の致す所にして、算盤球には何人も降參の外なく、滔々相率ゐて平凡なる陶器を製するに至るは、眞に是非なき次第なり、愚老の如き幾分なりとも古陶器を摸し、又新作を工夫して後日に傳ふべき作品を得たき志望なれども、如何せん微力にして、事志と相伴はざるは、汗顔の至りなりなど、述懐談あり、頓て陶土製造池、陶器工場等を案内し、轆轤を離れたる陶器に、彩色を施し、若しくは釉薬を掛け、斯くて、愈陶窯に火を入れるゝに當りては、作り溜めたる陶器數萬個を窯中に横たはる、陶製の架棚に打並べ、凡そ八九段乃至十段位に區劃したる陶窯の最下層より、漸次焼き昇るの仕掛けにて、扱て全部焼き上げれば、悉皆取出して、精粗を檢分し、夫れより始めて註文者の手に渡るの順序なるが、開窯は一年に四回乃至六回なりと云ふ、當地は西洋人などの來觀多きが爲めか、此古風なる工場にも、洋風の陶器陳列所ありて、其作品を陳列し置くにぞ、茶碗、向附、皿鉢等の中より、稍々茶味ある數點を選びて、其代價を問へば、低廉無

比にして、從來余の巡視したる高取、唐津、清水、九谷、大樋、樂山等の諸陶器に比すれば、殆んど半額乃至三分の一なれば、余は其次第を翁に問ひしに、當地は陶土の潤澤なると工賃の低廉なると、山間僻邑にして生活費の割合に安く、且つ人情の質朴なるにより、製品の比較的廉價なる次第なれども、追つては悪風を輸入して、今日の状態を維持する能はざるならんなど説明せり。

翁は古陶園と稱し、陶器の箱書などを見れば、陶工に稀なる達筆にて、且つ頗る茶味あり、人品賤しからず、相應の修養ある人物なるが如く、其作品も彼の數物一流と其選を異にするが故に、余は翁が能く其素志を貫きて古名工の遺風を失はず、彌が上にも作品の形狀色彩等を研究して、古人に恥ぢざる名品を製出せんことを勧め、且つ子孫をして永く遺志を守らしむる事を希望したるに、翁も屢々首肯して、及ばずながら年來の素志を貫徹する考へなりと語られけるが、斯くの如きは算盤全能の現世にありて、容易に得難き陶業者と云ふ可く、余も山路の泥濘を踏んで、態々當地に來りたる甲斐ありたるを喜びぬ。

七

赤津の古陶園を辭して、再び例の峠を下り、字洞なる加藤春二氏を訪問せしに、是れも幸ひ在宅なり、春二氏は所謂十作の一人、元藏の末葉にて、竹里庵と號し、陶窯の側に茶室を設けて自作の茶碗にて、折々自點自服する程なれば、其製作も營利を主とせず、嘗て陶祖の作と稱する彼の國寶の狗犬を摸作せんとして、百方苦心の末、遂に其目的を達したりと云ふが如き、固より尋常陶工に非ざるなり、年頃五十前後にて、篤實寡黙の人物なるが、余の來意を聞き喜んで、製作品を示したる中に、名古屋某氏の需めに應じて摸作したりと云ふ、雲鶴の鉢は最も自慢物らしく、是非に割愛せよと言へど、遂に應諾せざるは如何様營利一方の陶工とも思はれず、斯くて余を案内して、屋後の高丘に登り、行き路傍の竹林内に導くまゝ、何心なく尾行すれば、果して古陶窯の遺跡あり、氏の説明に依れば、是れが彼の十作の一人、元藏の窯趾なる由なるが、其規模至つて狭小にして、今日の大陶窯と比較す可からず、又以て當時の實況を見る可きなり。夫れより工場を巡視して、之に隣れる一小室に案内しければ、先づ罷り通らんとして

土間の片隅を見るに、聞き及びたる國寶狗犬の摸寫を安置せり、新古の相違にて色合の落着かざる所あれども氏が一世一代の精力を集中したるだけありて、原作に對して餘り遜色なきは流石に拔群の技倆と云ふ可し、扱て打通りたる一室は三疊臺目床附にして一方の丸窓より瀬戸の全景を見渡し至つて閑雅なる茶室なるが床には美濃の畫師聾仙の富士山を掛け、野菊を生けたる新物手附籠を諸飾にして、室の一隅には陶器の瓶掛に鐵瓶を掛け置きぬ、懸て主人の挨拶終るや、徐に水指を捧げ出で、薄茶手前に取掛りたるには場所も場所、折も折とて不思議に感じつゝ、控へ居れば、如何にも物慣れたる手前にて薄茶一服を饗せらる、其器物は左の如し

茶碗

古瀬戸
天目形

茶杓

洞庵作

茶入

木地聚

建水

瀬戸窯
青磁寫

菓子

瀬戸燒鉢
羊羹

突然の來客に對して即座に一服の趣向なれば、常住の器物にて取立て、評すべき程の者なきは勿論なるが、流儀は裏千家なる由にて落着き拂ひたる亭主振り、當地にても必ず屈指の茶人なる可しと思はれ、折々茶事の催しありやと問へば、土地に同好者

の少ければ獨樂にて遠來の珍客などある時、お笑種に一服差上ぐるまでなりと云ふ、辭令中々巧妙なり、流石は茶器の窯元だけありて斯かる嗜みある人あるかと雑談に時を移して、出來合の茶碗向附などを讓受け、頓て丸窓より差覗けば、日も漸く西山に春かんとする頃なれば、厚く主人の好意を謝して、急ぎ名古屋行の電車に打乗り、次第に遠ざかり行く彼の鯨の如き瀬戸山の見えずなるまで、振返りつゝ、夕刻名古屋に歸着せり。

八

瀬戸巡視中、古に徴して今を稽へ余の腦中に噴起したる感想は、種々雑多に涉りたれども、今其一端を記して識者の高教を乞ふ可し。

抑も尾張一國は陶土に富みたる處にして、瀬戸の外に尙ほ數々の陶窯あり、名古屋隱里に豊助焼あり、丹羽郡犬山町に犬山焼あり、知多半島に常滑焼あり、愛知川名村に五郎焼あり、知多郡大高村に大高焼あり、其他笹島焼不二見焼、夜寒焼等枚舉に遑あらず、中に就て瀬戸は有名なる陶土豊富の地にして、其起原は頗る古く、弘仁六年尾張山田

郡造盜器生三人を雜司に任じ、宮陶司に屬せしむと云ふ事あり、降つて延喜五年朝廷
 每歲尾張の國より獻ずる盜器の額を定むと云ふ事あり、爾來瀬戸は支那の磁州饒州
 に於けるが如く有名の製陶地たりしかば、陶祖加藤四郎左衛門が鎌倉時代に此地よ
 り崛起したるは決して偶然の事に非ず、加藤四郎左衛門は瀬戸をして天下第一の製
 陶地たらしめたる陶祖たり、窯神たる偉人には相違なけれども、左ればとて前後の聯
 絡もなく突然として崛起したる者に非ず、彼れが世に出てたるは瀬戸の陶業の幾分
 か進歩を示して時勢の必要に應じたりし時なり。

彼れは渡宋前當時の製陶法に據り、赤津村にて口元手厚手掘出手など稱する陶器を
 製造したりしなり、唯其製法の幼稚にして釉藥全體に及ばず、茶碗茶入等の口部に釉
 の掛らざるに依り、口元などの名稱を生じたる程なれば、彼れは我が陶法の遠く有宋
 の技術に及ばざるを憾み、一念發起して後堀河天皇の貞應二年道元禪師に隨つて宋
 國に赴き、建安の天目山に於て陶法を學び、五年修業の後、安貞元年歸朝して始めて瀬
 戸に瓶子窯を築きたる次第なるが、斯かる特志者が多年實驗したる所を以て更に彼

の國の實地に就き五年の研鑽を経たるに依り、堂に上り室に入りて更に出藍の技倆
 を顯すに至りたるは固より當然と言ふ可きなり、斯くて歸朝後彼の國より齎し歸り
 たる陶土と釉藥とを以て製造したる陶器は即ち唐物と稱し、其後次第に土と釉との
 減少するに依り、和土和藥を加へて焼きたるを古瀬戸と云ひ、又老後に製造したるは
 法號の春慶と云ふに因みて之を春慶焼と云へり、而して其製作に係る名器は茶碗、茶
 壺、水指の類固より種々雑多なれども、中に就き最も有名なるは茶入にして今日天下
 の名物として傳稱せらるゝ者は左の如し、

- | | | | |
|-----|-----|------|------|
| 平野 | 耳付 | 相坂 | 島山 |
| 可中 | 任中庵 | 淺野 | 釣舟 |
| 小肩衝 | 八重櫻 | 村雲 | 雨宿 |
| いよ廉 | 大鳥 | 置紋 | 破襖 |
| 肩衝 | 林肩衝 | 女郎花 | もしほ |
| 節季 | 内海 | 出雲肩衝 | 敷島大海 |

角 浪 花 霜 夜 大 海
 京 童 辰 市 釣 鐘 芋 子 鳴 海
 湯 桶 橋 餓 鬼 腹 太 鼓
 半 切 車 軸 神 頭
 陶祖加藤四郎左衛門は上下を略して世に之を藤四郎と云ふ夫れより數代皆な藤四郎と稱せしが二代目藤四郎は箕裘を繼ぎて益々其業を勵み從來の茶褐色の外に黄色釉を發明し所謂黃瀬戸焼を創始するに至れり此二代藤四郎の作品は元祖藤四郎を古瀬戸と稱するに對して之を真中古と稱し其製作中天下の名物たる者は左の如し、

橋 姫 小 蕙 朝 霜 玉 川
 小島思川 野 田 月 迫 大 瓶
 小 川 面 取 不 面 取 初 風
 猿 若 宮 城 野 大 覺 寺 常 夏

三 國 蠟 燭 手 底 面 穀
 鈴 鹿 山 寢 亂 髮 蛙 聲 面 影
 比 丘 貞 泡 沫 正 木 大 正 木
 佐 久 間 染 色 吸 江 轉 合 庵
 絲目藤四郎 柳藤四郎 花藤四郎

九

三代藤四郎は初代二代に遜らざる名工にして其窯を金華山と云ひ其作品を中古物と云へり乃父二代目藤四郎の黄釉より一步を進めて金氣釉を發明し天下の名物たる者多きが中に其最も著名なる者は左の如し、

飛 鳥 川 疵 肩 衝 雲 井 木 枯
 三 笠 山 鷹 羽 屋 春 日 山 花 櫻
 玉 柏 常 盤 增 鏡 村 雨
 二 見 即 色 大 津 白 露

打 出 瀧 浪 白 浪 志 賀
 丸 肩 衝 木 本 三 輪 山 藤 波
 廣 澤 春 雨 藤 重 眞 如 堂
 神 樂 岡 龍 田 響 灘 鏡 川
 瀨 戶 天 目 谷 陰 青 江 手 松 島
 妹 背 山 磐 余 野 吳 竹 白 浪
 斯 くて 瀨 戶 窯 の 天 下 に 名 高 く 最 も 多 く 稀 代 の 名 品 を 出 した る は 代 々 名 工 の 續 出 し
 た る が 爲 め に して 四 代 藤 四 郎 に 至 つ て は 時 代 は 南 北 朝 建 武 年 間 に 係 り て 所 謂 破 風
 窯 なる 者 を 開 創 せ り 破 風 の 名 は 其 釉 の 掛 り 方 の 上 に 濃 く 下 に 薄 く して 一 見 家 屋 の
 破 風 の 形 に 似 た る を 以 て 此 名 あり と 云 ひ 一 種 の 製 法 に して 世 に 濫 紙 手 と 稱 する 者
 も 亦 此 窯 より 出 て た る な り 而 して 其 製 作 に 係 る 茶 入 中 の 有 名 なる 者 は 左 の 如 し、
 口 廣 天 筒 山 口 廣 紹 高 忘 水 皆 の 河
 玉 水 宮 島 口 廣 鶴 飛 彈 音 羽 山

兒 手 柏 潮 路 庵 笈
 中 古 肩 衝 玉 津 島 山 櫻 橋 立
 玉 川 凡 正 凡 戶 灘 瀨 卯 の 花
 小 島 正 木 撰 屑 米 市
 大 正 木 か き ね 布 引 蓬 生
 市 場 口 廣 捺 貫 女 郎 花
 腰 篋 玉 霰 月 草 垣 根
 摺 粉 木 桐 霰 月 草 垣 根
 四 代 以 後 藤 四 郎 は 相 續 して 後 年 に 至 り た る が 是 れ より 以 後 は 後 窯 と 稱 して 瀨 戶 に
 て 燒 立 て た る 外 に 此 瀨 戶 の 土 を 京 都 其 他 に 運 搬 して 諸 處 に て 製 陶 した る 者 あり 之
 を 大 別 すれば 坊 主 手 宗 伯 正 意 山 道 茶 白 屋 源 十 郎 姊 利 休 鳴 海 織 部 捺 貫 八 ッ 橋 伊 勢 手
 萬 右 衛 門 新 兵 衛 等 に して 其 作 品 中 最 も 名 高 き 者 は 左 の 如 し、
 落 穂 振 鼓 田 面 鳥 羽 田
 瀨 戶 め ぐ り 一〇五

初祖 二祖 岡邊 面壁
 蘆葉 尾花 環下 露
 有明 辯舌 山雀 空也
 佗助 雨川 落標 地藏
 餓鬼 腹

藤四郎の傳統は累代連綿として、其最後の二十七代を惣四郎春岱と云ひ一時妙手の譽ありしが、明治十年世を去りて其子斯業を繼續せざるが爲め、終に絶統に及びたるは惜む可しと爲す。

扱て陶祖以後、名工續出して天下に名器を貢獻したる其數幾何なるを知らざれども其名器の多くが茶入なりしは如何なる次第なるか、按ずるに建保二年四月榮西禪師宋より歸り、茶一盞を將軍に獻じ、茶書一卷を添ふとあり、榮西禪師が宋より歸りて茶實を柵尾の明恵上人に贈り、上人が之れを柵尾を植付け、又次第に宇治邊にも播植したりと云ふは有名の事實にして、茶樹は從來日本に固有したれども、榮西禪師が宋種

を日本に傳播してより、茶を以て一種の靈藥と見做し、當時のハイカラが翕然として之を珍重したる其影響は僧俗社會に普及して、此靈藥を保存する器物を吟味するが一時の流行たりし者の如し、一説に將軍實朝茶を保存する茶壺を得んと欲し命を尾張の加藤某に傳ふ、某之を其臣四郎左衛門に謀りたれば、四郎左衛門乃ち茶壺を焼き奉るとあり、其史實如何は姑く措き、當時上流社會に於て茶壺の必要を感じたる事明白にして、夫れより累代の藤四郎皆な其妙腕を茶入に顯したる者ならんか、夫れに就き余の豫て遺憾とするは、有形文明の次第に進步するにも拘らず、製陶技藝の年と共に荒廢して遂に其先祖に及ばざる事即ち是れなり。

今回瀬戸窯を巡視したる所にて、前記作助春二等二三觀る可き者なきに非ざれども、陶祖以下數代の名工の如く其作品の後世天下に珍重せらる可き者を求むれば蓋し絶無と謂はざる可からず、但し名工は自身に名工たる能はず、時代の要求に應じて始めて出現する者なれば是れ亦是非なき次第なれども、余は瀬戸の陶器家が其模本と爲し參考と爲す古陶器の甚だ貧乏なるを見て痛嘆に堪へざる者ありき、今日歐洲諸

國の工藝家が日本工藝品の意匠形状製法等に就き、頻に研究して其特長を換骨奪胎せんと努め居る折柄、七百年來の本地たる瀬戸に於て幾多の陶工が模本とし參考とすべき者殆んど皆無なるは奚ぞ、其不用意の甚だしきや、瀬戸の陶器組合など稱する者が此點に於て三思せざる可からざるは勿論なれども、常に産業保護を稱道する縣廳又は農商務省などに於ても、今後大に此邊に注意して工藝地の缺陷を填補する考案を講ず可きなり、尙ほ瀬戸地方に於ける磁器の起原及び其發展の事實に就ては記す可き事甚だ多しと雖も、今は陶器のみに就て聊か余の感想を述べ、敢て陶業者の一考を乞ふ者なり。

函嶺幻庵茶會

(大正三年八月四日)

上

茶事の風情は處替りて品替るにあり、都にては九夏三伏の白熱、電氣團扇の十字風も玉なす汗を止め、敢へぬ今日此頃茶會など、は以ての外、物數寄なるに、箱根と云へ

ば其麓だに早や涼しく、歐洲動亂の早打も瀧の流れに紛れ去りて、一種清涼の茶味、津と湧出づる名所のお蔭、有難し、なんと言ふ許りなし、余は去る一日、小家族を提げて、机を小涌谷鳳來樓に移し居りしに、麓の方より電話して、來る四日正午幻庵にて粗茶一服差上げたしと申越したるは、野崎幻庵なり、山中消暑の茶會とありては願つたり、叶つたりなり、二つ返事で欣諾して、扱て當日湯本に下れば、宿引ならぬ案内人の頓て先導する儘、其後より尾行せしに、今村繁三氏の別莊に入りて是れが當日の寄附なりと云ふ、先づ一風呂浴びて浴衣姿となり、夫れより玉簾の流を隔つる對岸の幻庵に繰込ましむる趣向にて、沂に浴し舞雪に風じて、詠じて歸らんの境遇を現出したる客扱ひ、流石に感服せざるを得ず、斯くて正午少しく過ぐる頃、幻庵の入口に着すれば、竹の腰掛に草履を並べ、青竹の杖を銘々に渡して流に沿ひたる露地を辿り、杖突き乃の字で「ヨボ」と、寄附に罷り通れよとの暗示なれば、何事も御意のまに、例の杉皮茸掛出しの腰掛に寄附きしに、相客は益田鈍翁、同紅艶室田蠻翁等にて、紅艶の駄洒落は例に依て此腰掛を賑はし居たり、ト見れば、木地煙草盆に樂焼火入あり、當日の番頭伊

丹信太郎同常藏の二人が、甲斐々々しく入代り立替りて白湯を運び、大青竹を二つに割りたる其一片に熱き湯手拭を載せて出すなど、一廉の趣向と見受けたり、例の青竹筧より山水のとくくと落ちて、溢るゝ天然石の洗手鉢にて盥嗽の後、彼の長四疊の幻庵に打通れば、光廣卿筆の短冊一軸を掛けられたるが、其歌は左の如し

旅夕立

光廣

ぬれくし旅の衣をほしもあへす

又かきくもる夕立の空

室の片隅には、唐銅風爐に大西淨元作の眞形釜を切掛け置かれたるが、風爐も釜も小形にして夏向きなるが上に、障子も悉皆取拂ひたれば、杉の木の間を流るゝ水の耳にも目にも涼しくて、唐人の句に時有微涼不是風と言ひしも、斯かる境遇をや指すならんと洵に快心の至りなりき、偕て庵主立出で、挨拶あり、直に持出されたる懐石は左の如し、

汁 田舎味噌、大根細切、

向附 新萩焼瓢形、ふく、根芋、紫蘇、枝豆、甘酢、

椀 豆腐、搥り蝦、冬瓜、蒟蒻、

焼物

豊後笹枝組平籠に其葉を敷きて、八寸 本地盆に青葉を敷きて、

吸物 永樂和全赤繪、臭洲寫小茶碗、鯨骨細切

以上懐石は、箱根細工の木地丸盆に載せ、酒器は萩焼又は其他の新物にて、吸物に使ひし和全の赤繪寫茶碗に、再び冷素麵を盛りて、菓子に代用したるなど、無造作に山家の獻立を見せて、當意即妙なるは、庵主も當庵にて度々の仕合に、大小數ヶ所の太刀傷を負ひたる其修業の效驗空しからず、段々上達の結果とこそは見えたりけれ。

下

懐石終りたる後、炭手前あり器物は左の如し、

香合 唐物青貝 風車

炭斗 竹組平馬刀籠

羽箒 鳥巢

火箸 鐵打出し

炭斗は小形にて風爐釜との取合ひ宜く、又香合は精作なるが上に、然も内紅なれば場所柄には寧ろ綺麗過ぎたる程なり、右拜見の後、例の如く中立を爲し、再び席に入りて見れば、青竹の裏と表を互ひ違ひにして、段だらに組上げたる新物ビク籠に、満開の椀花一輪を挿みたる風情悪からず、風爐の側には仁清の稍細き耳附水指とし、ら廣

東の袋掛りたる中棗とを置合せて頓て主人の濃茶手前ありけるが器物は左の如く
なりき、

茶碗 蕎麥

茶杓 不味公作歌銘笈

茶入 盛阿彌黒塗
碁笥底中棗

建水 砂張合子

蓋置 青竹引切

右の内蕎麥の茶碗は通例の形にて全體空色の中に一箇所焦あるが景色にて山莊用
には其名さへ頗る適切なり何れ當日の番頭殿が忠勤を抽んでたる品なる可く随つ
て當日水屋の邊には耳欵て、客の批評を聞居りたる者もありつらん茶杓は鍔竹に
て式は石州畑と見えけるが不味公としては傑作にて其筒に

笈

すまは又すまれこそせめ山里は

かけひの水のあるにまかせて

とあり當席には餘り篋り過ぎたるやうなれども庵主が此酷暑中然も乾坤一擲の歐
洲大動亂を餘所に見て操觚者の身のあられもなき此茶三昧に入りたるも實は此茶
杓の祟りなる可く之を使ひたさの謀叛がむらゝと其胸中に起りたる其刹那に今
度の茶會は萌芽せしならんと見たは僻目か。

茶會は是れにて終りたり薄茶は廣間にてと云ふ挨拶に従ひ此庵室を出て茅葺の
田舎家に動座すれば床には抱一上人が棉其他の草花を畫きたる一軸を掛け薄茶は
點出しにて追撃戰の案外手輕かりしは是れ亦庵主が段々と劫を経來りたる結果な
る可し斯くて當日の茶會を考査するに器物は輕くして且少く新物に意匠を見せて
成る可く批評の打入る可き面積を縮少したるは庵主が數度の戰歴に依て作戰計畫
の次第に上達したるを見る可く當庵にて此數年來三四回催したる茶會中に於て今
度のが最も老熟したる者ならん唯場所柄とてか湯手拭を載せたるも竹腰掛も竹笈
も竹籠花入も竹燒物籠も竹蓋置も竹斯く竹づくめにては景物に張子の虎でも出さ
うなりと誰やら獨語する者ありしが大體に於ては紅艶なども「あれは何うでげす」の
惡評を試むる餘地なく手持不沙汰に引下りたるぞ可笑しき。
此茶會に於て露地の景色に變化ありしは蹲踞石の前に置きたる石燈籠を取去り流

の中に突立ちたる竹樋に代ふに、崖の上より遠く引渡したる青竹の筧を以てしたるにて、是れは先年余が此庭に試みたる講評を、庵主が快く採納したる雅量を示して、打見たる所何等取繕ひなき山中の景色と爲り、余には此上なき御馳走と思はれぬ、折も折箱根山中に於て此興味ある茶會を催したる庵主の好意に對しては、一同謝する所を知らず、彼れや是れやと其意匠の在る所を模索しつゝ、頓て幻庵を辭したるは、鳴鯛聲を收め、對岸の燈火夕靄に明滅する頃なりき。

掃雲臺涼棚茶會

(大正三年八月三十日)

八月下旬益田鈍翁より一書あり、此程亡弟非默(克德)が遺し置きたる素焼の茶碗二個を發見し、鈍阿窯に入れて釉を掛けたるに、可なり面白く出來上りたれば、一個は手許に留め、他の一個を末弟紅艶に與へんとすれども、茶人が物を贈るにむざと手渡しするも本意に非ず、就ては老臺其他同好の立會を乞ふて、之を引渡す考へなれば、來る二

十九日午後五時、小田原掃雲臺まで御足勞下されたしとの事なり、斯くては平常の茶交に對し、右茶碗贈與式に立會はざる可からずと早速快諾の返事をなし、二十八日午前新橋發汽車にて、先づ函根湯本なる福住別荘に赴き、一泊の上翌日參會の手筈なりしに、夜半暴風雨俄に起り、梁動き瓦飛び、増水の警鐘耳を劈きて物凄しなど言ふばかりなし、頓て此の恐ろしき一夜は明けたれども、風雨は更に衰へず、已にして鈍翁より本日茶會見合の報に接したれば、到底流會と思ひつゝ、翌三十日天候恢復を待ちて、勿々歸京せんと思ひ居りしに、酒匂川の橋は已に流され、馬入も亦不通なりと云ふ、今は進退谷まりて唯天命を待つのみなりしに、當日午前十時とも覺しき頃、崖を傳ひ澤を渡りて單身湯本に訪ね來りたるは鈍翁なり、不慮の天災にて辛き目見せ申したるは致方なしとして、扱て天氣も立直りたれば、今夕は掃雲臺を訪はるべし、但し主客たる紅艶は參られざれども、一昨日より當地幻庵に滞在中の、同庵主と同道せられよとの好意黙し難く、午後四時頃より幻庵主人と打連れ立ち、崩壊したる崖道を辿りつゝ、難行苦業辛うじて掃雲臺に着すれば、主人喜んで出迎へ、先づ玄關側八疊の寄附に案

内しぬ、乃ち室内を見廻せば、床には文晁筆秋景山水を掛けたるが、圖中の景色は紅樹あり長橋あり溪流漲り落葉飛んで、今日眼前の風光を畫中に現したるが如く、時に取りて一段面白く見受けらる、但し此外には飾付なく、唯床脇に蒔繪の料紙文庫を置きたるのみ、扱て庭前に下り立ちて一望するに、荒川の流れが濁色を帯び、青田に新流域の廣がりたるなど、幾分暴風雨後の景色は見ゆれど、右手の二子山より傾斜し來る連山の突角は、即ち有名なる真鶴が岬にて、浪頭の微に白く岸に打寄せて、山川海橋人家、林巒、豆人、寸馬の往來する風景、宛然夏圭山水圖の如く、然も晴れ渡りたる碧空に十日の月が掛りたるなど、一昨日來天地晦冥の景色は何處へやら、露地數歩ならずして早や已に仙境に入るの想ひありたり。

二

扱て止石を避けつゝ、露地を辿り、瀑聲を聞きつゝ、澤飛を渡り、一旦林中に入りて更に屋後の瀑下に廻り出づれば、溪流上に京都四條の涼臺然たる涼棚を設け、其一端に木地吹抜きの風爐先きを立て、織部敷瓦に寒雉の風爐と、同作霞地紋鐵瓶を置き、他の

一端には杉皮を以て幅三尺ばかりの床を造り、鋪竹尺八の花入に蔦の花を活けたる風情、見るからに涼しかりき、抑も此掃雲臺は右手に箱根山を控へ、前面に真鶴が岬を望む山莊にして、莊後の崖には一道の瀑布あり、山水澗々と漲り落つる、其下流は山莊の半面を廻りて走り出で、此流れの左右には一抱にも餘る楓、榎等の大木鬱蒼たる、其下に四疊半ばかりの涼棚を架けたれば、棚下の水は潺湲として玉を鳴らし、樹上の鯛に啼き換りたる草間の蟲は、夜更る儘に益々清く、月さへ最ど照りまさりて、暑さも何處へやら流れ去りぬ、見上ぐれば大樹の枝に掛りたる電氣燈の、大嵐後匆匆々々明煌々と光を放つは、今夜の催しを知るや知らずや、小田原電氣會社長草郷清四郎翁の盡力にて、早や送電の都合を得たるなるべく、斯かる折柄今夜の正客たるべかりし紅艷が、東京に在りて遙かに小田原の空を眺め居るかと思へば、夫れのみ氣の毒に思はれぬ、此時當地に閑居する山本麻谿宗匠此席に入り來りて、客は三人となりたるが、臺主も席に連りて、心得ある給仕の順次に運び出したる懷石は左の如し、

汁

三州、味噌、焼茄子、紫蘇

向附

鈍阿焼割山、椒形、鱈根、芋、胡瓜

椀

すつぽん

燒物

備前平鉢、海老漬寄、

八寸

純阿燒平鉢、北海道燻鮭、海苔、牛肉煮込、

香物

朝鮮、唐津片口鉢、茄子、

酒器

粉引寫德利、唐津五客揃、盃、

懷石後銘々盆に木の葉を敷きて、葡萄餅然たる手製の菓子を出され、頓て主人自ら炭

手前に取掛りけるが、器物は

香合

蓮の實、内金粉

炭斗、竹組花皿

羽箒、島梟

火箸

砂張

斯くて、此涼棚より廊下傳ひに本館に渡り、入側の一角眺望最佳の處に置き列べたる籐椅子に中立せしめたるは、物慣れたる主人が山莊風の客扱ひ、只管感服の外なかりき。

三

月は愈々清く夜は愈々涼しく、蟲の聲水の音亦愈々澄み渡りぬ、豫て臺主より通知やしたりけん、隣家古稀庵の御内室が、此月夜に憧がれて中立の席に入り來りけるにぞ、共々元の涼棚に復座すれば、床には大綱和尚筆、豎幅の上端に、一首の歌を書きたるを

掛けらる、或は彼の白紙の讀などにやと思ひて、熟々見れば

涼しさはたくひもさらに夏山の

峰より落つる音なしの瀧

とあり、瀧を背にして大樹の下に坐したる余等が、此歌を見たる感想は言ふも管なり、頓て臺主の濃茶手前あり、器物は左の如し、

茶入

凡手銘、通路、袋船、越廣、東

茶杓

天室和尚作、煤竹、笹の葉形

建水

純阿燒

蓋置

青竹

茶入は一見新兵衛作かと思ひしに、諦視すれば、破風窓の特徴あり、何れ由緒のある品ならんと、後其箱を拜見すれば、權十郎の筆跡と覺しく、表に通路の二字ありて、裏に

世をいとふ橋と思ひし通路を

あやなくまたもこひ渡るかな

の一首を書附けたり、挽家は唐木にて、表に通路の二字を彫付けたるが、目今臺主の境遇に對して歌の心を玩味すれば、如何にも意味深長にして、成程と膝を拍たざるを得

ず、扱て茶碗は、豫て耳にしたる臺主の亡弟非默庵の手造にて、小形なる樂焼の赤味を
 含みたるに白薬を掛けたれば、薄紅梅の雪に埋もれたるが如く、景色頗る面白けれど
 も、小服なれば濃茶よりも寧ろ薄茶に適當なるが如し、非默が存生にて自ら薬を掛け
 たらば、如何なる茶碗と爲りしやは知らず、今度鈍阿窯にて白薬を掛けたるに依り、一
 風變りたる茶碗となりたるを、地下の非默は果して何と評す可きや、兎に角銘を非默
 と付けたりと尤も千萬なり、此茶碗と同じく臺主が肝膽を碎きたるは、初入の床に
 掛けたる竹尺八花入なり、聞けば、紅艷が數年前、當地風祭に構造したる、藪蛇庵の竹林
 より切取り來りたる者にて、竹の中程に節ある尺八の破目に、鏝二三箇所打ちたれ
 ば、誰が目にも新作とは見え分かず、今夜若し紅艷が此席に居りたらば、不味公の御作
 でげせうなど鑑定して、一座大笑となるべきを惜しき事してけり、一同笑壺に入り
 たるも可笑し。

濃茶一巡濟みて後、雑談時移りけるが、夜露や掛らむと臺主の注意にて、山莊の廣間に
 動座すれば、大床には下條桂谷筆松下布袋の畫を掛け置かれぬ、顔輝張りにて桂谷中
 の桂谷なれば、一同感服して其批評に餘念なき中、早や十時ともなりぬれば、又明日と
 て座客と別れ、余と幻庵とは同じ蚊帳に入りて前後も知らず一睡しぬ。

四

掃雲臺涼棚茶會の翌日午前九時頃、余と野崎幻庵と主人と三人、掃雲臺山莊の入側の
 一角に鼎座して、歐洲大戦争の談に移り、臺主が此程手に入れたる、獨逸人某の「獨逸
 及次の戦争」と題する著書中に、獨逸勃興の形勢より説いて、將に起らんとする全歐洲
 の戦亂に及び、今より二年前に、今日の戦争を豫言したる慧眼に感服し居る折柄、古稀
 庵主公が袴のみ着けて、臺灣製の大バナマ帽子を冠り、太き櫻の杖を曳きつゝ、庭傳ひ
 に歩を運び、頓て此席に入り來られけるにぞ、一同思ひ設けぬ、珍客を迎へて、更に様々
 の談話に耽りけるが、公は余等に向ひ、昨年來庭内に、先帝を奉祀する小祠を建造中
 の處、此程漸く落成したるに付き、幸ひの折柄、運動旁一覽を乞ひたしとの事、夫れこ
 そ願ふてもなき仕合せなりと、余等は勿々身仕度して庭前に下り立てば、公は又候臺
 灣製大バナマ帽子を冠りて、自ら東道主人と爲り、掃雲臺の庭續きに歩して、古稀庵庭

前に出でけるにぞ余等は一先づ本館に休憩して、令夫人に挨拶の後、頓て上段の床を見れば雪村筆山水二幅對を掛けられぬ、圖は玉潤寫にて破墨の見事なる得も言はれず、且つ本日は左右二幅のみ掛けられたれども、中は達磨にて、公が明治十年頃何れかにて掘出されたる者なりとの事なれば、斯かる茶味ある名幅は余等茶人の賞翫す可きものにして、古稀庵には全く無用ならんなど、戯れに品評して大笑せり、扱て公は是れより先導して、古稀庵の舊庭及び新造の檜ヶ岡と稱する先帝奉祀の鎮守社等を案内せられ、余等は公に尾行して隈なく一覽し了りけるが、其泉石布置按排の意匠慘澹たる固より凡慮の及ぶ所に非ず、余は他日古稀庵庭園記を物して、公の庭園趣味を世人に紹介する考案なれば、今敢て贅せず、唯此維新の元勳が築庭遊戯に老を忘れて能く其天壽を保ち、永く國家の鎮護と爲るを竊に慶賀して、已まざるなり、斯くて次第に時移り正午近くと爲りければ、一同公の好意を謝し、一旦掃雲臺に引上げしが、夕刻酒匂橋の開通したりと聞き、鈍翁諸共小田原を發し、辛くも東京に歸着したるは八月三十一日の深更なりけり。

歸雲亭古稀茶會

(大正三年十一月十日)

上

歸雲亭主石黒況翁が還曆を期として、所謂圓滿辭職を遂げたるは未だ昨今のやうに思ひ居りしに、燕去雁來早や已に十星霜を過ぎ、本年古稀の遐齡に達したりとて、此程歸雲亭に於て自祝の茶會を催しけり。

扱て例の西洋間に通れば、相客は瓜生震、三井守之助、瀬川昌耆、吉田丹左衛門、梅澤安藏と余の六人にて、飾附は平常に異ならざれども、テーブルの片隅に蒔繪の硯箱を置かれければ、試みに手取りて拜見するに、水注の側に椿の葉を敷きて其上に一塊の糊を載せらる、後之を主人に問へば、遠州流にては毎日此糊を取換へるが例なりと云ふ、如何さま待合にて急用起り手紙など認めたる際には糊なくては叶ふまじ、主人が流儀を重んじて此古風なる注意を爲せしも亦中々に意義ありと思ひぬ。

斯て瓜生翁を正客として、順次歸雲亭に近寄れば、柴折戸を以て區劃を爲し其内の茶

庭は一面叡山苔なり、蹲踞石の上の皂角子の實が風に揺られて苔の上に落ち來る風情席に入らざるに早や茶味の津々たる者あり、歸雲亭は四疊半にて、床には彼の和歌四天王の一人慶運法師の古今集賀の部「君が齡を八千代とぞ鳴く」と云ふ一節の歌切れを掛けたるが、青島陷落の折柄とて亭主古稀の自祝に兼ねて目出度き戦勝をも祝する者の如く、時に取りて一層適切なるを覺えぬ、黒塗りの爐縁に蘆屋松竹梅地紋甌口の釜あり、共蓋にて如何にも結構に拜見せしが、頓て亭主挨拶の後に炭手前あり、器物は左の如し、

炭斗

唐物内朱籠目八角

羽帚 鶴

灰器 尹部焼

香合

七寶製龜ノ子

炭手前終りて懷石は

汁

越後銀山の蕨

向附

赤膚焼一葉、沙魚、甘酢、山葵、

椀

寄海老、しめじ茸、隠元

焼物

甘鯛、薑、

吸物

水前寺海苔、かぶら骨

八寸

百合、すみ、

香物

淺漬大根、

酒器

遠州好鐵銚子染付蓋、新高取瓢形徳利、唐津寄盃、

懷石終り、御手製の芋餡に栗の入りたる菓子を頂戴して中立を爲し、頓て復席すれば、床には一見遠州作と見らるゝ尺八に寒菊及び水仙を挿み、爐邊には尹部焼水指の前にモールの袋掛りたる茶入を置き、濃茶手前に取掛る、器物は左の如し、

茶碗

御所丸黒

茶杓

古田織部共筒

茶入

破風釜翁手、銘千歳

建水

瀬戸

蓋置

赤澤宗輯宗匠、大徳寺紫野の竹にて作る

下

濃茶一巡の後、順次器物を拜見するに、茶碗の黒御所丸は龜甲形の高臺に其約束を現し、烏羽玉の闇夜の烏唯一黒なるが無類なり、破風翁手茶入は土を見たる所多く、黄藥も十分に於て此手にては最も景色ある方なり、瀬戸の建水は遠州所藏の寫しにて、遠州は此建水を以て本寸法と稱し居たりとぞ、斯くて古稀の御祝に當山第一の絶品を總幕出揃と云ふ次第なれば、況翁の得意想ひ見るべく、濃茶目出度終りぬれば、同席にて薄茶手前に移り、先づ床の花入を卸して扱て掛替へたるは、下條桂谷翁筆松に、吠々鳥の一幅なり、亭主の説明に過日桂谷翁より今日の床に掛くべしとて寄贈されたる一

幅長きに過て床に倏らず如何はせんと翁に問しに、其義ならば早速描き換ふべしと言はれたれども僅に二日を餘すのみなれば、果して間に合ふべきやと案じ居りしに、翁は直に筆を執り且つ表具まで完成して、初會の夜に滯りなく届け呉れたる其敏捷と親切とは諸君の賞讃を乞はざるを得ず云々とあり、是れより順次取り出されたる器物は嘗て和敬會十六羅漢の茶友より種々の場合に贈られたる新調品にて、爰に始めて、況翁一流の茶趣を發現したる次第なるが、其器物は左の如し、

香合

安田松翁好
交趾寫桃

棗

久松忍翁好
宗哲松壽繪

灰器

益田鈍翁暹羅の
土を以て製作

蓋置

伊藤祐磨好
五徳形

茶杓

東久世伯共筒十六本の
内銘諸迦跋駁駁者

茶碗

松浦心月庵百回茶會記
念品平戸焼銘いたづら

建水

馬越化生所贈瑞典
ストツクホルム製

菓子

三井華精好
内朱縁黒盆

右の外換茶碗として玄悦製五器形を出され、惣菓子遠州好山椒切及び廣島延柿なりしが、話上手の亭主とて奇談連發一同時の移るを覺えず、將に歸途に就かんとするや、亭主は始めて其茶會の本旨を述べ、拙者も御蔭にて恙なく古稀に達したれば茲に紀念物一品を諸君に贈らんとす、即ち我が遠州流にて使用する陶器扁圓香合にて、下

條桂谷筆、鳥の圖を以て一は香山一は竹泉に十六個づゝ製作せしめたるが、遠州流にては夏季瀬戸物より香木を取出すを涼しき風情ありとて使用するに付き、今般紀念物として製作せしなり、唯香山竹泉二種あれば鬮引を以て分配するの外なく此儀宜しく諒承を乞ふとの事なり、蓋し染付、鳥香合より思ひ付きたる好みなるべく、一同亭主の好意を謝し且つ其福壽圓滿を祝して、各々歸路に就きたるは午後四時半頃なりき。

心月庵主の茶會

(大正三年十一月十四日)

上

青島陥落が一年最好の喫茶時節に際會せしを以て、歐洲の戰亂突發以來沈みに沈みし此社會の人氣を引立て、爐上の松聲は恰も戰勝の聲に和する目出度さ、口切茶會も處々に開かるゝ中にも、毎度代表的權威を發揮するは心月庵主松浦厚伯の茶會なり、去る十四日正午心月庵待合に推參すれば、相客は竹内寒翠、金澤蒼夫、大久保北隱にて

余を併せて四客なり、竹内寒翠翁を正客に推し頓て腰掛に立出づれば、伯爵夫人中潜りの戸を開きて慇懃に出迎はるゝにぞ、一同引續いて心月庵に入れば、床には月江正印禪師が仰山皓侍者に與へたる一偈を掛けらる、其文左の如し、

仰山皓侍者求字。以玉泉。寫之。偈云。荆岫流來絕點渾。連城之價出高原。若從鼻孔裏頭入。浸爛當年皓布裙。

至仁八年仲冬

真淨老月正印

八十二歲書

印月江禪師は元人にて松月翁と稱し、四明育王山に住し、日本より遊學したる禪僧を薰育せし事幾人なるを知らず、當時有名の智識にして筆蹟絶妙畫讚など頗る多けれども、今日の一軸は其老筆なるにも拘らず嘗て見ざる所の上出来にて、至仁八年は元の惠宗の時なれば、本年より五百六十七年前に相當し、年號年齢入にて墨蹟の最上乘とも云ふべく、殊に表装も結構にて管に印月江中の尤物たるのみならず、世間幾多の墨蹟中最も優秀なるものなるべし。

斯かる墨蹟に對して、扱て如何なる御道具の現るべきやと更に爐中を差覗けば、古天貓菊地紋の名物釜こそ控へたれ、此釜は故心月伯在世中一度拜見せしことあり、伯の由緒書も添へられたるが、其昔東山義政公の所持にして後酒井家の藏品となり、明治十三年故伯の手に歸したる由、一見古蘆屋と見受けられ釜の全面に菊唐草ありて甌口に龜甲模様あり、銀付も菊花らしく極めて目出度き地紋なるが、釜師名越彌五郎は此釜蘆屋に似たれども實は天貓作なりと鑑定したりとぞ、墨蹟と茶釜と相對して威風凜々あたり眩き有様なるは、名家の口切茶會左もこそと思はれぬ。斯くて一同席定まるや、主人伯爵立出で、令夫人に代點委任の挨拶あり頓て令夫人の炭手前あるや、器物は左の如し、

炭斗 瓢 故心月伯作 香合 交趾笠牛 羽箒 鶴

灰器 仁清 水指 木地片口

香合交趾笠牛は蓋が萌黄、笠が白檀、身が總白檀にて色合も優れ、合口も好く、是れ亦笠牛中の逸物なるべし。

下

炭手前終るや、令夫人御給仕にて左の懷石出づ、

汁 百合

向附

鹽、加地、搥皿、葵、

椀

鴨、松茸、大根、口柚、

燒物 甘鯛味噌燒、

吸物

牡蠣、露の臺、

八寸

カラスミ、納豆、

香物 粕漬筍、

菓子

饅頭、干瓢、椎茸、添へて

右懷石後元の腰掛に中立して、待間程なく、七點の銅鑼は遠寺の鐘聲の如く漏來る。松下竹間の敷松葉は叡山苔と相映じて口切の茶味目に滲み渡る。露地の景色も面白く、後席の床は如何あらんかと一同樂みて入席すれば、片桐石州作銘千歳と云へる竹花入に見事なる御庭花白玉椿を挿みたる風情得も言はれず、南蠻芋頭の水指の前に春慶搦座の茶入を置き、令夫人の精妙なる鎮信流の濃茶手前ありけるが、器物は

茶杓 鎮信公作

茶碗 斗々屋銘奥山

建水 木地曲

蓋置 青竹

濃茶 妙の白

鎮信公の茶杓は御家物として、流石に一段立優りたる出來と見受けられ、又斗々家の茶

碗は赤味と青味と交錯して濃淡紅葉の如くなるが、即ち奥山の銘ある所以ならん。相客の一人が此茶碗を奥山と云ふは、多分紅葉の色に因しならんと言ふにぞ、余は「鹿とは分らず」と一番駄洒落たかりしを、殿中否席中と思ひて口を緘みたるぞ本意なき。當日頂戴せる濃茶は、銘を妙の白と云ふ宇治に於ける松浦家自園の御茶なりとぞ、維新前茶事を嗜まるゝ大名家は、宇治に茶園を所有して之を同地の茶所に預置き、口切時節に先づ初穂を取りて餘分を茶所の役徳と爲すを慣例とせし由、本來濃茶は二百年以上の老樹の葉を以て製造するものにて、現今宇治に於ける濃茶の樹齡は二百三十年に相當するものありと云ふ、即ち濃茶の貴重なる所以なれども、近來其需要大に増加する割合に遽に老樹を増加する能はず、随つて新樹齡の茶を用ゆるが爲め大に茶味を減殺する由なるが、當家の妙の白の如きは純粹なる自園の製品なれば、其風味の格別なるは固より言を俟たず。扱て濃茶一段落を告げれば、披の間皎潔軒へと案内あり、乃ち動坐して其床を仰げば、啓書記筆睡布袋の一軸を掛け、前に朱時代卓の上に黄瀬戸の香爐を載せられたり、

睡布袋の面相は極めて細密なる筆致にて、諦視すれば何を夢み居るにや満面喜色を含みたる目出度しなど言ふ許りなし、棚には玉柏の硯箱あり、其他席中の飾付は

釜 寒雉尻張

水指 時代蒔繪 青磁酒海

薄茶器 石州好吹雪 藤林宗源箱書

茶杓 清水道閑作

茶碗 權兵衛燒 銘白露 替金海猫かき

建水 砂張瓢形

蓋置 樂燒

香合 祥瑞橋杭

羽箒 鳥巢

炭斗 砂糖籠

以上小間廣間の道具組合を案ずるに、小間は印月江の墨蹟より割出して何れ劣らぬ一騎當千の品々のみ頭を揃へたるも目出度く、廣間に於ては小間の墨蹟に對するに啓書記の睡布袋を以てし、又小間に石州の花入と其門流なる當家先代鎮信公の茶杓を用ひて、廣間に同じく石州高弟なる清水道閑の茶杓を出し、首尾聯貫せしめたるなど其趣向に粗略なきは全然主人伯の工夫に出でたるか、或は令夫人の内助與つて力あるか、何れにしても名家口切の御茶會たるに背かず、一同篤く主人夫婦の盛意を謝して午後四時頃退邸せり。

靜和庵口切茶會

(大正三年十一月十九日)

月の十九日正午、橋場なる青地湛海の靜和庵に於て口切茶會の催しあり、余も案内を受けて當日同庵待合に着到せしに、相客は松原瑜洲、瓜生百里、金澤蒼夫、木村清兵衛なりしが、松原瑜洲を正客に推して一同靜和庵に入れ、床には墨齋筆、普化禪師鳴鐸の圖に一休和尚の讚ある、壁幅を掛けらる、中廻し紫地印金にて畫も讚も表装も三拍子揃ひたるには一同先づ荒膽を挫がれぬ、頓て庵主出でて、炭手前に取掛る、器物は

釜 大西淨清作 平丸

炭斗 砂糖籠

香合 染付冠

灰器 了入燒拔き

炭手前終りて懷石出づ、

汁 三州味噌、大根

向附 搔鯛、加減酢、山葵

椀 鴨切身、豆腐、菜、柚

燒物 甘鯛

吸物 蔞の臺

酒器 赤繪蓋銚子、瀬戸德利、唐津及染付拾盃

香物 新澤庵、

懷石後の中立は隅田川に臨める腰掛にて、近く新設の今戸橋を望み、眼前の光景年々に變化し行くは、茶人に取りては大に迷惑なるべけれど、文明と風流とは動もすれば兩立せざる場合あり、是れも浮世の成行と客も主人も觀念する外なかるべし、斯くて河風に吹かれて一同待草臥たる頃、銅鑼點々の聲を漏し來るかと思へば、尙ほ其上に主人自身の出迎ひあり、同庵の蹲踞石は廻り水門にて、初入の時は躡り口より入りしが、今度は其向側を通りて織部口より入席せしめたるは、道順變りて面白き風情を添へぬ、後座の床は中央に破目ある一重切に白玉椿とはしばみを挿みたるが、後にて訊ぬれば、花入は遠州の曾孫小堀政房の作なりと云ふ、斯くて庵主の濃茶手前あり、器物は左の如し、

茶入 源十郎、松平不味公銘、浮雲
水指 南蠻海老手、播座はんれら蓋

茶杓 遠州共筒
建水 木地曲

茶碗 伯庵手
蓋置 青竹引切

右器物の中、伯庵手茶碗は例の眞形に銅紐の如きやま割の痕あるが、景色となり、高臺に釉の流れ掛りたるも面白く、井上候所持の伯庵手茶碗三個中に置くも、孰れを兄孰

れを弟と定め難く、若し此茶碗が遠州などの手に掛り居たらんには、必ず一名物と爲りたるならん、箱には石州筆にて白紙に伯庵手茶碗とあり、近來容易に出會はざる名茶碗なりとぞ見受けらる、遠州茶杓は權先き二段ダマにて一寸宗和らしく見ゆれども、竹は正しく遠州にて模様殊に面白し、源十郎の茶入は處々に藥の流れあるが、即ち浮雲の銘ある所以ならん、不味公の箱書にて表に平假名にて『うきくも』裏に降りしきる時雨の空の浮雲に

みえぬ夕日の影そうつらふ

とあり、袋は蜀錦の様なるが、時代も十分と見受けたり、濃茶一巡後同席にて薄茶手前あり、器物は一閑張、象牙茶杓、唐津筒茶碗、吳洲橋、模様茶碗にて、其他は前に同じ、唯南蠻水指のハンネラ蓋を結構なる赤繪酒會の蓋に取替へたるが、目先變りて嬉しかりき、惣菓子、豆粉の松葉と松笠を是れ亦結構な獨樂の盆に盛り、前後一貫して道具の能く取合ひ、口切とて餘り鹿爪らしからざる處に、茶味津々たるものあり、余が靜和庵に於て出逢ひたる茶會中、今度が最上乘と思はれぬ、斯くて雑談に時移り一同歸途

に就きたるは暮鴉待乳山に還る頃なりけり。

白紙庵口切茶會

(大正三年十一月二十三日)

當春白紙庵開きの茶會を催してより、初風爐も事に紛れて取出さず、歐洲戰爭突發以來は茶味も何となく身に添はずして、風爐名残も其儘に打過ぎしが、青島陷落の聲は、風流社會にも反響して、松浦伯の口切茶會を先導に前後名乗を上ぐる者多ければ、余も亦口切の一會を催す事とは爲れり、則ち當十一月二十三日正午を、手初めとして連日の來客は左の如し、

十一月二十三日正午

竹内專之助、青地幾次郎、田中仙樵、金澤三右衛門、宮北宗春

十一月二十四日正午

安田善次郎、瀨川昌耆、瓜生震吉、田丹左衛門、川崎覺太郎

十一月二十五日午後五時

三井八郎次郎、同守之助、木村清四郎、朝吹英二、野崎廣太

十一月二十六日午後五時

原富太郎、山田松三郎、大口鯛二、田中親美、梅澤安藏

十一月二十七日午後五時

森下岩楠、高島小金治、坂田實、渡邊修、藤山雷太

十一月二十八日午後五時

益田孝、同英作、根津嘉一郎、下條正雄、山澄力藏

十一月二十九日正午

石黒忠應、松原新之助、安井泉、古筆了仲、中村作次郎

十二月三日午後五時

馬越恭平、端善次郎、大久保北隱、安田善八郎、栗山善四郎

今度の茶會は、白紙庵に松花堂筆竹霞二大字の一軸を掛け、加州本多男爵家傳來の刷毛目小堀宗慶銘時雨の茶碗と、小堀政房の箱書付銘友雀ともすゝめひきゐておりぬ

やましろの鳥羽田の面のおちほひろひに)とある萬右衛門作落穂手の茶入とを用ひ、寄附に遠州より松花堂に送りたる、近々松花堂へ御入室の由云々とある消息文を掛けて、自から遠州松花堂二人の交態を示さんとするが大體の趣向なり、本來は小間許りを用ゆるが趣意なりしが、今度の來客中には、當春新築開きに來會せざる者もあれば、披露旁々廣間をも使用せしなり。

右に就き野崎幻庵が、中外商業新報紙上に記述したる茶評は、左の如し、

白紙庵の茶會

上

高橋等庵、十一月二十五日晚景同好數輩を招きて口切の茶事を催す、案内の刻限を計りて寄附に到れば、床に小堀遠州が松花堂昭乘翁に贈りし文を掲げて交友を慕ふの意を示し、丸爐に焼飯形の手取釜を掛けて其到着を待つ用意の品々如左、

時代蒔繪小硯箱

染付茶碗

島物香煎振出

唐物楕圓形盆

時代火桶

桑手付煙草盆

火入 繪唐津

暫くにして招客顔ぞろひとなるや、庵主慇懃に迎へ來り、次で一同魚貫して露地を進み席に入る、床には松花堂惺々翁が竹霰の二字を記せる一軸を掲ぐ、筆勢灑々として出塵の概あり、表装も美事にして一風茶地金襴中、時代繡紗、上下茶地の紵也、又爐邊に移れば黒柿の縁を用ひし爐に寒雉の釜(環付)を掛け、棚に香合と羽箒とを飾るを瞥見す、やがて庵主作法の如く挨拶し、炭を直しにかゝる、一同膝を進めて爐中を見渡すに、五徳は與次郎の作かと覺しく、火加減も灰の景色も亦美しきは心地よし、手舞了りて親しく香合其他使用の器物を一覽に及ぶ、如次、

香合 古染付獅子蓋

炭斗 瓢

羽箒 鶴

灰器 長次郎 白醉庵觀阿箱書銘秋色

香合、灰器共に賞すべし、拜見終りて懷石を出す、獻立は如左、

- | | | | | | |
|----|----------------------|----|---------------|----|----------------|
| 向 | 染付松竹梅、
ひき鯛、山葵、甘酢、 | 汁 | 百合、
おとし辛子、 | 椀 | 鶺鴒身、
小松菜、柚、 |
| 燒物 | 鱧の子、
海苔卷、 | 吸物 | 板蕨、
露の臺、 | 八寸 | つばすみ、
銀杏、 |
| 香物 | 班唐津片口、
瓜奈良漬、漬菜、 | 菓子 | 栗饅頭、 | | |

白紙庵口切茶會

(酒次は鈍阿焼、酒吞は青磁、阿蘭陀、鈍阿焼など用ゆ)

鹽梅結構、獻立も亦庵主の苦心ほのみえて一入佳味を覺ゆ、食事了り中立となりて腰掛に移る、折柄新月鎌の如く樹頭にかゝり、炯然として流光衣襟に散ず、心と月と兩つながら相照らし、情景轉々清寂を極む。

待つ程もなく庵主再び迎へ來り、乃ち復た席に入れば、床には織田道八の作にかゝる一重切の花入に、白玉椿に臘梅をあしらふて挿む、最も愛すべし、爐邊には備前榎膚の水指に細川緞子かとも覺しき袋かけたる茶入を配して飾る、其配合少しく榮えぬ氣味もあれど、また落付きて見ゆる節もありぬ。

下

客の着座を待ちて庵主つぎに茶器類を運び出しつ、次で型の如く點茶してすすむ、一同順次嘸み終りて拜見の段取となる、如左、

茶碗 刷毛目筒 銘時雨

茶入 落穂手小堀蓬雪(?) 箱書歌名友雀

茶杓 金森宗和

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

刷毛目の茶碗見事にして、形も能く縮り袖も亦充分に見受けらる、落穂手の茶入は本歌に比して形稍々小さけれど、名人萬右衛門の作にかゝり、其面影は彼の名物落穂に髣髴たるもの、蓋しまた之を名物の田面若くは振鼓などに對照するも敢て遜色なきものならんか、箱に歌銘あり

ともす、め引ゐておりぬ山城の

鳥羽田の面の落穂ひろひに

乃ち小堀蓬雪(或は遠州の書付)も之を友雀と命名して名物落穂の壘を摩するものなるを證す、宜なる哉、茶杓は稍々難色あり、いづれも其鑒別に苦しみ、後に筒を見るに及びて初めて金森宗和の作なるを知る、宗和の作にしては餘りに捻り過ぎたるものともいふべきや、茶器類の拜見を終るや、庵主更に一同の動座を求めて披きの間に導く、さて廣間に入れば、床には雪舟門人珠賢が筆に成れる山水の一幅を掲ぐ、峰巒鬱密、氣勢雄遠、毫端に横溢す、誠に鑒賞すべき也、下に時代洲濱形の小卓に御本兔耳の香爐を載せて飾り、床脇の棚には上に磬を吊し、下に時代桑木地に獅子の蒔繪

(蓋裏は山)を施せる硯箱を飾付く、さて又爐邊には遠州の小棚に高取管耳の水指を置き、黒無地の爐縁に大西淨清かとも見ゆる釜(環付)を掛けぬ、座定まるや八田圓齋子代點して薄茶を饗す、茶器類は次如、

薄茶碗 祥瑞在銘

換茶碗

水府文公手造 銘玉淵

茶器

桑木地金林寺

茶杓 象牙

建水

朝鮮唐津

蓋置

唐物古銅

祥瑞の茶碗結構、換茶碗も亦凡を抜く、こは水府文公の手造にかゝり一見了入の作に似たり、文公は徳川治紀卿の諡號にして、筥庵は即ち其藩臣なり、特に之を選みて用ひたる其所以を察すべき也。

總じて本席并に披きの間とも趣向恬淡、且つ使用の器物も餘りに肩の凝るべきものを示さず、無事無難を旨としたるは寧ろ賞すべく愛すべし、試みに之を白紙庵開席披露の催しに較ぶれば、余は却つて今回の趣向を贊せんとす、而も當夜席中の一團皆會心の友、壯語諧言、快心千古とや謂はん歟。

茶會後、禮狀に兼ねて所感を書き送り來たる者、數通の中、石黒況翁は「本日は御心入れの御茶誠に有難く御禮申上候、時節柄竹霰の御掛物は先づ第一に感服、又萬右衛門友雀の御茶入は落穂、田面振鼓鳥羽田等の概況も思ひ出でられ、一入悦しく存候、今回の御茶は表は輕淡にして裏に勁力ある御趣向と拜見仕候、」云々、また益田鈍翁は「昨夜は結構なる御茶を頂き、近來の快味を覺え申候、歸來如何にも忘れ難きは松花堂の御幅なり、如何に大師を學び得しか、豫ねて想像せしよりは一層感を深くし、終身相忘れ兼ね候、それ〴〵の御道具組と申し、寄附の御模様懷石の御苦心等思ひ起しては樂み居り候、」云々、此外田中仙樵氏より小間廣間の道具飾付に就き、利休の秘傳なりとて陰陽調半の説を詳説し來りたれども、斯くの如きは所謂小乗茶たるに過ぎず、一關踏過せば何ぞ陰陽を言はん、何ぞ調半を語らん、目に適し心に會して、自ら其風情を樂しめば足れり、是れ専門家ならざる余等の茶味なりと知るべし。

根岸隣鐘庵茶會

上

(大正三年十二月二日)

東都茶器商中の元老山澄宗澄老久し振りにて根岸の茶寮に茶客を請ずる由聞き傳へたる間もなく、余も亦其茶客の一人に差加へられて、月初二日に其老練なる亭主振りを見る事を得たり、百舌鳥の鳴く小春日和に根岸の垣根道を辿り行けば、三島神社に隣して瀟洒たる隠棲あり、寄附は六疊の間に床を構へたる一室にて、床に掛けたる一軸は探幽筆臨濟大師の圖に、江月和尙の

這白拈賊、阿着黒衣、唯餘一喝、雷轟電飛、

の讚あり、床柱に法子と如意を懸け、立て廻したる銀屏風の中には瓶掛に鐵瓶あり、松花堂好み松の木煙草盆に冠手の火入あり、楣間に掲げたる扁額は小堀宗中の筆にて隣鐘の二字あり、余は此二字を見て是れこそ當家の庵號として動かす可からざるものならんと思ひぬ、頓て庵主の出迎ひありて庭前に下り立てば、雜木の間に交りたる楓樹の霜に飽きて半散りたるものあり、樹蔭を傳ふてサラ／＼と庭前を流るゝ水は、自然に湧出づるものなりとは先づ以て羨ましく、蹲踞石も此流れの中に組込まれ、小笹や青苔の飛石捨石と自然の配合を保ちたる具合誠に風情ある事共にて、折々電

汽車の響こそあれ、今猶ほ鶯谷の昔の俤ばれて暫時浮世を離れたる心地してけり、扱て庵室に繰込めば、二疊臺目長板の席に南方上野山に面して大圓窓を切り、窓内を書院と爲したるは一風變りたる茶室にて、床には一休和尙の歌三首を書きたるに、清巖和尚が末尾に一休和尚之眞蹟自笑清巖宗渭書として朱印あり、即ち紙中極にして本文の歌は左の如し、

心とや紅葉やすらん龍田川

松は時雨にぬれぬものかは

小倉山麓の里に木の葉ちれば

梢に晴るゝ月を見る哉

ましてしはし木幡の山の夕しくれ

こえて伏見の里になるまで

とあり、幅廣き紙なれば或は巻物切などにやあるらん、文字も達筆にて出來殊に面白く、紙中に清巖の極あるが爲め此幅に一段の寂味を添へて始めて此床に折合ふもの

と爲りたるが如し、釜は仙叟好み、矢筈口にて作者は勿論寒雉なり、其蓋にて篋れに篋れたる趣、見るからに凡ならず、此釜より割出して今日の道具組を想像すれば、馬頭の米囊趣味既に津津たるを覚えぬ。

中

一同座定まるや、庵主は節絲織鼠紋付に腰衣を着けて、頭は眞白く其特徴たる蠶の如き太き眉は眞黒く、十六羅漢中にある何々尊者と云ふやうな相好に、満面の喜色を湛へて立ち現れたる姿の、爐中の篋れ釜と取合ふて亭主と寂び道具の釣合好きぞ嬉しき、頓て炭手前に取掛りて器物は、

炭斗

瓢碌々齋作
書判あり

香合

交趾中龜

羽箒

黒鶴

灰器

故益田無爲庵
梁川寫

香合交趾中龜は總萌黃にして背部に黃と紫の釉變りあり、蓋に一筋の疵ありて金粉を以て繕ひたるが、是れが若しも無疵なりせば、先年大阪にて九萬圓の估券を贏ち得たる彼の交趾大龜に續きて、高家貴人の口切茶會にこそ適當すれ今日の役には立

たざりしならん、性の良き疵物を取上げて寂び茶の香合と爲したるが、即ち當主人の働きと見る可きなり、斯くて運び出されたる懷石は左の如し、

汁

三州味噌、
蕪の葉

向附

志野角のぞき、
鱈甘酢、山葵

椀

一鹽甘鯛を焼きて笹
の雪を載せ、滑茸、柚子

燒物

六兵衛燒辨當茶椀に櫻の皮つま
み杉蓋、風呂吹大根、鰻味噌

吸物

柱貝、
切生薑

八寸

カラスミ、
百合

酒器

染付蓋銚子、鈍阿燒德利、
唐津及染付芦雁模樣盃

菓子

小麥饅頭

懷石は一閑張皆具にて、土地の名物とて椀に笹の雪を用ひ、六兵衛燒辨當の飯入を利用して風呂吹大根の燒物を盛りたるなど、老巧なる苦心の顯れて誠に面白き趣向なりし、扱て中立は元の寄附にて亭主自ら出迎はれければ、一同再び復席せしに、床には遠州銘物再來と稱する竹花入の寫しに、咲き加減の白玉椿と山吹の實附きの一枝を生けたる風情又なく佳し、後此花入の箱書附を一覽すれば、

享保五庚子春宗甫造之再來の筒を摸し、面影と名く、於城州淀、
とあり、即ち今の松平承子爵の先代乗邑が淀城主たりし時、遠州の銘物再來を摸寫したる者なるが、乗邑は左近將監と稱し、彼の銘物茶書三冊物を編製したる茶道の大

恩人なれば、其手に成りたる花入は一段有りがたく思はれぬ。

下

眼を轉じて爐邊を見れば、押潰したるが如き伊賀焼播座瓢箪の水指の前に有栖川切に似寄りてザク／＼としたる廣東織止めの袋掛りたる茶入あり、播座瓢箪の形と云ひ其口に丹礬藥の崩れたる具合覺えず成程と嘆聲を發せざるを得ず、扱て濃茶手前と爲りて器物は左の如し、

茶碗

樂了入作
鈍太郎形赤

茶杓

宗偏作銘
大振

茶入

宗旦黒小棗

建水

木地曲

蓋置

青竹引切

鈍太郎は益田鈍翁の所持する原叟の名物茶碗なるが、本歌は黒なるを寛政年中樂了入が赤樂を以て寫したる者即ち是れなり、千家の宗匠倅齋の箱書付に了入作鈍太郎形赤茶碗銘二王とあり、又如心齋の筆にて『戯れに』として

鈍太郎も名を變へひよんな二王どの

りきみかへりてはりわられけり

とあり、又了入自筆の手紙に

鈍太郎の割れても強き二王どの

合せて元のアウンとぞなる

の狂歌一首あり、例の遅鈍なる蝦蟇然たる大茶碗の骨柄によりて二王と名け、又割れ疵あるによりて右の狂歌ある次第ならん、茶杓は庵主の流祖宗偏作にて普通より少しく大形なるにより大振と銘したるもの、如く筒に元祿十五年六月七十六歳作之とあり、何れも寂び味十分にして庵主と道具の相應じて不自然の痕跡なきは言ふに言はれぬ、茶味なりけり、濃茶一巡後同席にて薄茶手前あり、水指は時代藥罐と換り、茶入は膳所焼薄茶々碗は締りたる青井戸と高麗左衛門手捏かと思はる、古萩にて濃茶々碗の少しく飄逸に過ぎたるを、此青井戸茶碗にて取締めたるは庵主意匠の存する所なるべし、惣菓子黒塗菓子器に盛りて遠州好味噌松風を出し、残る方なき注意の程座客一同有難く得心しぬ。

以上は山澄老が晩年を飾る可き近來大出來の茶の湯にして、固より言分なけれども

尙ほ何か言ふて見よと云へば、冠手の火入は唐津織部などに取換へたし、寄附の探幽筆臨濟の幅はなくて法子と如意を初めより床に掛けたし、見た目に即き過ぎたる伊賀水指と鈍太郎茶碗と何れか一方避けて欲し、小麦饅頭を蕎麥か粟にして欲しと減らず口を叩き置くべし、扱て御禮代りに詠み出でたる例の腰折は

九つの品の上野の鐘の音を

聞きつゝ木の芽烹る庵やこれ

世にひく隣の鐘のなこりより

吹立にけり庭の松風

赤坂寒翠庵茶會

(大正三年十二月四日)

和敬會十六羅漢の一尊者竹内寒翠翁赤坂新坂町なる寒翠庵に於て去る四日觀楓茶會の催しあり、霜に飽きたる丹錦青杉緑松と相照して、庭の中央なる搦鉢形の水鏡に映ずる風景、都門の中とは思はれず、寒翠庵は七疊床附にて掛物は大徳寺の玉舟が夢

の一字を書き、江月が無夢無亦無、澤庵が最後に

一字看來六喻中、

人間萬事觀如同、

蓮々羽々吾忘我、

胡蝶飛過牆外風、

の一偈を以て夢の一字を説きたるものにて、一幅三筆頗る茶味あり、襖には川端玉章筆の鹿七八匹あり、釜は名物宮島釜の寫にて、例の鳥居の鑲付など四顧渾て紅葉に縁ある者のみなり、此室内に坐して簾越しに庭前を透視すれば、身は秋色に包まれて、宮島の仙境に遊びたるが如く、座客一同嘆賞の聲を斷たざりき、斯くて心籠めたる懷石の馳走ありける後、濃茶の器物は左の如し、

花入

古瓢
車輪梅

茶入

澁紙手
小堀政之銘白雨

茶碗

信樂
銘朝霜

茶杓

不味公作三本入
銘三夕

建水

沙張棒の先

右の外水指は明治二十年故小松宮殿下が歐洲行の際、印度より携へ歸られたる福祿壽三個の一にて、産地にては無論貯水壺に用ひたるならん、口少しく小さ過ぎて風爐柄杓ならでは通はざれども、殿下の直書附ありて誠に貴重なる珍器なり。

濃茶一巡後大廣間に移れば床には久隅守景筆牡丹の一軸を掛け、黒塗卓に錦手の薩摩焼香爐を置きて其前に飾れり、室隅には及臺子に七寶器具を列べ、釜は蘆屋菊地紋にて、薄茶々碗は仁清と人形手の二つなり、花羞しき妙齡の令嬢が鮮なる御手前、一段と有難く斯くて薄茶を飲み終る頃、一方の襖を取拂へば、既に見臺の用意ありて菅野吟平が三味線を構へて控へ居る御趣向昔淺草藏前にて札差連の茶會には毎度此種の餘興ありし由なるが、近來全く打絶えたるを當主人に依りて再興されたるも嬉しく斯くては親類ならでも二段位は聽聞せざる可からずと覺悟の臍を固めて、主人の丹波與作樋口芳次郎氏の蟬丸など拜聽せしに流石に年功は争はれぬものにて、一中節の其名にも似ず一同餘り中られざりしのみか、御茶の方とは段違ひなりなど言囃す者さへありしは大仕合せにて、一同退散せしは夜も早や初更の頃なりき。

幻庵祝捷茶會

(大正三年十二月五日)

本年は口切茶會に出馬する者極めて多く、金覆輪の鞍置いたる松浦伯の心月庵茶會

黒草絨の鎧着たる山澄老の隣鐘庵茶會など、我れも我れもと勢込んで天晴功名を競ひたるが、中に澁谷羽根澤の野崎幻庵茶會は時節柄祝捷の意味を含みて、威風凜凜たる其武者振り確に一方の驍將とは見えたりけり、斯くて寄附に掛けたるは武功世に隠れなき細川三齋公の消息にて、其文は左の如し、

彌々御平安珍重に候先日會席にて承り候利休の歌殆ど忘失致候筆記致し置
 度候ま、御認め被下度頼入申候

時雨る、や筆執りかけて物忘れ

十月二日

細三齋書判

丸爐の鐵瓶其他置き合せは例の如くなれども、水口籠硯箱、赤繪小香煎入は茶趣十分に現れたり、頓て庵主の案内ありければ加藤正義君を正客に推して一同露地に下り立てば腰掛の前を経て蹲踞石邊に流れ來る遣水の兩岸は、何時の間にか大石に組み換りて見るからに手強くなり、見上げ見下ろす松杉の翠に交る紅葉の人待ち顔に照りまさる風情、得も言はれず、扱て繰込みたる庵室の床には清巖宗渭禪師筆横物に

一彈少室無私曲、

盡是千秋萬歲聲、

の二句あり、今度の戰勝祝ひを當込みてワザ、註文したるが如き此一幅は大に座客の感興を動かしけるが、顧みて爐中を見れば蘆屋山水地紋の丸釜あり、其前に坐したる庵主が炭手前を見れば、器物は

炭斗 貝籠

香合 吳洲有馬筆

灰器 湊燒

羽帚 鶴

吳洲の有馬筆は色合と云へ合口と云へ誠結構なる上に、旅次の心の單りたるが又なく佳し、扱て懷石は左の如し、

汁 三洲味噌、小蕪

向附 樂燒船形寶蓋し、邊し袖をくりぬきて柱貝、防風

椀 木水母、繪、蝶、滑茸、菜、露の聲

燒物 南蠻内蓋物、鍋、團子、芋、ちくわ、青竹串

吸物 海素麵

八寸 浦鹽、燻鮭、長芋

酒器 青磁蓋銚子、保全金調手、及青磁鉢形盃

菓子 棒餅

後座の床には景色多き尺八筒に白玉椿と鶯かつらを挿めり水指は伊賀瓢箪にて山澄老の向ふを張り、茶碗は志野大形にて橋と屋形の模様あり、茶入は少庵小棗茶

杓は權十郎作にて銘を玉笹と云ひ筒に左の歌あり、

冬くれは一夜二夜の玉笹の

葉わけの露のところせきまて

建水は木地曲蓋置は青竹引切にて茲に大寂びを示したるが伊賀の瓢箪水指は其口の前方に歪みて四方共に景色好く丹礬薬も十分なるに、白き志野の茶碗を以て相對したるは色の配合申分なけれども、本来志野茶碗は大寂びの骨頂にて、還曆後の茶人ならざれば兎角、難しと言はれたる程にて、目の習慣にや何となく主人と折合はざるやう思はれたるは是非なし、頓て廣間に移れば、床は雪舟筆杜子美騎驢の圖なりしが、備陽雪舟筆の落款も見事に馬上の人物も健筆にて、曉天殘月、瀾橋の霜を踏みつつ行くかと疑はれ、自ら此茶會の題に切なるを覚えぬ、其前に置かれたる遠州好香盆の上には青磁酒會に赤繪唐犬蓋の香爐あり、片隅に元信筆四季耕作小屏風を立廻し、其他一座の飾付は左の如し、

釜

名越庄兵衛作
柏の葉と延命の文字あり

水指

遠州
雲草棚

茶入

高取燒
播座大海

茶杓 利休形

茶碗

鬼熊川及
了入作黒鹽筍

雲草の水指固より結構、鬼熊川茶碗小服に處々浸みありて面白く、兎角廣間付の茶會は小間の趣味を廣間にて打壞すが普通なるに、當茶會は廣間が格段の出來にて、小間の成功を裏書して一層信用を増したるが如き趣あるは、主人の苦心尋常一様ならざるを見るべし、客は加藤正義、吉田丹左衛門、梅澤鶴叟にて相手に取りてワルデツク總督などの比に非ざりしは、主人も定めて満足なるべく、頓て同人より最高金鵝勳章を贈進する事とも爲らんか穴かしこ。

目黒靈水庵茶會

(大正三年十二月六日)

上

茶人界の彗星益田紅艷、目黒靈水庵に於て突然其光芒を現したりと聞き、茶侶四五輩そぼ降る時雨を物ともせず、月の六日正午同庵に押寄せたるに、寄附は奥の八疊の間にて見渡す庭は名物の竹林に楓の大樹二三本、今を盛りと紅葉したる其下に、古寺の

遺物とも見るべき伽藍石を無雜作に轉がしたる意匠、先づ以て庵主築庭術の奇略を見るべし、床には粗朶組文臺の上に當庵名物蒔繪小硯箱三室山を置き、筆墨紙を添へて當座など一筆參らせよとの趣向、是れ亦庵主がヌタクリ客に對するコルテシイと見るべし、煙草盆には心ありげに白紙庵火入を入れ、室の中央に大火鉢を置きたる外他に一物なく、白湯は運び出しにて、待つ間程なく、庵主の案内あり、是れより一同勢揃へして庭前に出で、竹の皮の丸笠を翳して雨中の露地を見渡せば、目黒不動の境内は庭續きにて我が物となり、彼の不動瀧の下流が垣根の内に流れ入りて露地の傍を走り去る、其右岸を辿りてグルリ靈水庵の前に出づれば、二抱もあるべき樺の大木の下に流れを挾んで蹲踞石あり、先年山縣老公が臨庵ありしは、初夏の事にて、此邊の風致を愛で、詠み出でられたる歌は

この宿の樺の木蔭行く水の

清きころは汲む人ぞ知る

なりしかと記憶せしが、今日は又風情變りて散り浮く紅葉の唐紅に水縮る様一段

面白く公にして若し之を見まさは必ず又名吟を得つべきにと、今更ながら最と惜しき心地せらる。

斯くて入庵して床を見れば、思ひきや是れも亦山縣公の詠草ならんとは

肥後國にて戦ひけるとき

有朋

木留山しらむ砦のすてかゝり

けふると見しは櫻なりけり

の一首を丹地の臺紙に貼りて、中廻し一文宇風帯とも總て色紙にて表装したるは、相變らず庵主一流の意匠にて、『エヘンどうでげす』と云ふ文字の歴々と其顔に讀まれたるも可笑し。

中

靈水庵は四疊の中三疊を客席とし、他の一疊の間に太鼓張二枚引を立て、向切り逆勝手にて稍彼の道安好みの席に似たり、釜は蘆屋丸形紅葉地紋にて能く大寂の木地爐縁に取合ひ、庵主が大佛然と爐頭に坐して無雜作なる手前も嬉しかりしが、器物は

灰器 新唐津

香合 交趾笠牛

炭斗 新瓢

羽箒 青鸞

交趾笠牛は總萌黄にして笠のみ黄なり、蓋に一筋の疵あれども細工も色合も正に此種の尤物たるに背かず、懷石は食道樂なる庵主の工夫とて、案の定人の意表に出でけるが其獻立は左の如し、

汁 三州味噌、鳴摺ナカガシ、小松菜、

向附 丸袖をくりのき折紙敷て、鮎酢味噌

椀 錦欄手茶碗、甘鯛シンジョ、白菜鳴の頭

焼物 京焼蓋物、甘鯛頭一個、

吸物 芽うど、

八寸 鹽鮭、刻みからつきょう白子佃煮

酒器 青磁横臥仙人蓋、銚子、刷毛目及絞手盃、

菓子 蕎麥饅頭、

香の物 唐津片口、漬菜、黄瓜、

懷石の意匠非凡なる中にも、椀のシンジョに用ひたる甘鯛の頭、椀一個を焼物となし、汁に摺ながしたる鳴の頭、椀一個を椀中に投じて、因果應報の輪廻する骸骨の巻を實地に描き、南無鳴、鯛、幽靈頓生菩提と濟まし込みたる悟道の程、恐ろしなど言ふばかりなし。

中立は元の寄附なり、後座の器物に就き様々の豫想ありしが、相客多くは當家寶藏の

案内知つたる者なれば、花入は庵主が常に五萬圓一文も引けなしと自讃し居る伊賀、挿座ならん、茶入は松平家の入札に於て顛へながら掘り出したる安國寺肩衝ならん、合圖の銅鑼は例の灰屋傳來ならんと噂し居る間に、銅鑼の合圖はなく、庵主自ら出迎へたるに、聊か失望しながら入席すれば、花入は案に違はず伊賀にして、花は佗助一輪に紅葉したる満天星一枝を添へたり、但し此伊賀は例の五萬圓口にあらずして、其御前立なりとは、庵主の嗜み驚く可く、篋耳にて高さ一尺許り焦もびいどろ薬も十分にて天晴器量人なれば、身の代金も定めて驚くばかりならん、扱て庵主の濃茶手前を拜見するに、最初は落着拂ひたる御手際、何時の間に斯く上達せしかと思ひ居る中、停電又停電、折々客の顔色を偷み視て暗に指圖を乞ふが如き、無邪氣にして愛嬌あり、器物は

茶入 唐物肩衝 張紙に安國寺肩衝とあり

茶碗 遠州の帶 遠州銘青柿

茶杓 羽淵作 節なし

水指 緋襷

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

下

庵主の濃茶手前が滅法粗略なる反比例に道具は滅法結構なり、緋襷水指は亡兄無爲庵の遺愛にて、頃も好く艾色も緋襷も申分なき目出度さ、此種の尤物とこそ見受けたれ、柿の蓆茶碗は青柿の銘に背かず内外共青釉の光澤滴るが如く、一見伊羅保の如く、ブヨ〜としたる作行き言ふに言はれね味あり、左れば遠州の書付も面白く箱裏に青柿のしふ〜なから御茶うけに

甘きはやかて霜のころかな

とあり、茶杓は利休の下削羽淵が紹鷗形に依りて削りたる者にて、其何でもなきが他の名器に取合ひたり、茶入は庵主が松平家の入札會にて恐る〜掘出したる者にて、元安國寺惠瓊所持、世に安國寺肩衝と云はれしを、關ヶ原戦後細川三齋が手に入れて西行法師の佐夜の中山の歌に因みて、中山肩衝と改稱したる大名物なりと名乗を揚げ、名物切を寄せ集めて其袋に十二一重の綺羅を飾るなど丹精固より尋常に非ず、斯く尾緒が附きたる以上は、蛟龍終に池中の物に非ず、追つて雲雨を得て天上するやも、知れざれども、先づ夫れ迄は貝鐘太鼓で大に吹き大に叩くが肝要ならん。

今回靈水庵の茶會は懷石固より奇なり、道具組亦甚だ不思議なり、此等は彗星の名ある庵主の事とて一々批評の限に非ざれども、唯餘りに不思議なるは霜枯れ時の今日此頃山縣公の櫻の歌を掛けたる事なり、天邪鬼なる庵主に言はすれば、西南戦争の木留山を今度の青島に見立て、紅葉の季節に櫻を對照せしむる手腕、乃公ならではと脂下るならん、左るにても掛物の表装は筆者の衣服と同様なりと云ふに、全部色紙仕立てとは是れ如何、大勳位元帥公爵に紙子を着せて夕霧伊左衛門の向ふを張らせ、夫れで天下一品の名表具なりと稱し居るは、左りとては餘りに手荒からずや、濃茶終れば庵主の挨拶に、近來諸家の口切にて諸君は定めて茶に飽き居らん、因つて薄茶は御預りにせんとあり、粹を利かした亭主振例に依りて狡猾無類なり、客は益田鈍翁團琢磨野崎幻庵等にて何れも遠慮なき間柄なれば、批評は固より勝手次第なりしが、善くも悪くも趣向澤山にて近來面白き茶會なりき。

井上侯興津茶會

(大正三年十二月十二日)

上

井上侯興津別荘の前面に當りて小山あり、曾て見晴しの亭を兼ねて茶室一棟を構へ置かれけるが、侯爵病後、山上は不便なりとて、近頃此茶室を銅像の峙ち居る長者山の麓に移し、腰掛待合等の設備一切完成せしに依り、都下の好事家を招ぎて一日茶事を催さんとせられし折柄、侯は先般京都に於ける能久治入札會にて有名なる蒔繪歌書筆筒及び虎溪三笑硯箱を得られたるにぞ、俄に同好者を招ぎて茶室開きに兼ねて蒔繪開きを舉行せらるゝ事と爲り、相も變らぬ好事の段々、誠に目出度き次第なりけり。去る程に今度侯の佳招に預かりたるは、益田鈍翁馬越化生野崎幻庵、東京美術學校の白石村治の外、余と中村好古堂主人にて、月の十二日午前十時興津の別荘へと繰込めば、侯の喜悅一方ならず、先づ大廣間に對面あり、因つて一同當日の飾付如何と見てあるに、床には狩野興以筆西湖の圖横物を懸け、前に結構なる蒔繪の冠臺を置きて、其上段に木彫小觀音を飾り、扱て其傍に例の歌書筆筒を安置したりければ、一同先づ謹んで彼の歌書筆筒を拜見するに、高さ一尺二寸幅一尺五寸もありぬべし、けんど

んを開くれば、中は四つに區劃して無地金梨地の抽出あり、其中に源氏五十四帖を納めたるが、小堀遠州などの意匠にやあるらん、蒔繪の中に散見する文字の遠州風なるは其證據とも見るべく、時代も正しく寛永頃と思はれぬ、源氏に因みてか全部近江八景の模様を現し、前面に石山寺あり、勢多の長橋其他の景色を極めて精密に描きたるは、蓋し探幽下畫ならん、諸所に金銀葵の紋散らしあり、傳説にては幸阿彌作にて、尾州徳川家所藏初音の棚の一部なるべしとも言ひ、或は同棚よりも一層古く一層美なりと言ふ者あり、他日比較参考せば蒔繪歴史上に面白き材料を得る事ならん、善盡し美盡し結構言はん方なきものなれど、時代と共に金色沈着して茶味十分なるは眞に貴重品の逸品と謂ふべきなり。

本日は東都の鑑識家を召集したる事なれば、別室にも飾付ありとて、侯爵の案内にて更に隣室に赴けば、八疊の間の床には梁楷の筆と稱する出山の釋迦の前に、青貝の厨笥中に、法隆寺土偶と、唐の貞觀年號ある鍍金六朝佛其他木彫閻魔王などを飾り、正午までは未だ時間もあるべければとて、東京より持參されたる元信筆長橋人物の横物

王摩詰山水など種々の幅類を示されぬ、斯くて後食事は本館にて差出し、食後茶室に案内すべしとて、奥の八疊の間に於て、侯爵が其不自由なる身を以て、臺所に立ち盡して指圖したる懷石の饗應ありけるが、八十の老齡を以て斯かる面倒を親らせらるゝ侯の氣力と親切には一同感嘆の外なかりき。

扨て、奥の八疊の床には、何人の筆にや巖上觀音の圖に、南浦大應國師の讚ある一軸を懸けられたるが、其讚は左の如し、

三十二應身

還我那一方

風前吹下青山瀑

瓶裡挽回翠柳春

觀音の彩色精細にして、暢達なる筆致は定めて宋末高僧の手に成りし者なる可く、誠に有難き一軸なり、古銅博山香爐の傍に交趾菊蟹の香合を置き、其右側に豫て聞及びし虎溪三笑蒔繪硯箱を飾られたれば、一同立寄りて熟々拜見するに、山水中に陶淵明、陸修靜、惠遠三人の相對して笑語する圖にして、金色燦爛、所々に散點する珊瑚珠と相映ずる光彩は、筆舌を以て形容す可きに非ず、扨て是れより取出されたる懷石は、例に依つて侯が料理番頭として自ら采配を揮られたる獻立なれば、汗加減など各種調

合のダシにて尋常料理と固より同日の論に非ず、一同舌鼓を打ちて、一箸々々感嘆に餘念なかりけり。

下

懷石終れば、いざ茶室へとの案内あり、一同庭前に下り立ち、更に正門を出て、長者山の麓を廻れば、子安觀音堂の下より茶亭の露地となり、蓬萊山の如き中島ある池邊を十數歩辿り行けば、此處に三疊腰掛附の茅葺待合あり、眼下に池水を見て正面に赤松の群立する小山を望み閑寂の境覺えず人をして神氣清爽ならしむ床には探幽筆富士山に江月和尚の讚ある一軸を掛けられたるが、待つ間程なく、侯爵自身に歩を運び出迎ひあり、風情の爲めにや、同時に打出したる銅鑼數點池水を渡りて響き來るにぞ、更に又池邊を辿りて突當りたる處に茶室あり、軒下の外壁に、侯爵所藏大燈國師の大字魚躍の二字を彫刻したる匾額を掛けられたるが、池邊の茶室には誠に適當なる文字にて、此庵號としては動かす可からざるものならん、蹲踞石は天然石にて檜の大木の下に据ゑられ、石燈籠の配置萬端殘る方なく、是れが今春、侯爵の指圖に依りて新に出來上りたる庭園とは、何人も想像する能はざるべし、扱て一同盃嗽して入席すれば、三疊の茶室の床に定家卿の初冬宿大原草庵書懷の長詩一篇を懸けらる、定家卿の歌は毎度見受けたれども、詩に至つては珍しく殊に自作にて、結句に

忘歸日暮京華北

瞻望欲留南雁飛

とあり、蓋し定家の一品物として最も珍重すべきものならん、侯爵の流儀として、一軸の前に香爐と香合を置くが恆例にて、此處にも相變らず同様の飾付あり、香爐は有名なる名物淺間香合は是れも有名なる堆朱の雁紋とて、飛雁一匹の模様ある者なり、其傍に色繪阿蘭陀の花入を置きて、之に紫色の牡丹二輪を挿みたるは、茶室の飾付として餘り潤澤過ぐれども、是れが侯の侯たる所以ならん、代點は池内就富翁にて器物は左の如し、

釜

明珍製

茶入

仁清作
黑白段筋あり

茶碗

光悅作
銘錦木

茶杓

佐川田昌俊作
銘田子浦

杓立

青磁罽

光悅茶碗錦木は赤地に處々青藥の斑點あり、錦木の名も其色合に因みたるならん、佐

川田昌俊の茶杓は至つて珍しきのみならず、銘が田子浦とありては如何にも此席に打つて付けにて、侯爵が茶器取合せに就き、慘澹たる苦心の程を思ひ遣れば、誠に有難き事なりけり、尙ほ引續き薄茶も出て、様々の器物も現はれたるが、中にも薄茶々碗の空中作は銘を巖と云ひ、八十一老漢紫翠深省の箱書にて、

溪のみつ峰のたきゝに時雨して

いはほのなかも暇なの世や

とあり、其形巖の如く、一見奇古頗る愛す可き者なり、斯くて余は歸京を急げば、益田鈍翁野崎幻庵と共に盡きぬ名残を惜しみて、侯爵夫婦に暇乞し、馬越化生、白石村治の兩氏より一足御先に失敬しけるが、益田鈍翁は國府津より下車して、小田原の掃雲臺に歸り、余と幻庵とは同夜九時新橋にて分袖せり。

釜博士歳晚茶會

(大正三年十二月二十四日)

甲

醫學博士瀨川昌者氏は釜癖道人と稱し、年來茶の湯釜を愛する癖あり、已に蒐集したる釜數三百個に達したるを、製作の時代に依り、作者の流派に因みて類別的に陳列し、刀圭の餘暇、其研究に餘念なき由兼て聞き及びたるが、此程石黒況翁の茶會にて偶然博士と同席し、談茶湯釜の事に及びたるに、兼て御一覽を乞ひたしと思ひ居たれば、不日御案内申すべしと豫約せられけるが、程なく來書に十二月二十四日午後四時より來宅あれかしとの事なり、斯くて相客は石黒況翁、益田鈍翁、瓜生百里、吉田楓軒なりしが、苟も茶湯釜を御覽に入れんとする以上は、手料理なりと差上げて是非一服參らせんと、の振れ込みにて、駿河臺西紅梅町なる博士の洋館診察所に隣接する三疊の寄附に案内せられたるに、ぞ先づ壁床に目を注ぐに、其角筆粗畫山水に

木枯や沖より寒き山のきれ

の自讚ある一軸を掛けて、丸爐に鐵瓶、煙草盆に井戸鹽筭の火入を入れて、室の中央に網代組の大火鉢を置かれたる茶人の注意申分なし、抽籤の結果、吉田楓軒が正客となり、此寄附より小庭を隔て、眞向ひなる三疊臺目の茶室に入れば、床には太閤時代に

連歌を以て名高かりし紹巴が慶長元年晦口號於三井寺山下七十三歳として、
なからへて憂き山住みも七十年の

三冬の暮の惜まるゝかな

の一首を書きたる一軸を掛けらる瀬川家は代々舊幕お抱への連歌師なりしに博士より六代前に分家して醫者と爲りたる由なれば其歌の歳暮茶會に適切なるのみならず紹巴の筆蹟は當家に取りて深き因縁ある者なり初め余等が博士より案内を受けたるは恰も當月上旬なれば餘りに手廻し宜き事かなと竊に一驚を喫せしが此一軸を見るに及んで始めて夫れと了解しぬ扱て炭手前と爲りて器物は

炭斗 竹組

羽箒 鶴

香合

瑠璃雀蓋裏に嘉靖年製とあり

炭手前終りて後博士の心籠めたる懷石は左の如し、

汁

三州味噌、嫁菜、

向附

志野焼皿、千葉産こわだ酢、

椀

海老シンツヨ、芽菜、柚、

燒物

鶺鴒寄、

吸物

芽獨活

八寸

椎茸、興津鯛、

酒器

青磁蓋銚子、志土呂燒、及萬古德利、盃數個

菓子

蕎麥饅頭

乙

後座の床は原叟作一重切に白玉椿を生けたるが此竹花入の銘を承れば羅生門と云ふとかや又申し後れたれど釜は與次郎作鬼面銀付にて阿彌陀堂の背稍低き型なり是れは同種中の座像と稱する者なる由博士の説明に依れば箱裏原叟の書付に「利休所持龜が釜仙叟我が所へ持ち來る」とあり龜が釜と云ふは如何なる事とも得知れざりしに近頃に至り利休の娘にて彼の太閤に見初められたりと云ふ龜女の所持せしものなりと分明したりとぞ斯くて濃茶器物は左の如し、

茶入

古瀬戸、遠州銘木魅

茶杓

杉木普齋作、銘破家

茶碗

御木

水指

伊賀焼立鼓

木魅の茶入は小形にて稍芋の子に類し景色も多く山椒は小粒でピリ、の趣あり、茶杓は節の邊に一つ眼の如き割れ目あり曰く木魅曰く破家曰く羅生門など銘柄を考へ來れば鬼面銀付の釜まで牙を鳴すかと思はれて物凄し當邸には紅梅町と云ふ町名の出でたる紅梅あり邸内に枯れ残る大木が即ち其れにて博士が當邸を先住よ

り譲り受くる時も此古木を大切にせよと言ひ繼ぎありたる由扱ては梅花の魂魄も此家に留まる事ならん思へば何となく怖氣立つやうなるに況して歳晚寒月の下に此百物語の材料を取揃へたるは博士の悪戯か但しは鬼面で人を嚇すの類か幸ひ客中に臆病者なく盲目が一つ眼の入道に逢ふて泰然自若たる觀ありしは當年掉尾の一興とも云ふべきなり。

今夕の茶會は博士が其所藏釜を來客に示さんとするに在れば濃茶に續けて山椒切胡麻入松葉の惣菓子出て、匆匆薄茶を仕舞ひて彼の紅梅の老木など一覽の後當邸正面診察場の二階大廣間に罷り通れば一室四面に架棚を設け時代若くは流派に依りて蘆屋天猫寒雉など夫れ々之を類別し茶湯釜凡そ三百許り陳列せられたるには一同相顧みて膽を消し彼の化物然たる茶器の銘には辟易せざりし來客も此に至つて到頭腰を抜かしたるぞ可笑しき。

丙

瀬川博士は西洋館樓上の一室に四面架棚を設けて其上に所藏の釜凡そ三百許りを

陳列したる中に余等を案内し余等が椅子に倚りて周圍を見廻す其前に立つて手に長杖を携へ學校教師が黑板の前にて生徒に問題を説明するが如く蘆屋天猫寒雉京作と鑄釜技術の變遷を示し名越彌七郎善正辻與次郎一旦西村道仁の三人を以て古來釜工の三傑と稱し其製作に係る釜の地肌模様形状雅味等に關し實物に就て一々研究談を述べ更に大西派堀派飯田派下間派等に就き釜毎に添附したる作者の名號を示して其特徴及び變化を説明されたるが釜に就ては多年集藏家として將た研究家として苦心丹精尋常にあらざれば暖味なる茶人宗匠の品評とは固より同年の談に非ずして頗る傾聴に値するものあり左れど其所見を詳細に代言するは今姑く之を擱き博士が何故茶湯釜を蒐集せしかと云ふ經歷談中に就き重立ちたる事項數條を擧げて其釜癖の由來一般を示すべし。

一釜は茶具中最も重要なるものにて席入の初めより退室の終りまで寸時も席を離れずして主客の目に留るものなれば其精粗雅俗は茶席全體の品位に關し主人が趣味の程度をも判斷すべきものにして其選定に就ては最も留意せざる可からず。

一茶湯釜は一種の美術的製作品にして尋常一片の鑄物に非ず、朝夕愛撫賞翫すれば無限の興趣を催す事、他の繪畫彫刻等と異ならず、然るに世間一般の茶人が釜に關する趣味乏しく、隨つて其鑑識なく之を保存するの途さへ心得ざるは痛嘆に堪へず。

一茶人釜の大切なるを知らず、又之を取扱ふの道を知らず、動もすれば釜の生命を危ふするが如き危険を冒す者あり、而して新に之を製作する者とはなく、古釜の次第に消滅するに至れば、日本の美術社會より名釜の影は消盡し去りて之を補ふの途なかるべし、今や釜師として専門に世に立つ者は唯八十の老翁立松山城一人あるのみ、茶湯釜の運命又心細きに非ずや。

丁

釜博士は世間の茶人者流が釜の當然要求す可き美術的權利を認めず、剩へ慘酷なる取扱を爲して其生命を危ふするを憤り、釜の擁護者として幡隨院的態度を取る者にして、釜の爲めに世人に要求する條件數々あり、本來釜は茶人のみ賞翫すべき

ものに非ず、文人でなくても硯を愛し、武人でなくても刀を愛する者がある以上は、茶人でなくても茶湯釜を愛する者がある筈である、釜は床の間若くは床脇に安置して立派なる裝飾品となる、尾上釜の如きは其形狀に依つて香爐と見ること出来る、彼の大講堂と稱する大釜は香爐より思ひ付いて其形を摸したものであるから、直に香爐として差支ない、又香爐釜と稱して香爐に擬したものもある、銀閣寺に陳列してある義政遺愛の釜が即ち其れである、又筒釜、九輪釜、船形釜などは、或は置花入、或は釣花入として鐵製物を代表する古雅なる裝飾品となるべき筈である、云々として、釜の應用法を勸告して居る。

博士は又現代茶人の釜に對する嗜好が甚だ下劣なるを指摘して、近來茶人の間に持て囃さるゝ釜は大なるよりも小なる方を取り、形の普通的にて丸釜とか尻張とか阿彌陀堂とか古來在りふれたるは賞翫せず、地肌も單純なるものよりも地紋があつたり下繪があるものを珍重すれども、本來釜は小なるよりも大なる方が立派で、形も丸釜、平釜、筒釜、眞形、尻張、阿彌陀堂など平凡なる形が自然であつて、他の小細工を弄して

種々の形状を摸したよりも遙に高尚なのである、中に就て阿彌陀堂は流石利休の賞翫した程あつて、丸釜の柔かい處と尻張の頑丈な處を折衷して剛柔調和し、威あつて猛からざる大和武士の面影を髣髴せしめ、釜の形状に於て是れ程威嚴を具備したものは無いのに、世の茶人者流が阿彌陀堂と云へば平凡にして賞翫するに足らずと云ふは、其釜に關する趣味の劣なる一證であると言ひして居る。

戊

釜博士は茶人が道具拜見の際釜を遺却し居る事を歎慨し、茶人は茶碗、茶入、茶杓等を細密に拜見しながら釜の拜見を疎略にするは抑々間違ひである、從來釜拜見の方法は唯座上に据ゑた儘一見するのみで、地肌、地紋等細微の點まで明瞭に拜見せぬやうであるが、濃茶が濟んで薄茶を列席にて出す時は湯を拂ひて其席に持ち出し、他の諸道具の書付等と一列に廻覽せしめ、若し席を變へぬ時は換釜と取換へて之を示すが當然であると教示して居る。

博士は又世間の茶人者流が釜の取扱を知らぬを憤慨して、茶入や茶杓は袱紗で取扱ひながら釜は素手で取扱ひ、天然鑄た儘の色彩を保存すべき釜に脂手で觸り、最も汚點を嫌ふべき鍔付を脂ぎらしてぴか／＼させるは何たる殘酷な事であるか、釜は蓋を取つて其中に四本の指を入れて、内部より肩の邊りを支へて斜に倒して廻轉しながら拜見すべきものである、尙ほ鄭重にするには袱紗なり懷紙なり手に持添へて取扱ふべき筈である、又釜を使つた後は毛布で甲底を叮嚀に洗ひ直に乾かし、裸の儘箱に納め、何ももの肌に觸れぬやう注意して乾燥した場所に置き、或は濕氣のない棚の上に裸の儘伏せるか、又は起して安置するが最も好い保存法であると忠告して居る、博士の釜に就て教示する所は大略前述の如くであるが、此他釜に關する博士の所論は尙ほ澤山あるやうである、其所論に就ては一々感服する能はざれども、兎に角茶湯釜一點張りにて、斯く熱心に研究するのは、斯道の爲めに洵に稀有の恩人と言はざるを得ぬ、博士は隠し藝として更に詩を能くし、其所藏古天貓作陣中湯沸しの釜に題する詩は左の如くである、

珍襲吾家古鐵鑄

經年七百有餘霜

軍門會救英雄渴

挿得千花不絶香

博士は子孫に遺言して、我が滅後家財道具は何を賣つても宜しいが、釜だけは大切に保存せよと云ふ積であると語られた、左れば紅梅町の瀬川家には爐上の松風が永く其音を絶たぬであらう、

くれなるの梅咲く宿に千代かけて

たえせさらまし松風の音

御殿山復讐茶會

(大正三年十二月二十九日)

上

東都茶人中にて一年中に茶會を開くこと最も頻繁なるは太郎庵主益田鈍翁なるが、二三ヶ月來雜務の纏綿する所と爲りて脆くも敵に後を見せたるを遺憾とし、此程來茶事に招かれたる人々に對し、最早一兩日と云ふ年の瀬に臨んで一番復讐的茶會を催すべしと聲言して、臘末二十九日果し狀を差向けたるは、先般來鈍翁を引寄せてそ

れ、其武者振を示したる益田紅艶野崎幻庵山澄宗澄及び余の四客にて末客は古筆了任と云ふ顔振れなりしが、場所は例の太郎庵にて、寄附の床には近衛豫樂院公筆大神樂獅子舞の圖を掛け、下に時代蒔繪の小硯箱を置きたり、圍爐裏には竹自在に仙叟好焼飯釜を掛け、根來の香煎入に祥瑞竹の節丸紋の蓋置、宋胡祿の火入など雜兵に至るまで何れも一騎當千なるは、勇將の下に弱卒なき當家の特色、感服に堪へたり、頓て紅艶を正客に推して入席すれば、床には頸細く尻大なる時代瓢に葉色美しく染めたる小田原より到來の寒菊一枝を挿みたる風情一言もなし、諦視すれば瓢の背部に紹鷗が朱書にて「たぬき福」として、宗旦が黒漆にて

うち向ふ床の眺めはたぬき福

似せをかけつゝ花と契らん

と書付けたるは、兩宗匠とも此瓢を狸に見立てたるものなるべし、釜は猿の鑲付にて肩の邊の大窠れを釜にて打付け、唐草の如き一線の胴を繞るが面白く、地肌より判斷すれば天猫作ならんか、寒中の釜としては稍小形なるやうなれども、歳暮の寂びに